

今日、地球上に分布する昆虫の分類別の目による種類数は、『日本動物大百科 昆虫Ⅱ・Ⅲ』(1997・1998, 平凡社)によると次のように推定されている。多いものから順に 1. コウチュウ目約 37 万種、2. チョウ目約 20 万種、3. ハチ目約 12 万種以上、4. ハエ目約 11 万種で、おそらくこれは昆虫類が熱帯原産で降雨林の中で多様化したという事実からの推定と思われる。温帯の日本ではまだ種類のすべてがわかっていないが、上述の種数の比に準じているものと考えられる。

東京都においても昆虫の種数は非常に多く、今回の評価は委員が専門としている目ごとに担当し、記録文献の選択と種ごとのランクの判定にあたった。しかし、この作業は困難を極めた。客観的な評価を行うためには、過去から現在に至る各種の分布、生息状況、その変化の把握が不可欠である。隣接する埼玉県、神奈川県、千葉県では、1990 年代以降、相次いで県単位の昆虫誌や目録が作成され、地域博物館や同好会誌などにも多くの資料や記録が集積されているために、その概要を知ることができる。しかし、東京都においては、皇居など、限定された場所についてのまとまった報告は見られるが、比較的最近のものとして広域を対象としたものは、ごく限られていた。

そのため、定量的評価をしようにも情報量そのものが少なく、定性的評価しかできない場合が多々あった。結果として、定量的要件と定性的要件の両方を用いて評価を行った。

また、前回(1998 年版)の選定種の中には、分布の根拠となる文献・情報を収集できなかったものもあるが、これらについては今回収集した文献や情報を優先して評価を行った。今回の評価に際しても、分布・生息の可能性が十分考えられるものの当該地域の記録が見当たらなかったものが少なくないが、これらは「データ無し」として扱った。

また、地域区分ごとの情報量の差が大きく、評価できない地域が多くあることが想像されたため、区部、北多摩、南多摩、西多摩の 4 地域区分に加えて、本土部全体のランクをつけた。なお、本土部全体の評価は、当然のことだが全体的な知見からの評価であるため、各地域のランクとは必ずしも整合しないが、本土部全体の傾向を示しているため、各地域のランクの使用にあたっては、地域ごとの評価だけでなく本土部全体の傾向にも配慮する必要がある。

(矢島 稔)

(1) トンボ目

1 選定・評価方法の概要

東京都本土部のトンボ目は古くから記録されており、すでに1932年には目録が作成されている(奥村定一,1932. 東京産蜻蛉目目録. 昆虫, 5(5):209-215.)。現在までに、東京都本土部から記録されたトンボ目は90種(明らかな偶産種*を除く)である。これは全国的にも上位に位置する種数であり、面積的に狭小なことを考えると、種多様性の極めて高い地域であることがうかがえる。しかし、他の分類群同様、高度成長期以降の大規模開発や生活様式の変化に伴い、多くの種で衰亡が見られ、現存種数や生息状況から見た場合、今や全国的に最も貧弱な地域の1つとなっている。特に区部や隣接する北多摩の一部にしか記録のないオオセスジイトンボ、コバネアオイトンボ、メガネサナエ、マダラヤンマ、ベッコウトンボ、オオキトンボなどの種では、その多くが絶滅状態となっている。また、東京で得られた材料を基に記載されたものとして、オオモノサシトンボ(葛飾区水元)、グンバイトンボ(三鷹市井の頭)があるが、どちらも東京からの確実な記録が途絶えて久しい。

比較的最近のものとしては、皇居(友国雅章・斎藤洋一,2000. 皇居のトンボ, 国立科学博物館専報, (36):7-18.、斎藤洋一・大和田守・加藤俊一・井上繁一,2006. 皇居のトンボ類モニタリング調査(2001-2005). 国立科学博物館専報, (43):383-406.)など、限定された場所についてのまとまった報告が見られる。一方、広域を対象としたものは大森武昭(1983. 多摩川水系のトンボ相とその生態. とうきゅう環境浄化財団(一般)研究助成, (31):1-56+PL12.)や、1990年代から都立稲城高校、南多摩高校の部活動として行われ、各部報など(例えば、都立稲城高校野外活動部・都立南多摩高校生物部,1997. 多摩川水系の流水性トンボ調査. 東京トンボ研究会資料.)に報告されている一連の調査程度で、どちらも多摩川水系流域を対象としており、都レベルとしてはまとまったものは全くない状況である。しかし、トンボ目は関心の高い分類群であることから、個々の報告や情報は比較的多く、それらを丹念に拾い集めることによって、区市町村別レベル程度の分布や記録の変遷などの情報を一定程度把握することが可能であった。

そのため、今回は、より客観的な評価の試みとして、定量的要件による判定を試みた。基本となるのは既知生息地数に対する現存生息地数であり、これによって算出される減少率に、生息条件や個体群の維持に重要と考えられる5つの補正項の数値を加えた補正減少率を基にランクを決定した。絶滅危惧Ⅰ類のランクについては、絶滅危惧ⅠA類(CR)と絶滅危惧ⅠB類(EN)を区別した。過去の記録は戦前のものも含めて採用した。生息地の定義については基本的に区市町村とし、詳細が明らかになっている一部の種については具体的な生息(記録)地数を用いた。また、一部において現地調査も行った。同様の評価手法はすでに愛知県と神奈川県で試みられており、今回用いた定義や判定基準などについてはそれらを参考として決定した。

定量的評価を行うためにはより多くの確実な情報を収集する必要があるため、日本蜻蛉学会員を中心とした方々に未発表記録や生息状況、文献資料などを提供していただいた。

検討対象種は、1998年版に掲載されている67種に、今回新たに検討対象として12種を加えた79種とし、これらについて評価を行った。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、59種が本レッドリストの掲載種に選定された。基本的に定量的判定による数値によってランク付けを行ったが、区市町村レベルでは減少が見られない一方で、個々の生息地レベルでの減少が著しい種や、十分な情報が収集できなかった一部の種については、定性的要件を用いて最終的なランクを決定したものもある。また、当然のことだが、絶滅危惧に該当するかどうかで判定したため、記録がごく少ないなど希少性が高くとも、現状として生息環境・状況が安定

的であると判断された種や、増加傾向にある種についてはランク外とした。

地域区分別では、区部で何らかのランク付けがなされ他地域よりランクが高くなった種、次いで北多摩地域でランク付けがなされた種が多い。これは区部や北多摩地域での生息環境の改変の方が南多摩地域や西多摩地域より大きいことを示している。このような種も南多摩地域や西多摩地域では比較的健在な場合があり、これによって該当地域や本土部全体ではランクが低い、またはランク外となった種もある。しかし、これは、その地域にしか安定的な生息地が残されていないことや、生息環境の改変に脆弱であることを示しているため、ランク外だからといって全く配慮しなくともよいということではない。

一方、池沼性の種については、区部の方が他地域に比べてランクが低くなったものが見られる。これは生息環境としての池沼が区部に多く、公園などに組み入れられて残されているのに対し、多摩地域には元来少なく、現在では極めて限られていることに起因するものである。

なお、近年になって、明らかに人為的な放虫に由来すると判断されるものや、その可能性が強く疑われる記録や個体群も存在している。これらについては、確実性の高いものは評価から除外した。

*偶産種：その地域では定着していないと判断される種。台風や季節風などによって偶発的に飛来する種などが該当する。

(須田 真一)

モートンイトトンボ

Mortonagrion selenion

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	CR	CR	CR	NT

【形態・生態】

腹長 18 ～ 24mm。頭部眼後紋は弧状。成熟♂の腹部末端数節は鮮やかな橙赤色。未熟♀は全身橙色であるが、成熟すると鮮緑色となる。春から夏に見られる。

【分布の概要】

北海道(南部)、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の草丈の低い明るい湿地に生息し、植生遷移初期の休耕田にもよく見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部から多摩地域の平地ではすでに絶滅したと判断される。多摩地域の丘陵地では谷戸の湿地に生息しており、休耕田の増加に伴い一時期各地で記録されたが、西多摩の一部を除きほとんど姿を消した。生息環境が植生遷移の進行や乾燥化によって容易に失われるため、生息状況は常に不安定である。現存生息地は定期的な草刈りなどによって維持されており、管理作業が停止すれば短期間のうちに絶滅すると考えられる。

【関連文献】

枝重夫ら, 1970; 大森武昭, 1983.

(執筆: 須田真一)



ヒヌマイイトトンボ

Mortonagrion hirosei

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	□	□	□	CR	EN

【形態・生態】

腹長 18 ～ 24mm。頭部眼後紋は 4 個に分かれ、♂の前胸には 4 個の円紋がある。未熟♀は全身橙色で頭頂には五角形をした特徴的な黒斑があり、成熟すると全身褐色となる。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

大河川下流域の感潮域のヨシ原にのみ生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩川(最下流域)と荒川(足立区に至る範囲)から記録があり、多産地もあったが、河川工事などの影響により 1990 年代以降激減し、ほぼ全ての既知生息地で絶滅かそれに近い状況である。生息地はどれも小規模で、本種の生息環境として実際に機能している範囲はさらに限られる。今後河川工事や出水などにより生息環境が変化した場合は容易に絶滅するものと考えられる。人為的な生息地の創出は困難なので、代替措置よりも現存生息地の保全が望ましい。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 加納一信, 1994.

(執筆: 須田真一)



キイトトンボ

Ceriagrion melanurum

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	CR	NT	EN	EN	

【形態・生態】

腹長 23 ～ 35mm。太身で♀の方がわずかに大型。♂の腹部は鮮やかな黄色で、末端部の背面には黒斑がある。♀は斑紋がなく、全身が黄色の個体と緑色の個体がある。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼や水溜りのある湿地に生息し、河川敷の池に見られることもある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は普通種だったが、現在では分布が局限され生息状況も概ね不安定。減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などが挙げられるが、捕食性外来生物の影響も無視できない。止水性イトトンボ類の多くは水生植物が豊富に生育する岸近くの浅い水域を好み、護岸整備や水生植物の除去などの影響を受けやすい。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



ベニイトトンボ

Ceriagrion nipponicum

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

【形態・生態】

腹長 27 ～ 33mm。やや太身で♀の方がわずかに大型。体に斑紋はなく、♂は全身が鮮やかな朱赤色、♀はややくすんだ燈赤色。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州(宮城、関東以南)、四国、九州

【都における生息環境】

平地の水生植物の豊富な池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は区部に限られ、既知の生息地の多くでは絶滅。現在も安定的に生息するのは皇居のみ。一方、2000年代以降記録が増加し、人為的な水域ビオトープに多産する例もあるが、これらは自然移入、人為導入(水生植物に随伴、または放虫)いずれの可能性もある。近年競合関係にあるリュウキュウベニイトトンボが人為導入により横浜市で発生している。分布を拡大して本種の生息地に侵入した場合、本種がリュウキュウベニイトトンボに置き換わってしまうおそれがある。

【関連文献】

斉藤洋一ら, 2006; 荻部治紀, 2007.

(執筆: 須田真一)

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
VU	—	—	—	VU	NT



ムスジイトトンボ

Cercion sexlineatum

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

【形態・生態】

腹長 21 ～ 25mm。♀の方がわずかに大型。♂♀ともに頭部後頭条がない。成熟♂は鮮やかな青色の地に黒斑がある。♀は黄緑～黄褐色の地に黒斑があるが、同属他種に酷似する。春から秋に見られる。

【分布の概要】

本州(東北南部以南)、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地の水生植物の豊富な池沼や水溜りのある湿地に生息し、主に沿岸部や大河川沿いに生息地が点在する。埋立地の水溜りや調整池にも生息するが、造成工事や乾燥化で多くの場所で見られなくなり、現在では公園の池沼や人為的な水域ビオトープなどに生息することが多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多産地から突然消滅したり、急に発生する場合があることから、生息地間の移動を行いながら発生と消滅を繰り返していると推測される。ごく最近に多摩地域で確認情報があり、今後内陸へ分布を拡大する可能性がある。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 斉藤洋一, 2004.

(執筆: 須田真一)

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
○	DD	DD	●	○	



セスジイトトンボ

Cercion hieroglyphicum

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

【形態・生態】

腹長 21 ～ 29mm。♀の方がやや大型。成熟♂は鮮やかな淡青色の地に黒斑がある。♀は黄緑～黄褐色の地に黒斑があるが、同属他種に酷似する。春から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼や水溜りのある湿地、緩やかな流れに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は普通種だったが激減し、特に池沼などの止水環境ではほとんど見られなくなった。減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などが挙げられるが、捕食性外来生物の影響も無視できない。多摩川流域には近年まで多産地も知られていたが、特に環境変化のない場所でも、要因は不明ながらここ数年の間に著しく減少している。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
CR	CR	○	○	EN	



オオイトトンボ

Cercion sieboldii

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	EN	VU	EN	

【形態・生態】

腹長 22～29mm。成熟♂は鮮やかな淡青色の地に黒斑がある。♀は黄緑～黄褐色の地に黒斑があり、淡青色の個体も比較的に見られるが、同属他種に酷似する。春から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼や水溜りのある湿地に生息する。多摩地域には限られた場所に生息地が残され多摩川やその支流などでは河川敷の池にも生息するが、生息地の規模は小さく個体数も少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

各地の記録はあるが、現在の分布は局所的で減少著しい。減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などが挙げられるが、捕食性外来生物の影響も無視できない。また、生息環境は植生遷移の進行や出水の影響も大きいため生息状況は不安定である。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



オオセスジイトトンボ

Cercion plagiosum

トンボ目(蜻蛉目)
イトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	●	●	●	CR	EN

【形態・生態】

腹長 29～37mm。成熟♂は鮮やかな淡青色、♀は鮮やかな黄緑色の地に黒斑がある。本属中の最大種で、その大きさから同定は容易。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

ヨシやマコモ、ヒンなどが生育する環境を特に好むことから、水生植物の豊富な池沼に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部の公園周辺だけで記録されている。1950年代には多産していたようだが、文献上ではそれ以降の確実な記録は見出せず、最近の調査によっても確認できていない。減少要因は水質悪化や水生植物群落の衰退にあると思われる。1950年代当時は周辺が水田地帯であり、農薬散布の影響も考えられる。ただし、1980年代初頭まではごく少数が確認されていたとの情報や、近年撮影されたという情報もあり、現時点では絶滅と断定できない。

【関連文献】

井上清, 1956; 枝重夫・松木和雄ら, 1970.

(執筆: 須田真一)



ゲンバイトンボ

Platycnemis foliacea sasakii

トンボ目(蜻蛉目)
モノサシトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	●	EX	NT

【形態・生態】

腹長 31～33mm。近縁種モノサシトンボより小型で、♂の中・後脚の脛節が著しく広がる。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州(宮城以南)、四国、九州。

【都における生息環境】

水生植物の繁茂する湧水池や湧水由来の緩流に生息する。区部西部周辺(湧水由来の池など)と八王子市(湧水が豊富な河川)に生息していた記録がある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

井の頭公園が日本産の垂種の基準産地。区部西部周辺では埋立てや河川改修、湧水の枯渇や水質汚染などによって、1960年代前半までに全ての既知の生息地から絶滅した。八王子市では湧水が豊富な河川に生息していたが、最後に確認された北浅川では1982年の台風による出水以降確認されていない。生息環境は残されており現存する可能性も捨てきれないが、再度に渡る詳細な調査によっても確認できないことから絶滅と判定した。

【関連文献】

枝重夫ら, 1970; 伊藤信男, 1980.

(執筆: 須田真一)



モノサシトンボ

*Coper a annulata*トンボ目(蜻蛉目)
モノサシトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	DD	DD	

【形態・生態】

腹長 31 ～ 39mm。♂の中・後脚の脛節はやや広がるが、ゲンバイトンボのように目立たない。腹節ごとにリング状の斑紋があり、和名の由来はこれを物差しの等間隔の目盛りに見立てたことによる。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の樹木に覆われた池沼に生息する。水生植物がわずかに生育する程度でも生息でき、公園や庭園の池、個人宅の庭池などにもよく見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は区部に多く多摩地域では少ない。区部でも武蔵野台地とそこから派生する舌状台地周辺に集中しており、湾岸沿いなどの沖積平野には本来分布していない可能性がある。また、最近になって減少した場所も多く、その要因は明らかでない。今後の動向に注目する必要がある。

【関連文献】

石田裕也, 1999; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆者: 須田真一)



オオモノサシトンボ

*Coper a tokyoensis*トンボ目(蜻蛉目)
モノサシトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	■	■	■	CR	EN

【形態・生態】

腹長 33 ～ 37mm。モノサシトンボよりやや大型。体の黒色部が広く黒ずんで見えること、腹部背面の黒色部は末端まであることなどで区別される。初夏から夏まで見られる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

平地の水生植物の豊富な池沼に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は区部の公園周辺に限られ、継続して確認されていたが、2004年に主要発生地での水生植物の抜き取りを伴う改変以降、確認できなくなった。その後の幼虫を含めた再調査でも確認されていないが、生息の可能性は残されているため現時点では絶滅とは断定できない。

【関連文献】

朝比奈正二郎, 1956; 加納一信, 2005.

(執筆者: 須田真一)



アオイトトンボ

*Lestes sponsa*トンボ目(蜻蛉目)
アオイトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	VU	○	NT	NT	

【形態・生態】

腹長 28 ～ 34mm。♂♀ともに地色は黄白色で、翅胸背面は金属光沢を持つ緑色。成熟すると地色は黒ずみ、♂では翅胸の下半分と腹端部に青白色の粉をまとう。春から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼や水溜りのある湿地に生息する。区部の記録は東部に多く、多摩地域では多摩川流域に集中し、狭山丘陵にも生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では埋立地の水溜りや調整池などに生息するが、近年では造成工事や乾燥化に伴い多くの場所で見られなくなった。現在は公園内の池沼や人為的な水域ビオトープなどに生息することが多く、生息に適した環境が作られるとすぐに姿を見せることもある。多摩川流域では河川敷の池や湿地にも生息しているが、河川工事や出水などの影響により生息状況は不安定である。

【関連文献】

石田裕也, 1999; 斉藤洋一, 2004.

(執筆者: 須田真一)



コバネアオイトトンボ

Lestes japonicus

トンボ目(蜻蛉目)
アオイトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	○	○	○	EX	EN

【形態・生態】

腹長 28～33mm。♂♀ともに地色は黄白色で、翅胸背面は金属光沢を持つ緑色。アオイトトンボの未熟個体と紛らわしいが、成熟しても翅胸には粉をまとわないことや、後頭部の後ろ側が黄白色であることなどで区別される。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の水生植物の豊富な池沼に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録があるのは水元公園周辺だけである。1950年代には多産していたようだが、それ以降確認されたという情報や文献記録は見出せないこと、最近の調査によっても確認されないことなどからすでに絶滅したと判断される。その要因は水質悪化や水生植物群落の衰退にあると思われる。当時は周辺が水田地帯であったため、農業散布の影響も考えられる。全国的にも減少が著しく、絶滅が危ぶまれる。

【関連文献】

枝重夫, 1960; 枝重夫ら, 1970.

(執筆: 須田真一)



オツネントンボ

Sympecma paedisca

トンボ目(蜻蛉目)
アオイトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	NT	NT	VU	

【形態・生態】

腹長 26～31mm。淡い褐色の地に鈍い銅金色の斑紋がある。静止した状態で前翅と後翅の縁紋がきれいに重なり合う。成熟しても体色はほとんど変化しないが、複眼は鮮やかな青白色となる。初夏から見られ、成虫で越冬する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼、水溜りのある湿地や湿田に生息する。近年区部ではほとんど見られなくなり、現在では多摩地域の丘陵地に生息地が点在するほか、多摩川河川敷の池や湿地にも生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などが挙げられるが、捕食性外来生物の影響も無視できない。成虫越冬するため、越冬環境の悪化も考えられる。河川敷の生息地では河川工事や出水などの影響も大きく生息状況は不安定である。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



ホソミオツネントンボ

Indolestes peregrinus

トンボ目(蜻蛉目)
アオイトトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	VU	NT	○	NT	

【形態・生態】

腹長 28～32mm。未熟な個体は淡い褐色の地に鈍い銅金色の斑紋がある。成熟するとめは全身が鮮やかな青色、♀ではくすんだ青緑色となる。オツネントンボとは、静止した状態で前翅と後翅の縁紋がずれて重なることで区別できる。夏から見られ、成虫で越冬する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼、水溜りのある湿地や湿田に生息する。近年、区部から多摩地域の平地で減少している。多摩地域の丘陵地には生息地が点在しており、オツネントンボよりも普通で、混生する場所も知られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などが挙げられるが、捕食性外来生物の影響も無視できない。成虫越冬するため、越冬環境の悪化も考えられる。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)



アオハダトンボ

*Calopteryx japonica*トンボ目(蜻蛉目)
カワトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EN	VU	EN	NT

【形態・生態】

腹長 40～48mm。♂の翅は紺色、表側は青藍色で、腹部まで緑色の強い金属光沢がある。♀の翅には白い偽縁紋がありよく目立つ。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水辺にツルヨシなどが繁茂する河川中流域や湧水に涵養される水生植物の豊富な流れに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では 1930 年代には武蔵野台地の湧水地から流れ出す河川に多産していたが、埋立てや河川改修、湧水の枯渇や水質汚染などにより、1960 年代前半までに全ての既知生息地で絶滅した。南多摩では多摩川の支流に生息していたが、1982 年の台風以降確認されていない。西多摩では多摩川の一部および支流に生息しており、支流では比較的安定して生息している。しかし、河川工事や出水などにより容易に減少すると考えられ、一時期記録が途絶えていた時期がある。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



ハグロトンボ

*Calopteryx atrata*トンボ目(蜻蛉目)
カワトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	○	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 40～48mm。♂の翅はつやのある黒色で、腹部まで緑色の強い金属光沢がある。♀の翅と腹部は濃褐色。アオハダトンボとは、♂♀ともに翅の前縁に緑色の強い金属光沢はないこと、♀の翅に偽縁紋はないことなどで区別される。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物が繁茂する河川や水路など、広範な流水環境に生息し、以前は各地で普通に見られた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部を除く多摩川中流域では普通。区部の中小河川などでも見られるが、生息状況は不安定。区部の中小河川では埋立てや河川改修、湧水の枯渇や水質汚染などにより激減し、記録が途絶えた時期があった。多摩川でも中流域ではほとんど見られなくなった時期があったが、1990 年代から回復傾向にある。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



ニホンカワトンボ

*Mnais costalis*トンボ目(蜻蛉目)
カワトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	VU	—	EN	

【形態・生態】

腹長 37～44mm。成熟♂では白い粉をまとう。♂の翅は透明な型と、基部を除いて橙色の型の 2 型がある。♀の翅は例外なく透明。アサヒナカワトンボとは形態的に酷似する。本種は武蔵野台地周辺から多摩丘陵(おそらく狭山丘陵も)、アサヒナカワトンボは南多摩の山地周辺、西多摩の丘陵地から山地に記録がある。多摩丘陵では八王子市西部付近に両種の分布境界があるものと推定される。春から夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

湧水に涵養される中小河川や細流などに生息する。

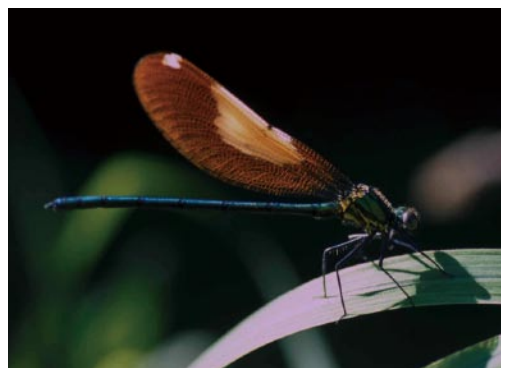
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種の分布域では、埋立てや河川改修、湧水の減少枯渇や水質汚染などの影響が特に大きく、すでに丘陵地に数ヶ所程度の生息地が現存するのみであり、平地では絶滅状態であると考えられる。

【関連文献】

林文男ら, 2005; 二橋亮, 2007.

(執筆: 須田真一)



ムカシヤンマ

Tanypteryx pryeri

トンボ目(蜻蛉目)
ムカシヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	VU	EN	EN	EN	

【形態・生態】

腹長 44～54mm。黒地に黄色斑があり、老熟すると灰色味を増す。♀の方が太身でやや小さく黄色斑も鮮やか。複眼は灰色がかった黒褐色。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から低山地に局地的に分布し、年間通じて湧水が滴り落ちる崖地や斜面に生息しており、コケ類が繁茂するような場所を好む。現存生息地は少なく個体数も全般に少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去、多摩丘陵では比較的多くの生息地が知られていたが、開発などに伴い十分調査されないままその多くは失われた。わずかな水量で安定した湧水に依存するため、開発や干ばつなどの影響を特に受けやすい。生息地は残されていても周辺の開発によって湧水が不安定となるだけで容易に絶滅するため、保全のためには集水域を含めた対策が望ましい。

【関連文献】

朝比奈正二郎, 1957; 苅部治紀, 1998.

(執筆: 須田真一)



メガネサナエ

Stylurus oculatus

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	○	○	○	EX	VU

【形態・生態】

腹長 44～49mm。黒地に黄色斑があり老熟すると灰緑色となる。♂の腹端は顕著に、♀でもやや広がる。その下面は鮮やかな黄色である。ナゴヤサナエに酷似するが、腹部の黄斑は上下に分かれるため背面から見るとスポット状となる。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

大河川の下流域に生息していたと考えられる。

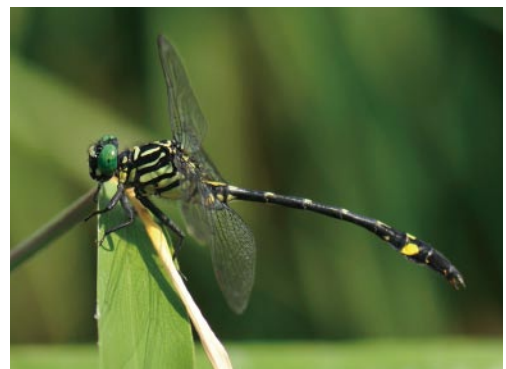
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部で 1930 年代以前に記録されているのみ。それ以降の記録は見出せず絶滅と判断される。当時の詳しい生息状況や絶滅要因などについては不明。過去の記録はナゴヤサナエとの混同が指摘されており、確実なものとしては新宿区(原記載論文に用いられた♀)の記録がある。

【関連文献】

朝比奈正二郎, 1957.

(執筆: 須田真一)



ナゴヤサナエ

Stylurus nagoyanus

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	DD	VU

【形態・生態】

腹長 42～46mm。♂の腹端は顕著に、♀でもやや広がる。その下面は鮮やかな黄色である。メガネサナエに酷似するが、やや小型であり、腹部の黄斑は上下に分かれずリング状となる。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

大河川の下流域に生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

成虫や羽化殻は近年も散発的に記録されているが生殖活動の観察例はない。本種の場合、下流で羽化した成虫がかなり上流で生殖活動を行うことが知られているため、荒川、江戸川については東京都本土部のみで生活環を完結していない可能性がある。千葉県側の江戸川では、航行波によって羽化中の個体が流されることが、釣り人の踏みつけによる影響が指摘されており、東京都本土部においても同様の影響が考えられる。

【関連文献】

斉藤洋一ら, 1991; 苅部治紀・吉武美保子, 2000.

(執筆: 須田真一)



ヤマサナエ

Asiagomphus melaenops

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EN	VU	VU	EN	

【形態・生態】

腹長 44 ～ 48mm。キイロサナエに酷似するが、頭部上唇に黄斑がないことや、胸部の斑紋が異なることで区別される。♀の産卵弁は板状で短く、腹部側面から見た状態で目立たない。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

流れが緩やかな河川や水路などに生息し、特に谷戸の水路など小規模な砂泥底の流れを好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は各地で普通に見られたが、現在は多摩地域の丘陵地に数ヶ所の生息地が知られるのみである。埋立てや河川改修、湧水の枯渇や水質汚染などによって個体数が減少し、区部では既知生息地の全てで絶滅した。多摩丘陵では各地に生息していたようだが、開発などに伴い、その多くは十分調査されないまま失われ、現在では小規模な生息地が残されているに過ぎない。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆者: 須田真一)



キイロサナエ

Asiagomphus pryeri

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	CR	—	CR	NT

【形態・生態】

腹長 43 ～ 49mm。ヤマサナエに酷似するが、普通は頭部上唇に2個の黄斑があることや、胸部の斑紋の違いで区別される。♀の産卵弁はくさび状で長く、側面から見ると下方に突き出す。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の流れが緩やかな河川や水路などに生息し、ヤマサナエに比べてより細かな底質の流れを好む。ヤマサナエに比べて記録は少なく、生息地は局地的。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立てや河川改修、湧水の枯渇や水質汚染などにより 1980 年代以前に知られていた生息地の全てで絶滅した。現在では 1980 年代に新たに発見された多摩丘陵の生息地が知られるのみで、そこでも幼虫の見られる範囲は局限され個体数も少ない。ただし、他にも生息地が残されている可能性はある。

【関連文献】

奥村定一, 1932a; 荻部治紀, 1998.

(執筆者: 須田真一)



ホンサナエ

Gomphus postocularis

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	VU	NT	NT	VU	

【形態・生態】

腹長 33 ～ 36mm。体つきが著しく太短い。黒地に黄色斑があり老熟すると灰緑色となる。翅胸前面の条は太く上下端が曲がりZ字型となる。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河川や水路などに生息し、砂泥底の流れを好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩川では中流域に広く生息し、多摩川の支流でも確認されている。以前は各地に生息していたようであるが、埋立てや河川改修、水質汚染などによって激減、一時期全く記録が途絶え絶滅したとされていたが、1990年代より多摩川水系や江戸川で再び見られるようになった。ただし、羽化や成熟個体が見られる場所は限られ、河川工事や出水などにより環境が変化すると容易に減少すると考えられる。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆者: 須田真一)



コサナエ

Trigomphus melampus

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	CR	EN	CR	

【形態・生態】

腹長 26～32mm。他の小型サナエトンボ類とは翅胸前面の条が太い L 字型であることや、翅胸の斑紋、尾部付属器の形状などで区別される。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の樹木に覆われた池沼や水溜りのある湿地に生息する。区部から多摩地域の平地の確実な現存生息地は皇居のみ。多摩地域の丘陵地には数ヶ所の生息地が現存している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は各地で普通に見られたようだが、平地では激減した。減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退、捕食性外来生物の影響などが挙げられる。砂防堰堤の上流に形成された小規模な池にも生息するが、安定した生息地ではない。丘陵地の生息地は孤立しており、成虫の移動分散能力が低いいため、個々の生息地の保全が何より重要である。

【関連文献】

斉藤洋一ら, 2006; 雛倉正人, 2009.

(執筆: 須田真一)



ダビドサナエ

Davidius nanus

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	○	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 31～36mm。クロサナエに酷似するが、翅胸側面の気門周辺まで黄色条が達すること、頭部大顎基部側面に黄褐色部があることなどで区別される。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地の河川や水路など、広範な流水環境に生息する。南多摩の山地周辺や奥多摩では各地の溪流に多く、西多摩の丘陵地でも各地に見られる。多摩川では、現在は中流域に見られる。多摩地域の平地では中小河川に生息するが個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

丘陵地から山地では絶滅のおそれはない。多摩川中流域では一時期減少したが、現在は回復している。平地では、埋立てや河川改修、湧水の減少枯渇、水質汚染などにより激減し、区部では既知生息地の全てで絶滅した。ただし近年、流水性種の回復が見られるので、今後確認される可能性はある。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



ヒメサナエ

Sinogomphus flavolimbatatus

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	○	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 18～21mm。小型で細身。翅胸前面の上部に丸みをおびた三角形の斑紋があり、条は八字形でその他の斑紋とはつながらない。♂の上付属器と♀の尾毛は白色。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地から山地の河川に生息する。多摩川水系では羽化は大きな支流の中下流で多く観察され、本川の中流域でも見られる。成熟個体や生殖活動は山地溪流で見られる。

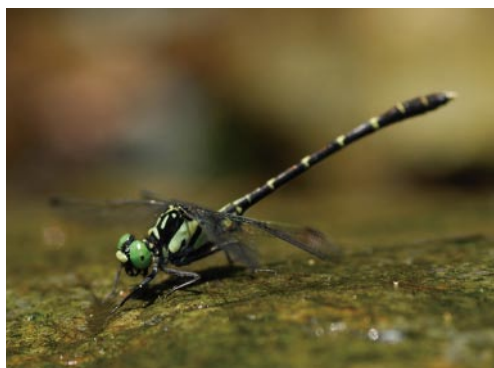
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現状では本土部で絶滅のおそれはないと判断されるが、幼虫は流下しながら成長するため、堰などの横断工作物による移動阻害の影響に留意することが望ましい。オジロサナエも同様の生活環を持つが、本種の方が生息地、個体数ともにずっと少ない。区部では善福寺川で 1930 年代の記録があるが、すでに絶滅したと判断される。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



アオサナエ

Nihonogomphus viridis

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	VU	VU	NT	VU	

【形態・生態】

腹長 37 ～ 43mm。やや太身で翅胸前面と側面の条は著しく太く、成熟すると黄緑色となる。特に♂では鮮やかな緑色になることで容易に区別できる。春から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河川に生息し、川幅が広く砂礫底の河川中流域を好む。多摩川では中流域の各地で確認されているが個体数は少ない。多摩川の支流にも記録がある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や水質汚染などにより激減し一時期記録が途絶えていたが、1990年代より多摩川水系で再び記録されるようになった。ただし、羽化や成熟個体が見られる場所は限られており、河川工事や出水などで環境が変化すると容易に減少すると考えられる。区部では善福寺川で1930年代の記録があるが、すでに絶滅したと判断される。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



オナガサナエ

Onychogomphus viridicostus

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 39 ～ 46mm。アオサナエよりも細身で黒地に黄色斑がある。♂は尾部付属器が長く、特徴的な形を呈する。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河川に生息し、川幅が広く砂礫底の河川中流域を好む。ただし、羽化や成熟個体が見られる場所は限られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や水質汚染などで激減。区部の記録は途絶え、多摩川中流域では絶滅状態となり、西多摩の支流に残る程度に減少した。しかし、1990年代より回復傾向にあり、区部で記録され、多摩川中流域では普通になった。また、中小河川でも見られるようになり、区部にも定着したと考えられる河川がある。ただし区部の隣接地域では個体数も少なく注意が必要で、河川工事や出水などにより環境が変化すると容易に減少すると考えられる。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



コオニヤンマ

Sieboldius albardae

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 53 ～ 66mm。黒地に黄色斑があり老熟すると灰緑色となる。頭が小さく、後脚腿節が著しく長く太い。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河川に生息し、川幅が広く砂礫底の河川中流域を好む。稀に大きな池沼にも見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や水質汚染などで激減。区部の記録は途絶え、多摩川中流域では絶滅状態となり、西多摩の支流に残る程度に減少した。しかし、1990年代より回復傾向にあり、区部で記録され、多摩川中流域では普通になった。また、中小河川でも確認されるようになり、定着したと考えられる河川は区部にもある。しかし、羽化や成熟個体が見られる場所は限られ、特に区部と隣接地域では個体数が少ない。河川工事や出水などで環境が変化すると容易に減少すると考えられる。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



ウチワヤンマ

Sinictinogomphus clavatus

トンボ目(蜻蛉目)
サナエトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	NT	VU	VU	NT	

【形態・生態】

腹長 52 ～ 60mm。黒地に黄色斑があり老熟すると灰緑色となる。大型太身で、腹部第 8 節の両側が顕著に広がりうちわ状となる。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の池沼に生息し、広い開放水面と水深のある大きな池沼を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は区部に多く多摩地域では少ない。これは本種が好む環境が区部に集中しているためと考えられる。皇居など一部では多産し、安定的に生息している。区部では現状として絶滅のおそれはないが、羽化や成虫が毎年確認できる場所は限られる。多摩地域では確実な生息地は極めて少なく生息状況も不安定で、一時的な飛来や発生に留まっている場所が多い。幼虫は水底の泥中で生活しており、コイなどによる捕食圧に注意が必要。他県では羽化のために岸へ泳いでくる幼虫をオオクチバスが捕食するのも観察されている。

【関連文献】

斉藤洋一, 2004; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)



オニヤンマ

Anotogaster sieboldii

トンボ目(蜻蛉目)
オニヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 60 ～ 86mm。黒地に黄色斑がある。左右の複眼は一点で接し、♀は長大な産卵管を持つ。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地の様々な流水環境に生息し、湿地の水溜りや湧水の池などにも見られる。谷戸の水路や湿地内の細流など小規模な流れを特に好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域の丘陵地から低山地では各地に多く、現状では絶滅のおそれはない。多摩地域の平地では主に崖線などの湧水地に生息し、他の流水性種が見られない場所にも生息することが多い。区部では都市化に伴う湧水や水路の減少などにより確実な生息地は極めて限られる。また、湧水量も全般に少なく不安定なため、干ばつなどの影響も大きいと考えられる。生息地にはしばしばアメリカザリガニが多く、捕食圧などの影響にも留意することが望ましい。

【関連文献】

石田裕也, 1999; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)



サラサヤンマ

Oligoaeschna pryori

トンボ目(蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	EN	VU	EN	

【形態・生態】

腹長 41 ～ 47mm。黒地に黄色斑がある。♂は成熟すると黄色斑が蛍光色を帯びた緑色となる。特に腹部背面の斑紋は鮮やか。未熟♀は翅の基部、個体によっては前縁から翅端付近まで広く橙色を帯びる。成熟後も色が残る個体もある。春から初夏の短い時期に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の周囲を林に覆われた湿地、主として谷戸の湿地に生息する。植生遷移が進行してヤナギ類やハンノキの林となった休耕田にも生息するが、乾燥すると見られなくなる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は多摩地域の丘陵地に集中する。生息状況は概ね不安定であり、個体数も一般に少ない。区部から多摩地域の平地でもわずかに記録されており、過去には定着していたと考えられる。近年でも散発的に記録されているが、状況などから偶産の可能性が高い。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1995; 斉藤洋一, 2004.

(執筆: 須田真一)



コシボソヤンマ

Boyeria maclachlani

トンボ目 (蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	VU	VU	EN	

【形態・生態】

腹長 52 ～ 65mm。褐色の地に黄緑色斑がある。複眼は大きく、成熟個体では緑色。腹部第 3 節が極端にくびれ、♂では顕著。翅脈や縁紋は褐色で、成熟♂は翅端部に褐色斑がある。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の林に覆われた河川や水路に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や水質汚染などにより激減し、区部では絶滅した。現在も回復傾向にない。現存生息地は多摩地域の丘陵地に集中するが、安定的な生息地は局限され、個体数も少ない。谷戸の水路にも生息するが、むしろそれらが集まって流れる中小河川に生息する例が多い。これらの河川がしばしばコンクリート三面張り改修されたことも、生息地が減少した一因である。一方、護岸のみの改修に留まり、河床や周囲に植生が残されている河川で安定して生息する例もある。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



ミルンヤンマ

Planaeschna milnei

トンボ目 (蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 49 ～ 56mm。♀の方が太身でやや小さい。黒色の地に黄緑色斑がある。成熟個体の複眼は青緑色で頭部後頭楯は黄色。翅は無斑だが、♀では結節付近や前縁に細い褐色の帯が現れる個体もある。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道 (南部)、本州、四国、九州

【都における生息環境】

やや山地性で、丘陵地から低山地の林に覆われた比較的小規模な河川や水路に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩丘陵では生息地が比較的に限られ、西部に偏る。南多摩の山地や西多摩の丘陵地から奥多摩山地にかけては各地に多く、現状では絶滅のおそれはない。コシボソヤンマと同じ河川に生息する場合、より上流や支流に個体数が多い。ムカシトンボの生息する溪流にもしばしば生息する。北多摩では狭山丘陵に生息するが、記録が少なく生息状況は不明。区部でもわずかに記録はあるが偶産の可能性が高い。

【関連文献】

黒沢良彦, 1958; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



アオヤンマ

Aeschnophlebia longistigma

トンボ目 (蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	DD	—	DD	EN	NT

【形態・生態】

腹長 45 ～ 51mm。太身で寸胴型、全身鮮やかな緑色で成熟♂は青みがかかる。成熟個体の複眼は淡緑色で中央部は青色、裏側は水色。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地のヨシやマコモなどが繁茂する池沼や湿地に生息し、比較的規模が大きく開けた環境を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は区部に集中しており、以前は区部の各地で記録されたが激減した。減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などが挙げられるが、農業散布の影響も考えられる。近年、皇居には安定して生息することが確認された。最近、他の数ヶ所でも確認されており、徐々に回復傾向にあると推定される。しかし、生息環境が限られた場所にしか残っていないため、著しい増加はないと考えられる。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)



ネアカヨシヤンマ

Aeschnophlebia anisoptera

トンボ目(蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	DD	DD	—	CR	NT

【形態・生態】

腹長 54 ～ 63mm。太身で寸胴型、黒地に黄緑色斑がある。成熟個体の複眼は青藍色で中央部は濃色。翅の付根は橙色、未熟な個体ほど鮮やかで♀では前半部まで橙色となる個体もある。翅端部は褐色。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地のヨシやマコモなどが繁茂する池沼や湿地に生息する。谷戸の休耕田にも生息するが、植生遷移の進行や乾燥化により一時的な発生に留まることが多い。アオヤンマと同所的に生息することもあるが、より樹林に隣接した場所を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930 年代には区部西部周辺の湧水地に比較的多かったようだが、その後の記録は途絶えていた。しかし 1980 年代に再確認されて以降、数ヶ所で記録されている。ただし、個体数はわずかで年変動も大きく、生息状況は極めて不安定である。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)



カトリヤンマ

Gynacantha japonica

トンボ目(蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	VU	VU	EN	

【形態・生態】

腹長 54 ～ 60mm。細身で腹部第 3 節のくびれも強い。成熟個体では翅胸は緑色、腹部第 2 節は♂では青色、♀では緑色。複眼は大きく、成熟個体では緑色で前半が青みがかかる。♀尾毛は長くてもろく老熟個体では大半が折損する。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道(南部)、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湿地に生息する。河川敷の湿地に生息する例もある。

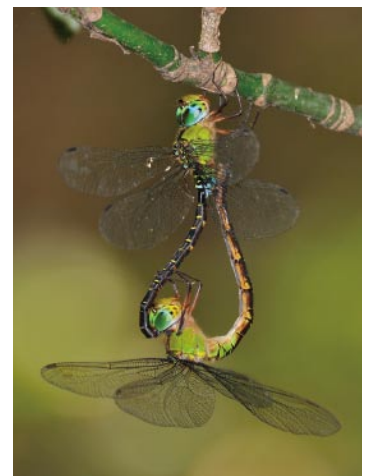
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は普通種だったが、水田の埋立てや乾田化、休耕に伴い激減した。伝統的な水田稲作が行われている環境を好み、休耕すると短期間で激減または見られなくなるため、稲作の継続が望ましい。現在、主に多摩地域の丘陵地の谷戸に生息するが、年々減少し、確実な生息地は限られる。多摩川河川敷の湿地にも生息するが、個体数は少なく不安定。区部では近年の散発的な記録もあるが、確実な生息地は未知。

【関連文献】

石田裕也, 1999; 喜多英人, 2006.

(執筆: 須田真一)



マダラヤンマ

Aeshna mixta soneharai

トンボ目(蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	○	○	○	EX	NT

【形態・生態】

腹長 46 ～ 50mm。成熟個体の翅胸側面の条は黄緑色で上方は青みが強い。♂では腹部に鮮やかな青色の斑紋があり、複眼も鮮やかな青色。♀では緑色となるが、♂と同じく青色となる個体も多い。稀に黄色の個体も見られる。

【分布の概要】

北海道、本州(中部以北)

【都における生息環境】

平地のヨシやマコモなどが繁茂する池沼に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部で 1930 年代以前に記録されているのみ。確実なものは文京区での記録である。その記録の記述からは周辺で発生していたことが推測されるが、それ以降の記録は知られておらず、絶滅と判断される。当時の詳しい生息状況や絶滅要因などは不明。

【関連文献】

朝比奈正二郎, 1957.

(執筆: 須田真一)



ルリボシヤンマ

Aeshna juncea

トンボ目(蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	—	NT	NT	NT	

【形態・生態】

腹長 54～61mm。黒褐色の地に黄緑色斑がある。オオルリボシヤンマに酷似するが、翅胸側面の斑紋の形や、成熟♂では腹部背面末端付近の斑紋だけ青色となり、複眼はやや緑がかることなどで区別できる。成熟♀の斑紋は通常黄緑色。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国

【都における生息環境】

水生植物の豊富な小規模な池沼や水溜りのある湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

従来、東京都本土部での記録は限られていたが、1980年代以降、多摩地域の丘陵地で継続的に記録されている。休耕田の増加に伴い生息環境が各地に創出されたためと考えられるが、最近では植生遷移の進行や乾燥化などに伴い生息地や個体数が減少傾向にある。一方、好適な生息環境が創出されるといち早く姿を見せることもある。砂防堰堤の上流に形成された小規模な池にも生息するが、安定した生息地ではない。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 里山昆虫研究会, 1995.

(執筆: 須田真一)



オオルリボシヤンマ

Aeshna nigroflava

トンボ目(蜻蛉目)
ヤンマ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	—	DD	DD	DD	

【形態・生態】

腹長 61～72mm。ルリボシヤンマに酷似するが、翅胸側面の斑紋の形や、成熟♂では翅胸から腹部背面の斑紋全体と複眼も青色となることなどで区別できる。成熟♀の斑紋は通常黄緑色であるが、腹部を中心に青色となる個体もある。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地の水生植物の豊富な池沼で記録されている。ルリボシヤンマより広い水域を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

従来、東京都本土部での記録は限られており偶産または誤同定とされていたが、多摩地域の丘陵地で最近記録されている。数年間継続して確認され、産卵などの生殖活動も見られる場所もあるため、現時点では定着化が進行中と考えられる。多摩地域には生息に適した池沼が少ないこともあり、このまま定着するか、あるいは消滅するかは現時点では判断できない。評価のためには継続したモニタリングが必要である。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 里山昆虫研究会, 1995.

(執筆: 須田真一)



トラフトンボ

Epitheca marginata

トンボ目(蜻蛉目)
エソトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EX	—	—	CR	

【形態・生態】

腹長 34～39mm。燈褐色の地に黄色斑がある。翅胸は毛深く、腹部背面は黒色で各節の両脇に黄色斑が並ぶ。♂の翅は無斑だが、♀には前縁に黒褐色のバンドが現れる。発現の程度には個体差があり、極めて濃色の個体から、ほとんど透明となる個体まである。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の水生植物の豊富な池沼に生息し、開けた環境の池沼を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930～50年代には区部西部周辺の湧水地や東部の池沼で普通に見られたようだが、既知生息地の全てで絶滅した可能性が高い。その要因は埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などである。過去は農業散布、近年では捕食性外来生物の影響も無視できない。近年、区部から数例の記録があり、多くは偶産と判断されるが、一部では生息している可能性もある。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 下山田隆, 2004.

(執筆: 須田真一)



エゾトンボ

Somatochlora viridiaenea

トンボ目(蜻蛉目)
エゾトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	—	CR	CR	

【形態・生態】

腹長 37～51mm。♀の産卵弁はくさび状で下方へ突き出す。頭から腹部にかけて緑色の金属光沢がある。未熟個体には翅胸側面に黄色条、腹部各節にも黄色斑があるが、♂では成熟すると消失する。♀は成熟しても残り、腹部の黄色斑は大きくて目立つ。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地の植生が豊富で湧水の流れや水溜りのある湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930～40年代には区部西部周辺の湧水地でも記録されていたが絶滅した。その要因は湿地環境の消失と思われる。多摩地域の丘陵地では谷戸の湿地に生息しているが、現存生息地は数ヶ所程度で個体数は極めて少なく生息状況も不安定である。確実な生息地でも全く確認できない年がある。生息地に隣接した一見好適な場所でも確認できないことが多く、生息環境の選択性は高いと思われる。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 寺元利行, 1994.

(執筆: 須田真一)



ハネビロエゾトンボ

Somatochlora clavata

トンボ目(蜻蛉目)
エゾトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	—	DD	DD	VU

【形態・生態】

腹長 41～50mm。♀の産卵弁はくさび状で下方へ突き出す。頭から腹部にかけて緑色の金属光沢がある。成熟個体の複眼は緑色。未熟個体には翅胸側面に黄色条がある。♂では成熟すると消失するが♀は成熟しても残る。エゾトンボと酷似するが、基部を除き腹部に黄色斑がないことや、♂の尾部付属器が太いことなどで区別される。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地の植生が豊富で湧水の流れがある湿地に生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

東京都本土部の記録は極めて限られる。文献上では区部における1930年代以前の1例のみと思われる。偶産の可能性もあるが詳細は不明。近年、多摩地域の丘陵地でわずかな個体が確認されている。ただし、生殖活動や幼虫が未確認であるため、現時点で定着しているかは判断できない。評価のためには継続したモニタリングが必要である。

【関連文献】

奥村定一, 1932b.

(執筆: 須田真一)



タカネトンボ

Somatochlora uchidai

トンボ目(蜻蛉目)
エゾトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	DD	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 40～47mm。♀の産卵弁は幕状で下方へ突き出さない。頭から腹部にかけて緑色の金属光沢がある。成熟個体の複眼は緑色。翅胸側面に黄色条はない。腹部も基部を除き黄色斑はない。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地から低山地の樹木に覆われた池沼に生息する。小規模な滞水にも見られ、貯水槽などの人工的な水域にもしばしば生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

東京都本土部ではやや山地性の種である。多摩丘陵では生息地が比較的限られており、西部に偏って分布しているが、近年より東側の地域でも確認されている。南多摩の山地や西多摩の丘陵地から奥多摩にかけては各地に多く、現状として絶滅のおそれはない。北多摩では狭山丘陵に生息するが、記録自体が少なく生息状況などは明らかでない。区部では偶産である可能性が高い。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 里山昆虫研究会, 1995.

(執筆: 須田真一)



コヤマトンボ

*Macromia amphigena*トンボ目(蜻蛉目)
エゾトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	EN	NT	NT	NT	

【形態・生態】

腹長 49～57mm。翅胸には青緑色の金属光沢があり、明瞭な黄色条がある。腹部基部の黄色斑は斜めに途切れない。頭部顔面の黄色条は1本。複眼は成熟個体では緑色。春から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河川に生息し、川幅が広く砂礫底の河川中流域を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や水質汚染などにより激減し、区部では記録が途絶えた。多摩川では中流域では絶滅状態となり、西多摩の支流に残る程度であった。1990年代より回復傾向にあり、現在は区部まで記録されるようになったが、個体数は全般に少ない。少し遅れて中小河川でも確認されるようになり、区部の中小河川でも確認されている。羽化や成熟個体が見られる場所は限られ、特に区部と隣接地域では個体数も少なく要注意。河川工事や出水などで環境が変化すると容易に減少すると考えられる。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



キイロヤマトンボ

*Macromia daimoji*トンボ目(蜻蛉目)
エゾトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
□	□	EX	□	EX	NT

【形態・生態】

腹長 54～64mm。黒地に黄色斑がある。翅胸には青緑色の金属光沢があり、明瞭な黄色条がある。頭部顔面の黄色条は1本。複眼は成熟個体では緑色。コヤマトンボに酷似するが、全体に細身で腹部基部の黄色斑が斜めに途切れることなどで区別できる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

河川中流域に生息していたと考えられる。コヤマトンボに比べ川幅が広くより細かな底質の流れを好む。

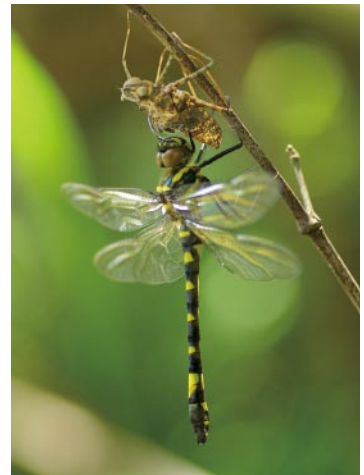
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録は、現在の多摩市における1930年代の数例の記録程度。それ以降の記録は知られておらず、絶滅したと判断される。その要因は河川工事や水質汚染などと考えられるが詳細は不明。多摩川流域を中心とした近年の調査でも全く確認されていない。

【関連文献】

朝比奈正二郎, 1957; 枝重夫ら, 1970.

(執筆: 須田真一)



ハラビロトンボ

*Lyriothemis pachygastra*トンボ目(蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	VU	NT	NT	NT	

【形態・生態】

腹長 20～25mm。腹部が極端に扁平となり、特に♀では顕著。頭部前額は強い金属光沢のある青藍色。未熟個体は黄色を主体とした地色に黒色条斑がある。♂は成熟するにつれ黒味が増して、腹部に青白色の粉をまとう。♀はあまり変化しない。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

北海道(南部)、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の植生が豊富な湿地に生息する。草丈の低い場所を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩川流域に記録は集中し、その他の地域では少ない。主に丘陵地の谷戸に生息する。休耕田の増加に伴い生息地や個体数は一時期増加した。しかし、最近では植生遷移の進行や乾燥化などによって生息地や個体数は減少傾向にある。一方、好適な生息環境が創出されるといち早く姿を見せることもある。多摩川河川敷の湿地にも生息するが不安定。区部では現在、確実な生息地は極めて限られる。

【関連文献】

石田裕也, 1999; 斉藤洋一, 2003.

(執筆: 須田真一)



シオヤトンボ

Orthetrum japonicum

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	VU	○	○	NT	

【形態・生態】

腹長 25 ～ 29mm。シオカラトンボより小型でずんぐりとした体型。黄褐色の地に黒色斑があり、翅の基部は淡い燈色。♂では成熟すると黒化して翅胸背面と腹部に白粉を厚くまとう。♀はあまり変化しない。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湿田や植生の豊富な草丈の低い湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域の丘陵地では各地の谷戸に生息しており個体数も一般に多いため、現状では絶滅のおそれはない。伝統的稲作が行われている湿田を好むが、休耕田などの湿地にも多く生息し、カトリヤンマに比べて良好な生息状況を保っている。ただし、植生遷移の進行や乾燥化による環境変化には注意を要する。区部から多摩地域の平地でも、以前は普通種だったが生息環境の減少により激減し、現在では散発的な記録が見られる程度。特に区部では、偶産や一時的な発生が多く、安定的な生息地はほとんどないと考えられる。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1995; 斉藤洋一, 2004.

(執筆: 須田真一)

ヨツボシトンボ

Libellula quadrimaculata asahinai

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	EN	VU	VU	EN	

【形態・生態】

腹長 27 ～ 31mm。ずんぐりとした体型で褐色の地に黒色斑がある。翅胸は毛深く、腹部側面は黄色。翅は基部と結節が黒褐色で前縁に淡褐色帯が入る。春から初夏に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼や水溜りのある湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930年代には区部西部周辺の湧水地に多かったようだがそこでは絶滅した。一時期記録もほぼ途絶えたが、1990年代以降、区部から多摩地域にかけて記録が増加し定着した場所もある。しかし、多くの場所では散発的な記録に留まり、多数発生していた場所から突然消滅することもあるため、生息状況は不安定といえる。一方、好適な生息環境が創出されるといち早く姿を見せることもあり、東京都本土部では生息地間の移動を行いながら発生と消滅を繰り返している可能性もある。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)

ベッコウトンボ

Libellula angelina

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	—	EX	CR

【形態・生態】

腹長 24 ～ 31mm。ずんぐりとした体型で、翅胸は毛深い。褐色の地に黒色斑があり、腹部背面中央に黒色条がある。♂では成熟すると全身が黒化して斑紋がなくなる。翅の基部と結節、翅端部に大きく明瞭な黒褐色斑がある。春に見られる。

【分布の概要】

本州 (東北部以南)、四国、九州

【都における生息環境】

平地の水生植物の豊富な池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部と隣接する北多摩の一部のみで記録されている。記録は1930年代に多く、確実なものは概ね1950年代まで。当時から生息地は局地的で個体数も多くはなかったようであるが詳細は不明。減少の要因としては埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などが挙げられるが、農薬散布の影響も考えられる。全国的にも減少が著しく、絶滅が危ぶまれる。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 朝比奈正二郎, 1985.

(執筆: 須田真一)



ハッチョウトンボ ※備考 (p.441)

Nannophya pygmaea

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
○	○	○	○	EX	

【形態・生態】

腹長 10 ～ 14mm と極めて小型。翅胸側面に黒色条がある。成熟した♂は全身鮮やかな朱赤色。♀は黒味が強く、燈褐色の斑紋がある。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

湧水に涵養される草丈の低い明るい貧栄養湿地に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

東京都本土部における記録は「東京府産」とされる♂の標本写真が知られるのみであり、採集地などの詳しい情報は不明。南関東では極めて稀な種であるが、埼玉県では 1950 年代に現在の日高市に確実な生息地が知られていたことから、距離的にも程近く自然環境も類似している北多摩から西多摩にかけてのどこかに生息地があった可能性は十分考えられる。ただし、すでに生息条件を満たす環境自体がほぼ見られないため、現存する可能性はないと思われる。

【関連文献】

枝重夫, 1973; 埼玉県環境部みどり自然課 (編), 2008.

(執筆: 須田真一)



ミヤマアカネ

Sympetrum pedemontanum elatum

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
VU	○	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 23 ～ 28mm。翅胸はほぼ無斑、翅の縁紋付近から内側にかけて幅広い褐色帯が入る。♂では成熟すると全身鮮やかな赤色となり、縁紋も赤くなる。♀は黄褐色。初夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の緩やかな砂泥底の細流に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地はやや局地的だが、多摩地域では河川敷の伏流水や湧水の流れに特に多く、丘陵地の谷戸にも生息する。個体数も一般に多いことから現状では絶滅のおそれはない。ただし、全国的には著しく減少した地域も多く、注意が必要と思われる。区部では生息環境自体の減少によって激減し、現在では多くの場合散発的な記録に留まり、確実に生息する場所はほとんど残されていないと思われる。

【関連文献】

大森武昭, 1983; 石田裕也, 1999.

(執筆: 須田真一)



マイコアカネ

Sympetrum kunckeli

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
NT	DD	DD	DD	VU	

【形態・生態】

腹長 21 ～ 25mm。ヒメアカネやマユタテアカネに似るが、♂の尾部上付属器の先端が反り返り、成熟個体の顔面が青白色であること、♀の産卵弁が短く腹端を越えないこと、翅胸の斑紋などで区別される。♀は黄褐色だが、稀に♂同様に赤化する個体もある。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の水生植物が豊富な池沼や河川敷の湿地などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は区部に集中するが局地的。毎年確実に見られる場所はほとんどなく、数年おきに発生と消滅を繰り返す場合が多い。埋立地に形成された水溜りや調整池などで見られることもある。多摩地域では散発的な記録のみで定着しているかは不明。近くに水域のない場所や住宅地などでの確認例もあることから、東京都本土部では生息地間の移動を行いながら発生と消滅を繰り返している可能性もある。

【関連文献】

須田真一, 2002; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)



ヒメアカネ

Sympetrum parvulum

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	NT	NT	VU	

【形態・生態】

腹長 19～25mm。マイアカネやマユタテアカネに似るが、♂の尾部上付属器の先端が反り返らず、成熟個体の顔面が白色であること、♀の産卵弁が長く腹端を越えること、翅胸の斑紋などで区別される。♀は黄褐色だが、稀に♂同様に赤化する個体もある。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に丘陵地の植生が豊富で草丈の低い明るい湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域では主に丘陵地の谷戸に生息する。一時期、休耕田の増加に伴い生息地や個体数の増加が見られたが、現在では植生遷移の進行や乾燥化によって生息地や個体数は減少している。湿地が維持されても、草丈の低い環境を好むことから管理放棄によって容易に減少する。区部でも過去生息していた可能性はあるが、近年は散発的な記録のみで、偶産である可能性が高い。

【関連文献】

雛倉正人, 1983; 里山昆虫研究会, 1995.

(執筆: 須田真一)



リスアカネ

Sympetrum risi

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

腹長 24～30mm。翅端部に顕著な黒褐色斑がある。コノシメトンボやノシメトンボに似るが、成熟♂が腹部のみ鮮やかな赤色となることや、翅胸の斑紋などで区別される。夏から秋に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の樹木に覆われた池沼や湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地は局地的だが、多摩地域の丘陵地の谷戸では各地で見られる。多摩川などの河川敷の湿地にも生息しており、広範に分布することから現状では絶滅のおそれはない。ただし、植生遷移の進行や乾燥化、河川工事などに伴う環境変化には注意を要する。区部では確実に生息している場所は限られており、個体数も一般に少ない。

【関連文献】

石田裕也, 1999; 斉藤洋一ら, 2006.

(執筆: 須田真一)



キトンボ

Sympetrum croceolum

トンボ目 (蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	DD	DD	

【形態・生態】

腹長 24～29mm。全身橙黄色で斑紋はない。成熟しても腹部背面に赤みを増す程度で色彩変化が少ない。翅は基部から半分程度と全縁が鮮やかな橙色。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の樹木に覆われた水生植物が豊富な池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930～40年代には区部西部周辺の湧水地に多かったようだが、その後の記録は見出せない。減少の要因は埋立てや護岸改修、水質汚染、水生植物群落の衰退などである。確実な生息地はそれ以降知られていないが、1980年頃まで区部や北多摩、南多摩で散発的に記録されていた。しかし、それ以降は全く記録されておらず、近年の調査によっても確認できないことから、現状では絶滅したと判断される。近年、西多摩から記録されたが、生殖活動や幼虫が未確認であるため、現時点で定着しているかは判断できない。

【関連文献】

石倉秀次, 1935; 大森武昭, 1983.

(執筆: 須田真一)



オオキトンボ

Sympetrum uniforme

トンボ目(蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	—	—	EX	EN

【形態・生態】

腹長 31 ～ 36mm。全身橙黄色で斑紋はない。成熟しても腹部背面に赤みを増す程度で色彩変化が少ない。翅は全体に鮮やかな淡橙色。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の水生植物が豊富な池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では各地の記録があり東部の池沼では 1950 年代まで個体数も多かったようだが、急激に減少したようで 1960 年の記録が最後。多摩川河川敷では 1980 年代前半まで府中市で確認されていたが絶滅した。その要因は不明だが、蚊などの発生を抑えるために生息地に薬剤散布が行われたとの情報もある。なお、荒川区では 1989 年に記録されているが、偶産と判断される。全国的にも減少が著しく、絶滅が危ぶまれる。

【関連文献】

枝重夫ら, 1970; 大森武昭, 1983.



(執筆者: 須田真一)

チョウトンボ

Rhyothemis fuliginosa

トンボ目(蜻蛉目)
トンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	VU	NT	NT	NT	

【形態・生態】

腹長 21 ～ 26mm。体は黒色で大きな翅を持つ。翅の黒色部の表側は♂では紫藍色、♀では金緑色に輝くが、♀でも紫藍色となる個体が時折ある。初夏から夏に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の水生植物が豊富な池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

好む環境が区部に集中しているためと考えられるが、記録は区部に多く多摩地域では少ない。以前は普通に見られたようだが一時期ほとんど見られなくなった。1990 年代より回復傾向にあるが生息状況は安定していない。生息地や個体数の年変動が大きく消滅することもあるため、東京都本土部では生息地間の移動を行いながら発生と消滅を繰り返している可能性もある。生息地には捕食性外来生物が侵入していることも多く、その影響も無視できない。

【関連文献】

石田裕也, 1999; 斉藤洋一ら, 2006.



(執筆者: 須田真一)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名は、杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司，1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑．北海道大学図書刊行会．に準拠した。ただし、カワトンボ属については、二橋亮，2007. カワトンボ属の最新の分類学的知見．昆虫と自然 42(9): 4-7. に従った。

また、科や種の配列に関しては、石田昇三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊，1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説．東海大学出版会．に従った。

【備考】

和名	備考
ハッチョウトンボ	東京都における記録は「東京府産」とされる標本写真1例だけであり、具体的な記録が不明である。そのため、地域区分ごとの評価ができず、本土部全体での判定のみとせざるを得なかった。

【関連文献】

- 朝比奈正二郎，1956. 日本の蜻蛉 (4). 新昆虫，9(10): 54-57.
 朝比奈正二郎，1957. 日本の蜻蛉 (10). 新昆虫，10(4): 56-62.
 朝比奈正二郎，1957. 日本の蜻蛉 (13). 新昆虫，10(10): 55-60.
 朝比奈正二郎，1957. 日本の蜻蛉 (14). 新昆虫，10(12): 51-57.
 朝比奈正二郎，1957. 日本の蜻蛉 (9). 新昆虫，10(2): 55-59.
 朝比奈正二郎，1985. 50 年前の東京近郊の蜻蛉相．*Tombo*, 28: 22.
 枝重夫，1960. ムスジイトトンボ東京に産す．あきつ，9(2): 40.
 枝重夫，1973. 東京のハッチョウトンボの記録．昆虫と自然，8(7): 28.
 枝重夫・松木和雄・新井裕，1970. 関東地方のトンボ類の分布．昆虫と自然，5(5): 17-24.
 二橋亮，2007. カワトンボ属の最新の分類学的知見．昆虫と自然，42(9): 4-7.
 林文男・土畑重人・二橋亮，2005. 日本産カワトンボ属の分類的，生態的諸問題への新しいアプローチ (2) 資料．*Aeschna*, 42: 1-18.
 雛倉正人，1983. 都心部におけるトンボの記録 2 題．月刊むし，(149): 33.
 雛倉正人，2009. 町田市相原町におけるコサナエの記録．神奈川虫報，(166): 17.
 井上清，1956. オオセスジイトトンボおよびオオモノサシトンボの第 2 羽化について．新昆虫，9(12): 51.
 石田裕也，1999. 多摩川水系のトンボⅡ．南多摩自然誌，(2): 42-83.
 石倉秀次，1935. 井の頭池、善福寺池、三宝寺池の蜻蛉．昆虫界，3(20): 412-419.
 伊藤信男，1980. 東京のグンバイトンボ再発見．インセクト，31(2): 80-81.
 加納一信，1994. ヒメマイトトンボの羽化と隠身行動．月刊むし，(285): 39.
 加納一信，2005. 2005 年度オオセスジイトトンボ・オオモノサシトンボ部会報告．*Pterobosca*, 12A: 11-12.
 刈部治紀，1998. 町田市 (多摩丘陵側) における興味深いトンボの記録．神奈川虫報，(124): 26-27.
 刈部治紀，2007. 神奈川県横浜市内で発生したリュウキュウベニイトトンボについて．月刊むし，(434): 42-45.
 刈部治紀・吉武美保子，2000. 東京都内からのナゴヤサナエの記録．月刊むし，(352): 50.
 喜多英人，2006. 東京都青梅市でカトリヤンマを目撃．寄せ蛾記，(124): 42.
 黒沢良彦，1958. 上野公園で採れたミルンヤンマ．自然科学と博物館，25(9/10): 17.
 奥村定一，1932a. 「東京産蜻蛉目録」の追加・補遺・訂正．昆虫，6(2): 86.
 奥村定一，1932b. 「東京産蜻蛉目録」の追加．昆虫，6(4): 187.
 大森武昭，1983. 多摩川水系のトンボ相とその生態．とうきゅう環境浄化財団 (一般) 研究助成，(31). 56 pp. + 12 pls.
 埼玉県環境部みどり自然課 (編)，2008. 埼玉県レッドデータブック 2008 動物編．352 pp.
 斉藤洋一・宮崎俊行・松木和雄，1991. 千葉県市川市の蜻蛉相．房総の昆虫，(4): 22-30.
 斉藤洋一，2003. 江戸川区でハラビロトンボを採集．房総の昆虫，(29): 43.
 斉藤洋一，2004. 江戸川区のトンボ類．房総の昆虫，(34): 75-79.
 斉藤洋一・大和田守・加藤俊一・井上繁一，2006. 皇居のトンボ類モニタリング調査 (2001-2005). 国立科学博物館専報，(43): 383-406.
 里山昆虫研究会，1995. 多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究．とうきゅう環境浄化財団 (一般) 研究助成，(94). 229 pp.
 下山田隆，2004. 水元公園のトンボ．かいつぶり，(199): 4.
 須田真一，2002. 自然教育園のトンボ類．自然教育園報告，34: 107-130.
 寺元利行，1994. 東京都武蔵村山市岸・三ツ木周辺のトンボの記録．シブチャン，(1): 21-25.

(2) カマキリ目・バッタ目

1 選定・評価方法の概要

カマキリ目とバッタ目は、共に直翅系昆虫に属する分類群であること、解説に共通する部分が多いことなどの理由により、ここでまとめて扱う。

東京都本土部のカマキリ目・バッタ目は古くから記録されている。例えば東京府(1938. 武蔵野昆虫誌, 194+28pp.)には武蔵野地域の目録が掲載されており、平山修次郎(1933. 原色千種昆虫図譜. 三省堂, 東京. 186pp.+104pls.、1937. 原色千種続昆虫図譜. 三省堂, 東京. 194pp.+88pls.)の図版にも多くの東京産の標本が図示されている。その中には全国的にも近年全く記録のないアカハネバッタのような種も含まれており、往時の種構成や生息環境の多様性をうかがい知ることができる。しかし、他の分類群同様、高度成長期以降の大規模開発や生活様式の変化に伴い、クツワムシやクルマバッタなど、過去には各地で記録されていた普通種が消えていく一方、アオマツムシやヒメクダマキモドキのように、分布域、個体数共に増加し、勢力を増している外来種や暖地性の種も見られる。比較的近年のものとしては、皇居(山崎柄根, 2000. 皇居で見られた直翅系昆虫. 国立科学博物館専報, (36):19-27.)など、限定された場所についてのまとまった報告は見られるが、広域を対象としたものは、バッタ目では和田一郎(1995. 東京の直翅目. ぱったりぎす, (103):46-65.、2001. 東京 23 区内の直翅類. 寄せ蛾記, (103):40-49.)による報文のみであり、カマキリ目では見出せなかった。このように評価に資する基礎的なデータが極めて不足しているのが現状である。そのため、今回の評価はすべて定性的要件によって行い、入手できた文献資料のほか、聞き取りなどの情報、隣接県での生息状況なども参考として、一部、現地調査も実施した。

絶滅危惧Ⅰ類のランクについては、絶滅危惧ⅠA類(CR)と絶滅危惧ⅠB類(EN)を区分した。過去の記録はさかのぼれるものについては戦前のものも含め採用した。

カマキリ目は今回新たに評価対象とした分類群であり、3種を検討対象種として評価を行った。バッタ目については、1998年版に掲載されている22種に、今回新たに検討対象とした7種を加えた29種について評価を行った。

なお、評価にあたっては、多くの方から未発表記録や生息状況などについて多数提供していただいた。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、カマキリ目は検討対象種の3種全てが、バッタ目では28種が本レッドリストの掲載種に選定された。

評価にあたっては、過去から現在にいたる減少度合いを基本とし、生息環境の脆弱性、分布範囲などの情報も加味してランクを決定した。当然のことだが、絶滅危惧に該当するかどうかで判定したため、記録がごく少ないなど、希少性が高くとも、現状として生息環境・状況が安定的であると判断された種や、増加傾向にある種についてはランク外とした。全般にわたって「情報不足」(DD)、あるいは「データなし」と評価されたものが多いが、これは基礎的な情報が極めて不足していることによるものである。

今回、絶滅危惧種のCR、EN、VUとなった種についてみると、河川敷に生息あるいは残存している種が多い。これはエゾエンマコオロギやカワラバッタなど礫河原に固有な種にとっては、河川敷が唯一の生息環境となっていること、面積的にも連続した緑地が維持されていること、出水などのかく乱によって、様々な植生や環境が創出されることによる。しかし、河川敷においてもすでに危機的となっている種が多いことは、生息環境としての質がすでに劣化していることを示している。

なお、バッタ目については近年、分類学的な再検討が盛んに行われ(日本直翅類学会編,2006.バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑.北海道大学出版会.687pp.), 複数種に分割されたものや、新たに記載された種が多い。その中にはイズササキリやコガタカンタンなど、東京都から記録されているものもあるが、これらについては分布や生息状況の把握が十分でないために、今回は検討対象種としなかった。また、オオオカメコオロギ、チョウセンカマキリなど、確実な記録があまりにも少なく、生息状況(特に近年)が不明なために評価が困難な種、ヤマトマダラバッタなど、記録は存在するものの、その真偽が不明なものについても同様の扱いとした。さらにスズムシ、マツムシ、ヒガシキリギリスなどでは、飼育個体の逸出や人為的な放虫に由来すると強く疑われる記録や個体群が存在しており、これらについても確実性の高いものは評価の対象から外した。

(須田 真一)

ヒメカマキリ

Acromantis japonica

カマキリ目(蟷螂目)
ヒメカマキリ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長♂ 25～34mm、♀ 25～36mm。緑色ないし褐色。複眼が左右に張り出し、複眼間に小突起を有する。前脚脛節の外縁刺は倒伏して互いに接する。中後脚腿節の先端付近に葉状片を有する。後翅は前翅端の左右からはみ出す。樹上性でよく飛翔する。関東地方では年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

山地の広葉樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地の樹林伐採を避け、樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

宮武頼夫・加納康嗣, 1992; 岡田正哉, 2001.



(執筆: 伊藤元)

ヒナカマキリ

Amantis nawai

カマキリ目(蟷螂目)
カマキリ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	

【形態・生態】

体長♂ 12～15mm、♀ 13～18mm。褐色で正中線上に黒条を有し、全身に小黑斑を散りばめる。前胸背は菱形。前脚腿節は幅広い。前後翅とも鱗片状。常緑広葉樹林などの薄暗い樹林の林床に生息する。年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

薄暗い樹林の林床に生息する。

【東京都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

飛翔できず移動性が低いことから、生息地の樹林伐採が生息環境の減少につながると考えられる。そのため、生息地の樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

Yamasaki, 1981; 山崎柄根, 2000.



(執筆: 伊藤元)

ウスバカマキリ

Mantis religiosa

カマキリ目(蟷螂目)
カマキリ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	—	DD	DD

【形態・生態】

体長♂ 50～66mm、♀ 59～66mm。緑色ないし褐色でいずれも乳白色を帯びる。前脚基節は基部付近に楕円形の大きな黒紋を1つ、先半分に小黄斑を複数有する。年1化で夏から秋に成虫が見られる。河川敷や荒地の草地に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

多摩川河川敷の草地など限られた環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川敷では、河川改修の影響を強く受けるため、改修時には草地環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

宮武頼夫・加納康嗣, 1992; 岡田正哉, 2001.



(執筆: 伊藤元)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、宮武頼夫・加納康嗣 (編著), 1992. 検索入門セミ・バッタ . 保育社 . に準拠した。

【関連文献】

宮武頼夫・加納康嗣 (編著), 1992. 検索入門セミ・バッタ . 保育社 . 216 pp.

岡田正哉 , 2001. 昆虫ハンター カマキリのすべて . トンボ出版 . 63 pp.

Yamasaki, T., 1981. The Taxonomic Status of "*Iridopteryx maculata*" (Mantodea, Mantidae), with notes on its Distribution.
Memoirs of the National Science Museum, (14): 95-102.

山崎柄根 , 2000. 皇居で見られた直翅類 . 国立科学博物館専報 , (36): 19-27.

コロギス

Prosopogryllacris japonica

バッタ目(直翅目)
コロギス科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長約 30mm。全身が黄緑色で、額に黄白色の円紋が 3 つあり、前翅は褐色。産卵器は褐色で、体長よりやや短く、わずかに上へ反り返る。樹上性で、葉を綴って巣を作り、夜間捕食活動を行う。飛翔能力があつて灯火に飛来することがある。幼虫越冬で初夏に羽化し、成虫は秋まで見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地のクヌギやコナラなどの落葉広葉樹林に生息するが、個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では雑木林の減少により、生息環境が失われていると考えられる。雑木林の改変を可能な限り避けることが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 浜口哲一・中原直子, 2004.

(執筆: 伊藤元)



ハネナシコロギス

Nippancistroger testaceus

バッタ目(直翅目)
コロギス科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長♂ 13 ~ 15mm、♀ 15 ~ 19mm。無翅。頭部と胸部の中央部が赤褐色で、胸部の両側と腹部は黒い。後脛節の背面内縁のとげのうち 1 本だけ長く目立つ。産卵器は褐色で、上に反り返る。樹上性で葉を綴って巣を作り、昼間はそこに潜み、夜間捕食活動を行う。♂は腹部および胸部に備えた発音器で発音するほか、♂♀とも脚でタッピングによって雌雄間のコミュニケーションを取る。幼虫越冬で、初夏に羽化する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地の広葉樹林やササ類が繁茂した場所に生息し、平地の残存樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

個体数の増減は不明であるが、広葉樹林やササ類が繁茂した場所の改変を可能な限り避けることが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



カヤキリ

Pseudorhynchus japonicus

バッタ目(直翅目)
キリギリス科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	CR	DD	CR	

【形態・生態】

体長 63 ~ 67mm。体は太く、緑色ないし褐色。顔面は黄色みがかかる。頭頂から胸部の両側面に黄白色の細条があり、前翅発音器周辺まで延びる。触角鞭節下面は黒色。産卵器上片の上面は先端に向かって下側に湾曲する。オギ、ススキ、ヨシなど高茎イネ科草に生息し、それらの草本の茎や穂を摂食する。卵越冬、年 1 化で夏に羽化し、♂は夕方から夜間にかけてジャー・・・と大きな声で鳴く。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から丘陵地の高茎イネ科草本が広く繁茂した草地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営場の減少や植生遷移の進行によって生息に適した草地が減少し、分布が局所的になっていると考えられる。高茎イネ科草本が繁茂するような草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



シブイロカヤキリ (シブイロカヤキリモドキ) バッタ目 (直翅目) キリギリス科

Xestophrys javanicus

【形態・生態】

体長 36 ~ 46mm。体は褐色で、背面は黒褐色。顔面は黒みがかかる。頭頂突起を欠く。後脚は短く、跳躍が下手。成虫は秋に羽化し、越冬後の春から初夏に♂が夜間ジャー・・・・と鳴き、繁殖を行う。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地のオギやススキなどの高茎イネ科草本が広く繁茂した草地に生息するが、周辺の低茎草地に移動することもある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では、草地の減少によって分布が局所的になっている可能性がある。大河川の河川敷では、適度な草刈りによって維持されている草地に生息している例もあることから、生息地では高茎イネ科草本が生育するような草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会 (編), 2006.

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	○	○	○	○	



(執筆: 伊藤元)

クツワムシ

Mecopoda niponensis

バッタ目 (直翅目)
クツワムシ科

【形態・生態】

体長 50 ~ 53mm。緑色型と褐色型がある。前翅の幅が広く短いことからタイワンクツワムシ *M. elongata* と区別される。雑木林の林縁やクズなどが繁茂した藪、ときには河川敷のヨシ原に生息する。卵越冬、年1化で成虫は夏から秋に見られ、♂は夜間にガシャガシャ・・・・と連続して鳴く。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

丘陵地の雑木林の林縁や林内の藪に生息するが、分布は局所的。戦前は区部を含む平地にも広く分布し、多摩川の河川敷にも多く生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発による雑木林の減少により生息地が失われてきたと考えられる。残存する生息地では、林縁や林床の過度な草刈りを避けることが望ましい。

【関連文献】

内田正吉, 2008; 内田正吉, 2010.

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
CR	CR	CR	DD	CR	



(執筆: 伊藤元)

アシゲロツユムシ

Phaneroptera nigroantennata

バッタ目 (直翅目)
ツユムシ科

【形態・生態】

体長 15 ~ 17mm。体は黄緑色で緑色がやや強い。複眼は青みがかり、触角は黒褐色で節ごとに黄白色帯を有する。頭部から前翅の背面は褐色。胸部、前翅、腹部に微小な黒斑が散りばめられる。後腿節の先端と後脛節は黒褐色。樹林に生息し、林縁の草地や灌木上で見られることが多く、広葉樹の葉に産卵する。卵越冬、年1化または2化で、晩秋まで見られる。

【分布の概要】

北海道 (西南部)、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

主に丘陵地から山地の樹林の林縁に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地における個体数の増減は不明であるが、生息の基盤となる樹林の改変を極力避け、林縁や林床の過度な草刈りを避けることが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会 (編), 2006.

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	DD	○	○	○	



(執筆: 伊藤元)

ヘリグロツユムシ

Psyrana japonica

バッタ目(直翅目)
ツユムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長 24～31mm。前胸背板の後縁に黒褐色の細帯を有する。前脚腿節・脛節、中脚脛節は赤みを帯びることが多い。一見ヤマクダマキモドキに似るが、本種は♂では尾肢が2叉すること、♀では産卵器が長く鋸歯がなく、生殖下板の後縁が切れ込むことで区別される。山地の樹林で樹上生活を送る。♂♀とも発音する。卵越冬、年1化で成虫は夏から秋に見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

主に山地の広葉樹林の樹冠や林縁に生息する。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

個体数の増減は不明であるが、1回に多くの個体が確認されることはなく、もともと個体数が少ないと思われる。生息の基盤となる樹林の改変を可能な限り避けることが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



エゾエンマコオロギ

Teleogryllus infernalis

バッタ目(直翅目)
コオロギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	CR	CR	CR	CR	

【形態・生態】

体長 19～33mm で、北海道産は体が小さく、関東地方産は大きい。エンマコオロギに似るが、頭部の白眉斑は小さく産卵器がやや長く、鳴き声がリー、リー、・・・と異なる。本州では大河川の砂礫河原が海岸砂丘のみに生息し、石などの下に潜む。卵越冬、年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

多摩川中流域のごく一部の砂礫河原において記録がある。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

河川改修による自然に成立した河原の消失や植生遷移の進行などにより、生息環境が減少してきたと考えられる。現在、確実な生息地がほぼないため、生息が確認された場合は、生息地の環境を維持することと同時に、新たに生息適地である砂礫河原の創出を行うことが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 浜口哲一・中原直子, 2004.

(執筆: 伊藤元)



タンボコオロギ

Modicogryllus siamensis

バッタ目(直翅目)
コオロギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	DD	DD	

【形態・生態】

体長 13～16mm。複眼を結ぶ横帯以外、頭部はほぼ黒い。水田や明るい湿地に生息する。羽化後まもなくよく飛翔し、乾性草地や市街地で見られることもある。♂はジッ、ジッ、・・・と連続的に鳴く。幼虫越冬、年1～2化。成虫は春から夏に多く、秋も少数ながら出現する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地の湿地や水田に生息する。谷戸の水田では個体数が多い。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

東京都本土部各地の記録はあるが、湿地の消失や水田の減少により生息環境が失われつつあると考えられる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



クマコオロギ

Mitius minor

バッタ目(直翅目)
コオロギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長約 12mm。頭頂に横帯を欠き、全身黒いが腹面は黄褐色で脚は赤褐色。翅は短く飛翔できない。♂前翅長は頭・胸部を合わせた長さとはほぼ同一で、♀前翅長は腹部の半分以下の長さ。♂はチリッと一声ずつ間をおいて小さな声で鳴く。卵越冬、年 1 化で秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から低山地の明るく開けた湿地やその周辺の湿性草地に生息する。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

東京都本土部各地の記録はあるが、湿地の消失により、生息環境が失われつつあると考えられる。明るく開けた湿地や湿性草地を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.



(執筆: 伊藤元)

ヒメコオロギ

Comidogryllus nipponensis

バッタ目(直翅目)
コオロギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	DD	DD	

【形態・生態】

体長 8 ~ 10mm。オカメコオロギ類に似るが、小型で♂♀ともに頭部が丸いことで区別される。左右複眼の後縁を結ぶ淡色帯がある。♂前翅は先端近くで最も幅広くなる。♀前翅は短く、腹部の約半分が露出する。♂はリューー・・・と鳴く。卵越冬、年 1 化で秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から低山地の高茎草地に生息する。林縁の草地で鳴き声がよく聞かれる。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

東京都本土部各地の記録はあるが、萱場の減少や植生遷移の進行によって草地が減少し、生息環境が失われつつあると考えられる。高茎草本が生育するような草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.



(執筆: 伊藤元)

クマスズムシ

Sclerogryllus punctatus

バッタ目(直翅目)
コオロギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長 10 ~ 12mm。全身真っ黒で腿節の先端と脛節は赤褐色。触角は黒いが、中間部の数節が白い。前胸背板は点刻が発達し前縁に比べて後縁は幅広い。♂の前翅は腹端に達するが、♀は達せず翅脈が盛り上がる。主に高茎草地に生息するが、やや湿った場所を好み、林縁や果樹園などの地表でも見られることがある。♂はシュシュシュ・・・と鳴き始め、やがてリューー・・・と非常に高い声で鳴き、キーンとも聞こえる。卵越冬、年 1 化で秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から丘陵地の高茎草地、林縁の草地などに生息する。平地では河川敷などに発達したオギ・ススキ・ヨシ群落で見られることが多い。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

東京都本土部各地の記録はあるが、萱場の減少や植生遷移の進行、または草地や林縁における過度な草刈りなどの管理により生息環境が失われつつあると考えられる。高茎草本が生育するような草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.



(執筆: 伊藤元)

マツムシ

Xenogryllus marmoratus

バッタ目(直翅目)

マツムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	CR	DD	CR	

【形態・生態】

体長 19～23mm。体は褐色。後脚が長く、前翅が大きい。複眼には縞模様が入る。オギ・ヨシ・ススキなどの高茎草に生息し、♂は夜間、地表付近でピッピリリリッ、・・・と鳴き、日本の鳴く虫の代表格。卵越冬、年1化で秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

かつては平地に広く分布していたと考えられるが、現在では多摩川の河川敷などで局所的に見られる程度である。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

営場の減少や植生遷移の進行によって草地在減少し、分布が局所的になっていると考えられる。高茎草本が生育するような草地環境を維持することが望ましい。また、生息地では河川改修の影響にも留意する必要がある。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



カヤコオロギ

Euscyrthus japonicus

バッタ目(直翅目)

マツムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長約 9mm。体は黄褐色で、頭部から前翅の背面は黒褐色で、その左右に黄白色の帯が一直線に入り、この淡色帯は複眼から腹部先端まで続く。前翅は短く、腹部の中間まで達しない。卵越冬、年1化で秋に成虫が見られる。生息地では複数個体がまとまって見られることが多い。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

かつては平地からの記録もあったが、現在では主に丘陵地から低山地のチガヤなどが生育する草地に生息する。林間の草地で見られることもある。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

営場の減少や植生遷移の進行によって草地在減少したことにより、分布が局所的になっている可能性がある。分布や生息状況の把握とともに、生息地での適度な草刈りにより草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



ヒロバネカンタン

Oecanthus euryelytra

バッタ目(直翅目)

マツムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	—	DD	DD	

【形態・生態】

体長 11～15mm。淡緑色で、腹面は黒くならない。カンタンに似るが、♂の前翅はやや幅広く、♀の産卵器はやや長め。空地、畑地、荒地、海浜などに成立した乾性草に生息する。♂はルー、ルー・・・とゆっくり切って鳴く。卵越冬、年2化で初夏と秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

区部では広く分布しているようで、各地の空地や緑地のヨモギやセイトカアワダチソウ、ハギ類などの上で見られ、個体数も多い。しかし、それらの植物が生育する場所に必ずいるというわけではない。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

区部では最近の確認例があるが、ランク判定には十分な情報がない。市街地の空地のように孤立した草地に安定して生息している例もあることから、小規模でもキク科やマメ科の草本が生育するような草地環境を維持すれば、個体群は維持されと考えられる。

【関連文献】

和田一郎, 2001; 東京都板橋区, 2001.

(執筆: 伊藤元)



キンヒバリ

Natula matsuurai

バッタ目(直翅目)
ヒバリモドキ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	DD	

【形態・生態】

体長5～7mm。体は透き通った黄褐色。ヨシやガマ類などのイネ科抽水植物帯に生息する。茎や葉の上で♂はリッリッリッ・・・、リーーと高く金属的な声で鳴く。ススキやチガヤなどの乾性草地に生息するカヤヒバリに比べると体色がやや濃く、体が幅広い。幼虫越冬で春から初夏に加えて秋にも成虫が出現することから、年2化の可能性が高い。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から丘陵地の抽水植物帯のある湿地に生息し、平地では大河川の河川敷に発達したヨシ原で多く見られる。丘陵地では谷戸のヨシ・ガマ群落などに生息する。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

抽水植物が生育するような湿地の消失により、生息環境が失われつつあると考えられる。ヨシ原などの湿性草地を維持することが望ましい。

【関連文献】

Sugimoto, M., 2001; 和田一郎, 2001.

(執筆: 伊藤元)



© 佐藤岳彦

エゾスズ

Pteronemobius yezoensis

バッタ目(直翅目)
ヒバリモドキ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	○	DD	

【形態・生態】

体長8～8.5mm。ヤチスズを黒くしたような体色。後脛節背面外側のとげは4本。湿地に生息し、♂はジー、ジー・・・、と比較的単調に鳴く。幼虫越冬、年1化で初夏に成虫が見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地から山地の湿地に生息する。平地では皇居からの記録があるのみで、平地における分布状況は不明である。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

湿地の消失により、生息環境が失われつつあると考えられる。湿地を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



ヤチスズ

Pteronemobius ohmachi

バッタ目(直翅目)
ヒバリモドキ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	DD	DD	

【形態・生態】

体長8～8.5mm。体は茶褐色から黒褐色で光沢がある。後脛節背面外側のとげは4本。湿地に生息し、♂はジーーイー、ジーーイー、と後半を上げ調子にして鳴く。卵越冬、年1化で秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湿地や水田に生息する。明るく開けた湿地や水田から、樹陰で常に暗い湿地まで、幅広い湿地環境に生息する。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

東京都本土部各地の記録があり、普通は生息地での個体数は多いが、湿地や水田の消失により、生息環境が失われつつあると考えられる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



カワラスズ

Dianemobius furumagiensis

バッタ目(直翅目)
ヒバリモドキ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	VU	VU	VU	VU	

【形態・生態】

体長8～9mm。マダラスズに似るが、体が少し大きく、♀前翅基部付近と小顎肢先端が白くなることで区別できる。後脛節背面外側のとげは3本。荒地や大河川の中流域から上流域の河原に生息し、♂は昼夜問わずチリチリチリ・・・と連続的に鳴く。卵越冬、年1化で秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河原や荒地に生息する。線路の敷石での確認が多いが、それは人間生活に密接に関係した場所であり、確認機会が多いためと思われる。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

個体数の増減は不明であるが、河原の減少は生息環境の減少につながる。生息地の河原を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



ヒゲシロスズ

Polionemobius flavoantennalis

バッタ目(直翅目)
ヒバリモドキ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長約6mm。黒褐色で光沢がある。触角は基部付近から白くなり、触角全体の約半分が白い。小顎肢の中間節が白く、先端は黒い。後脛節背面外側のとげは3本。平地から山地の林縁や果樹園の縁に成立した草地に生息する。♂はフィリリリリ・・・と鳴く。卵越冬、年1化で秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から山地の林縁草地や高茎草地に生息する。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

平地では開発によって草地が減少し、分布が局所的になっていると考えられるため、生息地では草地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



アオフキバッタ

Aopodisma subaptera

バッタ目(直翅目)
バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	●	DD	○	○	

【形態・生態】

体長♂18～23mm、♀22～30mm。後腿節は全体が緑色、後脛節は青緑色。黒側条が♂は頭部から腹部にあるが、♀は頭部から前胸背板前縁にとどまる。翅は痕跡的で、鼓膜も小さい。湿って暗がりのある樹林の林縁に生息し、草本上や灌木上で見られる。晩秋には日当たりの良い草地に出てくることもある。卵越冬、年1化で夏に羽化し、晩秋まで見られる。

【分布の概要】

本州(東北、関東、中部)

【都における生息環境】

丘陵地から低山地の樹林の林縁に生息しており、西多摩ではしばしば谷戸で見られるが、南多摩では記録のある場所が限られる。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

飛翔できず移動性が低いことから、生息地の樹林伐採が生息環境の減少や個体群サイズの縮小につながる。そのため、谷戸を伴うような湿った樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

宮武頼夫・加納康嗣(編著), 1992; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



セグロイナゴ(セグロバッタ)

Shirakiacris shirakii

バッタ目(直翅目)
バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	CR	DD	CR	

【形態・生態】

体長(翅端まで)♂約35mm、♀約50mm。体が褐色で、複眼に細い縦縞が入る。前胸背板は背面が平坦で光沢がなく黒褐色、側隆起が明瞭で黄白色の細条で彩られる。前翅には多数の黒斑を有する。後腿節の側面および下面、後脛節(基部以外)は赤色。荒地や河川敷などに成立した低茎と高茎の草本群落が混在するような環境に生息し、イネ科草本を摂食する。卵越冬、年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

大河川の河川敷の草地に生息するが、低茎と高茎の草本群落が混在するような環境を好むため、生息地は限られる。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

分布が河川敷に限られているため、河川改修の影響に留意し、生息に適した草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 内田正吉, 2005b.

(執筆: 伊藤元)



ショウリョウバッタモドキ

Gonista bicolor

バッタ目(直翅目)
バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	VU	VU	DD	VU	

【形態・生態】

体長(翅端まで)♂27~35mm、♀45~57mm。黄緑色や淡緑色の個体が多いが褐色型も見られる。側面には触角先端から翅端まで濃色帯が通常ある。脚は短く、後脚腿節端が腹端に届かない。高茎イネ科草地に生息し、主にチガヤの葉を摂食する。静止時には葉や茎に体を密着させており、刺激を受けると、イナゴ類のように葉や茎の裏側に回り込む。卵越冬、年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地のチガヤ、オギ、ススキなどのイネ科高茎草地に生息する。小規模でもチガヤが安定して生育する草地に見られる場合がある。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

開発による草地環境の減少に注意し、チガヤが生育する草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 日本直翅類学会(編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



イナゴモドキ

Mecostethus parapleurus

バッタ目(直翅目)
バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	CR	—	CR	

【形態・生態】

体長(翅端まで)♂23~27mm、♀25~30mm。♂は黄褐色、♀は緑色ないし褐色。複眼後方から前翅基部にかけて黒側条が発達する。イネ科草本を摂食する。卵越冬、年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

ススキなどの高茎イネ科が生育する草地に生息する。50年ほど前までは東京都本土部各地の平地にも分布していたが、現在では南多摩の丘陵地のススキ草地を中心に生息が確認されている。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

営場の減少や植生遷移の進行によって草地が減少し、分布が局所的になっていると考えられる。ススキが生育する草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

内田正吉, 2005a; 雛倉正人, 2008.

(執筆: 伊藤元)



ツマグロバッタ (ツマグロイナゴモドキ)

Stethophyma magister

バッタ目 (直翅目)

バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	

【形態・生態】

体長 (翅端まで) ♂ 33 ~ 42mm、♀ 45 ~ 49mm。♂は黄緑色がかった褐色、♀は褐色だが、たまにピンク色や黒色がかった個体も生じる。後脚腿節端と翅端が黒ずむが、その濃さには変異がある。水辺のイネ科高茎草地に生息し、イネ科草本を摂食する。後脛節端のとげを前翅と擦り合せて発音する。卵越冬、年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

1934年の練馬で採集された記録はあるが、生息環境は不明である。埼玉県飯能市の記録があるため、今後、西多摩から記録される可能性がある。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

湿地の消失により生息環境が失われてきたと考えられる。生息が確認された場合、生息地やその周辺における湿性草地を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 内田正吉, 2003.

(執筆: 伊藤元)



クルマバッタ

Gastrimargus marmoratus

バッタ目 (直翅目)

バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	CR	CR	CR	

【形態・生態】

体長 (翅端まで) ♂ 35 ~ 45mm、♀ 52 ~ 65mm。緑色型と褐色型がある。黒帯が複眼から斜め下に伸びる。前胸背板は中縦隆起が発達して盛り上がり、後縁が鋭く突出する。前翅は基半部が不透明で黒褐色、その外側に白帯がある。後翅は基半部が黄色で、その外側に黒褐色帯がある。イネ科草本を摂食する。卵越冬、年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地の林間や河川敷のイネ科低茎草地に生息する。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

営場の減少や植生遷移の進行によって生息に適した草地が減少し、分布が局所的になっていると考えられる。低茎草地が存在するような草地環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

和田一郎, 1995; 内田正吉, 2005b.

(執筆: 伊藤元)



アカハネバッタ

Celes akitanus

バッタ目 (直翅目)

バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	・	EX	CR

【形態・生態】

体長 (翅端まで) ♂ 25 ~ 27mm、♀ 35 ~ 40mm。体は褐色で幅広い。前胸背板前部・後部の側隆起が明瞭。前翅は後腿節端をわずかに超え、黒褐色斑が散在。後翅基半部は鮮やかな紅色。明るい林道やマツ疎林の林床に成立した草地に生息する。

【分布の概要】

本州 (確実な記録は山形、新潟、東京、長野)

【都における生息環境】

戦前は高尾山周辺に普通に見られたという。また、区部でも目撃情報がある。しかし、現在は絶滅したと考えられている。明るいマツ林の林床などに生息していたと推測される。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

東京都本土部から姿を消した年代は不明だが、国内では1986年に新潟県で採集されて以降の記録がない。

【関連文献】

Shiraki, 1910; 日本直翅類学会 (編), 2006.

(執筆: 伊藤元)



© SEHU, Hokkaido Univ.

カワラバッタ

Eusphingonotus japonicus

バッタ目(直翅目)
バッタ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	CR	CR	CR	

【形態・生態】

体長(翅端まで) ♂ 33 ~ 36mm、♀ 41 ~ 45mm。灰色。翅が発達し、後翅に黒褐色の帯があり、その内側は鮮やかな薄青色。跗節の爪間板は発達せず、体を垂直にして止まることが少ない。拳大の石と砂が混じる砂礫河原に生息する。植被率が低い環境を好み、草地にはほとんど入り込まない。カワラヨモギやカワラハハコなどの植物やトンボの死骸などの動物質を摂食した観察例がある。卵越冬、年1化で夏から秋に成虫が見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

多摩川の砂礫河原(主に中流域)に生息するが、丸石が存在するような河原が主要な生息地となっており、安定した生息地は限られている。

【東京都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

自然に成立した河原の消失や植生遷移の進行などにより、生息環境が減少・縮小している。生息地の砂礫河原を維持するとともに、新たに生息適地である砂礫河原の創出を行うことが望ましい。

【関連文献】

内田正吉, 2005b; 雛倉正人・伊藤元, 2010.

(執筆: 伊藤元)



【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、日本直翅類学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑 . 北海道大学出版会 . に準拠した。

【関連文献】

- 浜口哲一・中原直子, 2004. バッタ目 . 神奈川昆虫談話会 (編). 神奈川県昆虫誌 I , pp. 139-188. 神奈川昆虫談話会 .
- 雛倉正人, 2008. 東京平野部に残っていたイナゴモドキ (特にその生息環境について). 寄せ蛾記 , (129): 15-19.
- 雛倉正人・伊藤元, 2010. 多摩川下流域で確認されたカワラバッタ . 神奈川虫報 , (169): 27-30.
- 宮武頼夫・加納康嗣 (編著), 1992. 検索入門セミ・バッタ . 保育社 . 216 pp.
- 日本直翅類学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑 . 北海道大学出版会 . 687 pp.
- Shiraki, T., 1910. Acrididen Japans. Keiseisha. 90 pp.+ 2 pls.
- Sugimoto, M., 2001. Taxonomic study of Trigonidiinae (Orthoptera: Trigonidiidae) of the Rykyus, SW Japan, with descriptions of two new species. *Tettigonia*, 3: 81-87.
- 東京都板橋区, 2001. 板橋区昆虫類等実態調査 (III) 報告書 . 板橋区 . 107 pp.
- 内田正吉, 2003. 1960 年代以前に東京近郊で採集されているバッタ類 . 埼玉動物研通信 , (44): 30-41.
- 内田正吉, 2005a. 東京都のイナゴモドキ . 埼玉動物研通信 , (49): 16-17.
- 内田正吉, 2005b. 減るバッタ 増えるバッター環境の変化とバッタ相の変遷 . エッチエスケー . 141 pp.
- 内田正吉, 2008. 東京都のクツワムシの記録 . 埼玉県動物研通信 , (59): 14-24, 46.
- 和田一郎, 1995. 東京都の直翅類 . ばったりぎす , (103): 46-65.
- 和田一郎, 2001. 東京都 23 区の直翅類 . 寄せ蛾記 , (103): 40-49.

(3) カメムシ目

1 選定・評価方法の概要

東京都本土部のカメムシ目のまとまった記録として、古いものでは東京府(1938. 武蔵野昆虫誌, 194+28pp.)による武蔵野地域の目録がある。しかし、その多くは学名・和名のみの記述にとどまっており、記録地など具体的な情報が不明な種が多い。平山修次郎(1933. 原色千種昆虫図譜. 三省堂, 東京. 186pp.+104pls.、1937. 原色千種続昆虫図譜. 三省堂, 東京. 194pp.+88pls.)の図版にも多くの東京産の標本が図示されている。これらには、現在では絶滅したタガメやコバンムシなどが掲載されており、記述からは区部周辺にもこれらの種が生息していたことがうかがえる。

東京都本土部からは、現時点で 1,074 種(東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト, <http://homepage3.nifty.com/TKM/>, 2010 年 1 月 1 日現在)のカメムシ目が記録されている。極めて種数の多い多様な分類群であることに加え、後述のように基礎的なデータが極めて不足している現状から、今回の選定にあたっては、前回(1998 年版)評価対象となっていたセミ科と、ある程度現状が把握できた水生カメムシ類について評価を行った。

近年のまとまった報告としては、皇居(友国雅章・林正美・碓井徹, 2000. 皇居の半翅目(腹吻群同翅類を除く). 国立科学博物館専報, (36):35-55.)など、限定された場所についてはあるものの、今回、評価対象とした科に限定しても広域を対象としたものは見当たらず、評価に資する基礎的なデータが極めて不足しているのが現状である。したがって、検討対象種は 1998 年版の掲載種 8 種に、今回新たに 15 種を加えた 23 種とし、評価はすべて定性的要件によって行った。評価にあたっては、現地調査の結果や入手できた文献資料のほか、聞き取りなどの情報、隣接県での生息状況なども参考とした。

なお、セミ科以外の陸生カメムシ類については、シロヘリツチカメムシなど絶滅危惧に該当すると考えられる種もあるが、既存情報が不足しているため今回は評価対象外とした。

また、絶滅危惧Ⅰ類のランクについては、絶滅危惧ⅠA類(CR)と絶滅危惧ⅠB類(EN)を区分した。過去の記録は遡れるものについては戦前のものも含め採用した。評価にあたっては、多くの方から未発表記録や生息状況などについて多数提供していただいた。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、19 種が本レッドリストの掲載種に選定された。チッチゼミおよび水生カメムシ類で「情報不足」(DD)と評価されたものは、絶滅危惧に該当すると考えられ、確実な記録も存在するが、評価に資する情報が極めて不足しているものである。

セミ科では、前回(1998 年版)8 種が選定されていたが、半数にあたる 4 種が地域区分・東京都全体ともにランク外と判定された。これは、今回の評価基準として、過去から現在にいたる減少度合いを基本とし、生息環境の脆弱性、分布範囲などの情報も加味してランクを決定したことによる。エゾハルゼミのように分布は限定されているが、生息地では普通に見られ、現状として生息環境・状況が安定的であると判断された種、コエゾゼミなどのように記録がごく少ないなど、希少性が高くとも、現状として生息環境・状況が安定的であると判断された種、クマゼミのように明らかに増加傾向にある種は、この基準を満たしていないためランク外と判定した。

今回新たに評価対象に加えた水生カメムシ類は、池沼や湿地環境に生育しており、生息環境の改変に脆弱な種が多い。また、丘陵の谷戸や河川敷などの水域だけでなく、区部の公園などに残されている平地の池沼も重要な生息地となっている。特に、エサキアメンボ、ババアメンボ、ホッケミズムシなどは区部でしか確認されていない。

(須田 真一)

アカエゾゼミ

Tibicen flammatus

カメムシ目(半翅目)
セミ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
□	□	DD	○	○	

【形態・生態】

翅端まで60～68mm。体も翅も赤褐色がかかる。エゾゼミに酷似するが、翅胸後縁の両脇に白い粉をまとわないことで区別できる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地の落葉広葉樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

南多摩と西多摩の山地の落葉広葉樹林に生息する。生息密度は低いものの生息環境は概ね保たれている。ただし、南多摩の生息地は小規模で、他から孤立しており、近年の登山者の増加による登山道周辺の樹木の衰弱や枯死、乾燥化の進行には注意する必要がある。

【関連文献】

須田孫七, 1956; 林正美, 1989.



© 税所康正

(執筆: 須田真一)

ハルゼミ

Terpnosia vacua

カメムシ目(半翅目)
セミ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EX	CR	EN	EN	EN	

【形態・生態】

翅端まで30～37mm。体は褐色で黄白色の微毛に覆われる。♀は小型で産卵管はやや突出する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から低山地のアカマツ林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には各地で見られたようであるが、区部からは絶滅、多摩地域の平地でもほぼ見られなくなった。現在の主な生息地は丘陵地の一部に限られるが、松枯れなどによるアカマツ林の衰退によって現存の生息地の多くが近い将来に失われることが予測されるため、今後の動向には注意が必要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1937; 三好智和, 2008.



© 税所康正

(執筆: 須田真一)

ヒメハルゼミ

Euterpnosia chibensis

カメムシ目(半翅目)
セミ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
□	□	CR	□	CR	

【形態・生態】

翅端まで32～35mm。体は緑色で黒斑と緑褐色斑が混じる。♀はやや小型で産卵管は突出する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地から低山地の常緑広葉樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩丘陵西部から南多摩の低山地にかけての数ヶ所のみから記録されている。生息地は極めて局地的で発生個体数も一般に少ない。人為的かく乱の少ない安定的な樹林にのみ生息するようである。多摩丘陵の開発などによる生息地の孤立化も見られることから今後の動向には注意が必要である。

【関連文献】

石川一, 1978; 林正美・井上和也, 1985.



© 税所康正

(執筆: 須田真一)

ヒゲラシ

Tanna japonensis

カメムシ目(半翅目)
セミ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	○	○	

【形態・生態】

翅端まで 39 ～ 48mm。体は褐色で黒斑と緑斑が混じる。♀はやや小型で腹部は著しく小さい。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域の丘陵地から山地では各所に生息しており、一般に個体数も多く、現状として絶滅のおそれはないが、区部と周辺地域では減少が著しい。特に区部においては皇居など、充実した樹林を伴った広い緑地とその周辺以外ではほぼ見られなくなっている。

【関連文献】

友国雅章ら, 2000; 久居宣夫, 2001.



(執筆: 須田真一)

チッチゼミ

Cicadetta radiator

カメムシ目(半翅目)
セミ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	DD	DD	DD	

【形態・生態】

翅端まで 27 ～ 32mm。日本本土のセミ科では最小種。体は全身黒色。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

低山地から山地のマツやモミなどが混生した樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

奥多摩の山地を中心として生息しているが、記録は少なく個体密度も低いため、現時点で評価することは困難である。絶滅危惧に該当する可能性もあるため、更なる調査が必要である。

【関連文献】

とけじ三郎, 1938; 松原豊, 2003.



(執筆: 須田真一)

タイコウチ

Laccotrephes japonensis

カメムシ目(半翅目)
タイコウチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	VU	VU	VU	VU	

【形態・生態】

体長 30 ～ 38mm。扁平な体型で前脚は鎌状となっており、腿節に 1 本のとげがある。呼吸管は長く体長とほぼ同じ。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湿地や水田などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には普通に見られたようであるが激減しており、区部と周辺地域ではすでに絶滅したと判断される。浅い水域を好み、水田に強く依存している種であることから、水田の消失や圃場整備による乾田化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。多摩地域の丘陵地には生息地が点在するが、減少傾向にあるため今後の動向には注意が必要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 里山昆虫研究会, 1996.



(執筆: 須田真一)

ミズカマキリ

Ranatra chinensis

カメムシ目(半翅目)
タイコウチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 40～45mm。細長い体型で前脚は鎌状となっている。呼吸管は体長とほぼ同じかやや長い。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現存する大型水生カメムシでは最も普通であり様々な水域で見られるが、区部では限られた場所で少数を確認できるに過ぎない。多摩地域では丘陵地や河川敷などの止水域に広く生息しているが、個体数は一般に少ない。成虫の移動力は高いようで、稀に学校プールなどで見られることもある。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 里山昆虫研究会, 1996.



(執筆: 須田真一)

ヒメミズカマキリ

Ranatra unicolor

カメムシ目(半翅目)
タイコウチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EX	—	—	CR	

【形態・生態】

体長 24～32mm。細長い体型で前脚は鎌状となっている。ミズカマキリに似るが小型で、呼吸管は体長よりも明らかに短い。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

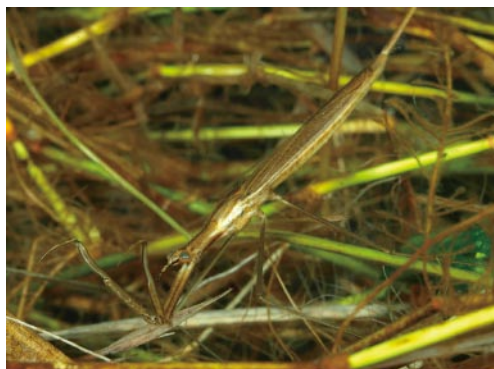
平地の池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は少なく区部と隣接する北多摩の一部に限られる。確実に現存するのは皇居のみと思われる。主に水深のある水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼に生息するため、減少の原因は池沼の消失や水質の劣化によるところが大きいと思われる。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 友国雅章ら, 2000.



(執筆: 須田真一)

コオイムシ

Appasus japonicus

カメムシ目(半翅目)
コオイムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	EN	—	CR	NT

【形態・生態】

体長 17～20mm。体型は卵形で扁平、前脚は鎌状となっている。♀は♂の背中に卵を産み付ける。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には普通に見られたようであるが、区部では皇居など極めて限られた場所に現存するに過ぎない。多摩地域でも減少著しく、近年の確実な記録は極めて少ない。池沼や水田の消失、圃場整備による乾田化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 友国雅章ら, 2000.



(執筆: 須田真一)

オオコオイムシ

Appasus major

カメムシ目(半翅目)
コオイムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	EN	VU	VU	VU	

【形態・生態】

体長 23 ～ 26mm。体型は卵形で扁平、前脚は鎌状となっている。♀は♂の背中に卵を産み付ける。コオイムシに酷似するが、やや大型であることや前胸背板前縁の形などで区別される。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に丘陵地の湿地などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域の丘陵地から記録されている。生息地は局地的で個体数も少ない。コオイムシと混生することもあるが、より湿地的な環境を好むため、植生遷移の進行などによる乾燥化によって生息地が失われることが多い。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1996; 鈴木裕, 2006.



(執筆: 須田真一)

タガメ

Lethocerus deyrolli

カメムシ目(半翅目)
コオイムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	VU

【形態・生態】

体長 48 ～ 65mm。日本本土の水生カメムシ類では最大種。体型は長卵形で扁平、前脚は太く鎌状となっている。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950年代頃までは区部をはじめ各地で記録されているが、1970年頃を最後にそれ以降の確実な記録はなく、すでに東京都本土部で絶滅したと判断される。池沼や湿地の消失や質の劣化、水田の消失、圃場整備による乾田化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。さらに、ウシガエルやアメリカザリガニなどの捕食性外来生物の影響も大きかったと推測される。

【関連文献】

平山次次郎, 1933; 苅部治紀 (編), 2011.



(執筆: 須田真一)

ホッケミズムシ

Hesperocorixa distanti hokkensis

カメムシ目(半翅目)
ミズムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	DD	NT

【形態・生態】

体長 9.5 ～ 10.8mm。大型のミズムシで前胸背と翅の表面にあるしわ状の模様は顕著である。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は区部に限られ、近年では皇居で確認されている。水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼にのみ生息する。環境変化に脆弱で絶滅危惧に該当する可能性があるため、更なる調査が必要である。

【関連文献】

友国雅章ら, 2000.



(執筆: 須田真一)

ミヤケミズムシ

Xenocorixa vittipennis

カメムシ目(半翅目)
ミズムシ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	—	—	—	DD	NT

【形態・生態】

体長 7.2 ～ 9.1mm。やや大型のミズムシで、体型は丸みがあり幅広く強い光沢がある。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は区部に限られ、近年では皇居で確認されている。水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼に生息する。環境変化に脆弱で絶滅危惧に該当する可能性があるため、更なる調査が必要である。

【関連文献】

友国雅章ら, 2000.



(執筆: 須田真一)

コバンムシ

Ilyocoris exclamacionis

カメムシ目(半翅目)
コバンムシ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EX	EX	○	○	EX	EN

【形態・生態】

体長 11.3 ～ 12.8mm。体型は小判型で光沢があり、前胸背と前翅の基部は生きているときには鮮やかな緑色である。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

平地の池沼に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は少なく 1940 年代以降のものは見い出せないことから、すでに絶滅したと判断される。水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼に生息し、環境変化に脆弱なことから、絶滅の原因は池沼の消失や質の劣化によるところが大きいと思われる。

【関連文献】

平山修次郎, 1933.



(執筆: 須田真一)

オオアメンボ

Aquarius elongatus

カメムシ目(半翅目)
アメンボ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
CR	VU	○	○	○	

【形態・生態】

体長 19 ～ 27mm。日本産アメンボ科の最大種。大きさから他種との区別は容易。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から低山地の緩やかな流れや池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部と周辺地域では主に崖線沿いの湧水地に残存しているが局地的で個体数も少ない。丘陵地から低山地の水路や小河川では現在も各所で見られるが、水質汚染などの環境変化には敏感と考えられるため注意が必要である。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1996; 友国雅章, 2005.



(執筆: 須田真一)

ババアメンボ

Gerris argentatus babai

カメムシ目(半翅目)
アメンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	NT

【形態・生態】

体長 6.3 ～ 9.1mm。小型のアメンボで体は黒色。成虫には長翅型と短翅型がある。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

平地の池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

抽水植物帯と開放水面の境界付近にのみ生息する種。区部から記録されているが、確実な記録はわずかであり現状については不明である。環境変化に脆弱で絶滅危惧に該当する可能性があるため、更なる調査が必要である。

【関連文献】

友国雅章ら, 2000.



(執筆者: 須田真一)

ハネナシアメンボ

Gerris amenbo

カメムシ目(半翅目)
アメンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	

【形態・生態】

体長 6.5 ～ 10mm。体は灰黒色から黒色。成虫は無翅型でときに長翅型も見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、

【都における生息環境】

平地の池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ヒシなどの浮葉植物が生育する場所に好んで生息する種。区部から記録されているが、確実な記録はわずかであり現状については不明である。環境変化に脆弱で絶滅危惧に該当する可能性があるため、更なる調査が必要である。

【関連文献】

友国雅章ら, 2000.



(執筆者: 須田真一)

エサキアメンボ

Limnopus esakii

カメムシ目(半翅目)
アメンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	NT

【形態・生態】

体長 7.9 ～ 10.5mm。体は暗赤色から褐色。体側に銀白色の微毛が密生しておりよく目立つ。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地の池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

抽水植物帯の内部にのみ生息する種。区部から記録されているが、確実な記録はわずかであり現状については不明である。環境変化に脆弱で絶滅危惧に該当する可能性があるため、更なる調査が必要である。

【関連文献】

友国雅章ら, 2000.



(執筆者: 須田真一)

シマアメンボ *Metrocoris histrio*

カメムシ目(半翅目)
アメンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 4.8 ～ 6.8mm。体は暗黄色で黒色の条紋を持つ。成虫は無翅型でときに長翅型も見られる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湧水のある小規模な流れに生息する。低山地の溪流にも生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

湧水のある流れには普通に見られる種であるが、区部では安定した湧水が残されている場所が少ないことから、生息地は極めて限られている。個体数も一般に多いが、湧水が枯渇すれば容易に絶滅するため十分な注意が必要である。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1996; 武蔵野市生物生息状況調査会(編著), 2001.



(執筆者: 須田真一)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、セミ科については、宮武頼夫・加納康嗣（編著），1992. 検索入門セミ・バッタ．保育社．に準拠した。
その他については、河合禎次・谷田一三（編），2005. 日本産水生昆虫．東海大学出版会．に準拠し、一部、評価者の判断により修正を加えた。

【関連文献】

- 林正美・井上和也，1985. 東京都内におけるヒメハルゼミの新産地．*Cicada*, 6(2): 23.
林正美，1989. 日本産セミの分布調査報告 (1) — アブラゼミ属，エゾゼミ属 —. *Cicada*, 8(1): 1-27.
平山修次郎，1933. 原色千種昆虫図譜．三省堂．186 pp. + 104 pls.
平山修次郎，1937. 原色千種続昆虫図譜．三省堂．194 pp. + 88 pls.
久居宣夫，2001. 自然教育園のセミ類．自然教育園報告，(33): 341-344.
石川一，1978. 八王子産のヒメハルゼミ．東京都の自然，(6): 14.
苅部治紀（編），2011. 水生昆虫大百科 2011 年度特別展展示解説書．神奈川県立生命の星・地球博物館．140 pp.
松原豊，2003. 東京都御岳山でチッチゼミ採集．*Cicada*, 17(4): 75.
三好智和，2008. 神奈川県・東京都でのハルゼミ観察．*Cicada*, 19(2/3): 30-31.
武蔵野市生物生息状況調査会（編著），2001. 武蔵野市生物生息状況調査報告書 平成 12 年度．武蔵野市環境部環境対策課．429 pp.
里山昆虫研究会，1996. 多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究（資料編）．182 pp.
須田孫七，1956. 高尾山のアカエゾゼミ．はばたき，3: 11.
鈴木裕，2006. 田尾美野留氏採集のカメムシ類．神奈川虫報，(156): 33-39.
とけじ三郎，1938. 東京附近に於けるチッチゼミの産地について．昆虫界，6(47): 64.
友国雅章，2005. 赤坂御用地と常盤松御用邸の異翅半翅類（昆虫綱）．国立科学博物館専報，(39): 397-408.
友国雅章・林正美・碓井徹，2000. 皇居の半翅目（腹吻群同翅類を除く）．国立科学博物館専報，(36): 35-55.

(4) ヘビトンボ目・アミメカゲロウ目

1 選定・評価方法の概要

ヘビトンボ目とアミメカゲロウ目は、今回新たに評価対象とした分類群である。これらは、共に脈翅系昆虫に属する分類群であることや、解説に共通する部分が多いことなどの理由により、ここでまとめて扱う。

東京都本土部からは、上記2目にラクダムシ目を加えた広義のアミメカゲロウ目として、現時点で61種が記録されている(東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト, <http://homepage3.nifty.com/TKM/>, 2010年1月1日現在)。これらのうち、今回は、ある程度現状が把握できたセンブリ科、ヘビトンボ科、ツノトンボ科を評価対象とした。ラクダムシ目(確実に記録されているのはラクダムシ1種のみ)についても検討を行ったが、評価に資する基礎的なデータがほとんどないために評価対象外とした。

したがって、検討対象種はヘビトンボ目で5種、アミメカゲロウ目では1種とした。

東京都においては、皇居(塚口茂彦, 2000. 皇居の脈翅類. 国立科学博物館専報, (36):109-113.)など、限定された場所についてのまとまった報告は見られるものの、今回対象とした3つの科に限定しても、広域を対象としたものは見当たらず、評価に資する基礎的なデータが極めて不足しているのが現状である。そのため、今回の評価はすべて定性的要件によって行い、入手できた文献資料や現地調査結果のほか、聞き取りなどの情報、隣接県での生息状況なども参考とした。その際、未発表記録や生息状況などについて、多くの方々から情報提供していただいた。

評価にあたっては、絶滅危惧Ⅰ類を絶滅危惧ⅠA類(CR)と絶滅危惧ⅠB類(EN)に区分し、過去の記録はさかのぼれるものについては戦前のものも含め採用した。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、検討対象としたヘビトンボ目5種、アミメカゲロウ目1種の計6種全てが本レッドリストの掲載種に選定された。過去から現在にいたる減少度合いを基本とし、生息環境の脆弱性、分布範囲などの情報も加味してランクを決定した。当然のことだが、絶滅危惧に該当するかどうかで判定したため、記録がごく少ないなど、希少性が高くとも、現状として生息環境・状況が安定的であると判断された種や、増加傾向にある種についてはランク外とした。また、全般にわたって「情報不足」(DD)や「データなし」と評価されたものが多いが、これは基礎的な情報が極めて不足していることによるものである。

ヘビトンボ目のセンブリ科とヘビトンボ科は、幼虫が水生であり、今回の掲載種もすべて池沼や湿地、小規模な流水に生息する種である。一部の種では区部の公園などの水域にも残存している。

アミメカゲロウ目のキバネツノトンボでは、確実な記録は平山修次郎(1933. 原色千種昆虫図譜. 三省堂. 186pp.+104PL.)に図示されたものしか見出すことができなかった。本種については、昼行性で目立つために記録されやすいことや、生息環境や近隣県の状況などから少なくとも記録地からは絶滅したと判断された。一方、オオツノトンボの場合は現地調査でも北多摩地域で確認されたが、それを含めても数例の記録のみであり、絶滅危惧にあるかを判断できなかった。そのほかにも、例えばウスバカゲロウ科には、河川敷などの砂礫地に生息するニセコウスバカゲロウ(クロコウスバカゲロウ)やオオウスバカゲロウなど、絶滅危惧に該当すると考えられる種もあるが、確実な記録があまりにも少ない、生息状況(特に近年)が不明、記録は存在するがその真偽が不明、などの理由によって、今回は評価することができなかった。

上記のように、ヘビトンボ目・アミメカゲロウ目に属していても、今回評価対象としなかった分類群(科)もあり、この中には絶滅危惧に該当すると考えられる種もある。

(須田 真一)

ヤマトセンブリ

Sialis yamatoensis

ヘビトンボ目(広翅目)
センブリ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	EX	DD	CR	CR	DD

【形態・生態】

前翅長 8 ～ 14mm。翅は全体が薄い茶褐色。正確な同定には交尾器を観察するのが有効。幼虫は水生で、昆虫類などの水生生物を捕えて食べる肉食性。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湧水が見られる湿地や小規模な池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

安定した湧水に依存する種のようなのである。水深が浅く抽水植物やヤナギ類などが生育する明るい場所を好むため植生遷移による乾燥化などに注意が必要である。東京都本土部では西多摩の丘陵地に 1ヶ所現存するのみであったが、最近になって周辺でも発見された。生息地は近似種に比較して極めて限られることから、環境選好性の幅はかなり狭いものと推測される。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1996; 川上洋一, 2007.

(執筆: 須田真一)



ネグロセンブリ

Sialis japonica

ヘビトンボ目(広翅目)
センブリ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	DD	DD	

【形態・生態】

前翅長 8.5 ～ 15.5mm。翅は全体が薄い黒褐色で前翅基部付近は濃色となる。正確な同定には交尾器を観察するのが有効。幼虫は水生で、昆虫類などの水生生物を捕えて食べる肉食性。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の池沼や湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

比較的規模の大きな池沼にも生息する種で、抽水植物が密生するような場所を好む。区部の池沼にもわずかに現存している。多摩地域では河川敷の伏流水などで形成された小規模な池沼でよく見られる。生息状況は不安定であり絶滅危惧に該当する可能性もあるため更なる調査が必要である。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1996; 塚口茂彦, 2000.

(執筆: 須田真一)



クロセンブリ

Sialis melania tohokuensis

ヘビトンボ目(広翅目)
センブリ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	DD	DD	DD	DD	

【形態・生態】

前翅長 7.5 ～ 18mm。翅は全体が薄い黒褐色で前翅基部付近は濃色となる。ネグロセンブリに酷似するが、本種の方が全体的に黒味が強く濃色となる。正確な同定には交尾器を観察するのが有効。幼虫は水生で、昆虫類などの水生生物を捕えて食べる肉食性。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地の湿地や小規模な池沼に生息する。

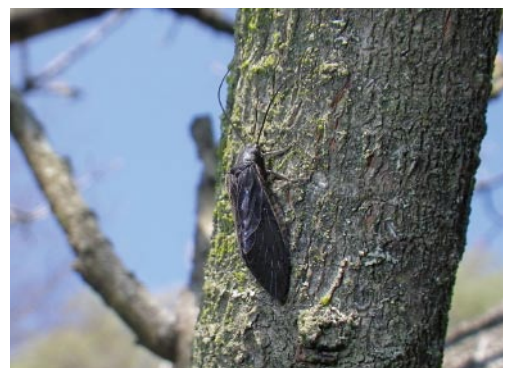
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域の丘陵地の数ヶ所から記録されている。木陰があり湧水が見られるような環境を好むため、谷戸の源頭部などに生息する場合が多い。このような場所は開発などで失われることも多く、絶滅危惧に該当する可能性もあるため更なる調査が必要である。

【関連文献】

林文男, 1995; 里山昆虫研究会, 2003.

(執筆: 須田真一)



ヤマトクロスジヘビトンボ

Parachauliodes japonicus

ヘビトンボ目 (広翅目)
ヘビトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	NT	○	○	○	

【形態・生態】

前翅長は 50mm に達する。翅は全体が薄い褐色。体色は黒褐色。幼虫は水生で、昆虫類などの水生生物を捕えて食べる肉食性。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地の湧水の見られる流れに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域の丘陵地など、生息条件の整った場所では普通に見られる種であるが、区部と周辺地域では安定した湧水が残されている場所が少ないことから、生息地は極めて限られており個体数も少ない。湧水が枯渇すれば容易に絶滅するため十分な注意が必要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 久居宣夫, 1998.



(執筆: 須田真一)

クロスジヘビトンボ

Parachauliodes continentalis

ヘビトンボ目 (広翅目)
ヘビトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	○	

【形態・生態】

前翅長は 50mm に達する。翅は全体が薄い褐色。体色は黒褐色。ヤマトクロスジヘビトンボに酷似するが、前翅の翅脈によって容易に区別できる。幼虫は水生で、昆虫類などの水生生物を捕えて食べる肉食性。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から低山地の湧水の見られる流れに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地はかなり局地的で一般に個体数も少ない。東京都本土部での記録は少なく生息状況などは不明であるが、ヤマトクロスジヘビトンボと同様な環境に生息するため、区部と周辺地域においては絶滅危惧に該当する可能性が高い。更なる調査が必要である。

【関連文献】

里山昆虫研究会, 1996.



(執筆: 須田真一)

キバネツノトンボ

Ascalaphus ramburi

アミメカゲロウ目 (脈翅目)
ツノトンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	EX	—	—	DD	

【形態・生態】

前翅長 20mm 内外。前翅は透明だが後翅は黄色でよく目立つ。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

平地の高茎草地に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は少なく 1940 年代以降のものは見出せないことから、すでに絶滅したと判断される。ススキやチガヤなどからなる比較的面積の広い乾燥した高茎草地进行を好むことから、絶滅の原因は萱場の消失などによる草地の減少によるところが大きいと思われる。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 武蔵野市生物生息状況調査会 (編著), 2001.



(執筆: 須田真一)

【種名・学名などの準拠文献】

ヘビトンボ目

和名、学名、配列は、河合禎次・谷田一三 (編), 2005. 日本産水生昆虫 . 東海大学出版会 . に準拠した。

アミメカゲロウ目

和名、学名、配列は、伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇 (編著), 1977. 全改訂新版原色日本昆虫図鑑 (下). 保育社 . に準拠した。

【関連文献】

林文男, 1995. センブリ類の分類を一段落させて . 兵庫陸水生物, (46): 1-24.

平山修次郎, 1933. 原色千種昆虫図譜 . 三省堂 . 186 pp. + 104 pls.

久居宣夫, 1998. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録 (10). 自然教育園報告, (29): 13-18.

川上洋一, 2007. 世界珍虫図鑑改訂版 . 柏書房 . 218 pp.

武蔵野市生物生息状況調査会 (編著), 2001. 武蔵野市生物生息状況調査報告書 平成 12 年度 . 武蔵野市環境部環境対策課 . 429 pp.

里山昆虫研究会, 1996. 多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究 (資料編). 182 pp.

里山昆虫研究会, 2003. 多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究 (資料編 II). 121 pp.

塚口茂彦, 2000. 皇居の脈翅類 . 国立科学博物館専報, (36): 109-113.

(5) コウチュウ目

1 選定・評価方法の概要

コウチュウ目では、1998 年版の掲載種 308 種を再評価するとともに、生息情報が比較的得られている種類（特にゲンゴロウ科やクワガタムシ科、カミキリムシ科など）の中から 51 種を新たに検討対象種に加え、評価を行った。

評価方法はすべての種類で定性的要件を用い、入手できた文献資料のほか、聞き取りなどの情報も参考とした。絶滅危惧Ⅰ類のランクについては、絶滅危惧ⅠA 類 (CR) と絶滅危惧ⅠB 類 (EN) を区別した。過去の記録は原則として戦後以降 (1945 年以降) としたが、一部の種類については戦前の文献も用いた（特に区部と北多摩地域）。これは分布していた（あるいは生息している）ことが明らかであるものの、戦後以降の記録を探し出せなかったことによる。

また、オサムシ科とホソクビゴミムシ科、数種のカミキリムシ科については、協力者から情報を得て評価を行った。

2 選定・評価結果の概要

『東京都の野生生物種目録 1998 年版』には本土部で 1,130 種のコウチュウ目が記載されているが、今回の検討対象種は 359 種であり、そのうち 195 種が本レッドリストの掲載種に選定された。これらのうち、今回新たにレッドリストに加えられた種類はカミキリムシ科 24 種をはじめ、合計で 51 種に及ぶ。また、前回 (1998 年版) のリストから削除された種類はオサムシ科 44 種、ハネカクシ科 20 種、カミキリムシ科 73 種をはじめ、合計で 164 種に及ぶが、これは今回の選定方針として希少性（過去の記録がごく少ない）を評価基準で重要視しなかった点が大きいのである。

地域区分別では、予想されたとおり、区部で掲載種が著しく多く、次いで北多摩地域、南多摩地域、西多摩地域の順となる。これは、区部ではほとんどの地域で生息環境が失われてしまっていること、北多摩地域では狭山丘陵以外に広域な生息環境が見あたらないこと、南多摩地域では八王子市の高尾山の存在と、小仏山地ならびに多摩丘陵の一部に良好な生息環境を残していること、西多摩地域では奥多摩をはじめとして南多摩地域以上に健全な地域が広がっていることに起因している。

生息環境別では、ゲンゴロウ科やガムシ科など池沼・湿地性の種類の衰亡が著しく、この傾向は地域区分によらない。また、オサムシ科の多くの種類のように、河原・草地環境に生息するものも同様で、特に多摩川における河口域と下流部の生息環境の劣化が要因と考えられる。海浜性の種類も同様であろうが、分布・生息情報がほとんど得られなかったため、今回は検討対象種としたものの自体が少ない。以上のような非森林環境と比較する限りでは、森林環境に生息するものの衰亡は全体として顕著でない。ただし、アトキリゴミムシ類や一部のカミキリムシ類などでは、森林性の種類であっても平地や丘陵部では減少傾向にあるものが多い。これは地域区分別の良好な生息環境の有無・大小・連続性と密接に関連している。

（高桑 正敏）

カワラゴミムシ

Omophron aequalis

コウチュウ目(鞘翅目)
カワラゴミムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	EN	—	EN	

【形態・生態】

体長5.5～6.5mm。円形の体型で、体の前半部と後半部の可動性を欠き、背面に特有のまだら模様がある。歩行は敏捷で、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

中・上流域の砂礫質の河原、ときに海岸に生息する。平地部では非常に稀である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川敷の泥質化などにより、生息環境は悪化しつつある。平地部ではほぼ絶滅に近いと思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

エリザハンミョウ

Cicindela elisae

コウチュウ目(鞘翅目)
ハンミョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長9～11mm。小型のハンミョウで、上翅に3条の白帯を持つ。成虫は夏を中心に出現し、幼虫で越冬する。ヒメハンミョウは本種の古い異名である。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

河原などの水たまりの周辺など、やや湿った砂地を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地では群生することが多いが、開発などに伴い、やや湿った砂地環境が減少しつつある。

【関連文献】

榎戸良裕, 1985; 上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

コハンミョウ

Cicindela specularis

コウチュウ目(鞘翅目)
ハンミョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長11～13mm。エリザハンミョウに似るがやや縦長で大型、白帯の形状も異なる。♀の上翅中央に鏡状紋を持つ。成虫は夏を中心に出現し、幼虫で越冬する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

耕作地周辺や河川など、やや湿り気の残る環境に生息する。ときに池などの水草の葉上で見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

耕作地などの減少に伴い、都市部では生息地は減少傾向にある。

【関連文献】

榎戸良裕, 1985; 上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ニワハンミョウ

Cicindela japana

コウチュウ目(鞘翅目)
ハンミョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	NT	NT	○	○	

【形態・生態】

体長 15 ～ 19mm。比較的大型の種で、上翅中央に斜めの白紋を持つ。地色は暗緑色から黒色。上唇は長方形で、前胸腹板に白い剛毛を欠く。成虫で越冬する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地の耕作地周辺や林道など、やや乾いた環境で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

耕作地などの減少に伴い、都市部では生息地は減少傾向にある。山地・山麓部などでは健全である。

【関連文献】

榎戸良裕, 1985; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ホソハンミョウ

Cicindela gracilis

コウチュウ目(鞘翅目)
ハンミョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	EN	○	CR	VU

【形態・生態】

体長 10 ～ 12mm。体型は細型。側面に 2 対の白紋を持ち、会合部後方に赤紋を持つ個体とこれを欠く個体がある。成虫は夏を中心に出現し、幼虫で越冬する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

河川敷などの草地に生息する。平地から山地に分布するが、生息地は比較的局限される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川敷などの草地の減少に伴い、特に都市近郊部での個体数減少が著しい。

【関連文献】

榎戸良裕, 1985; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

カワラハンミョウ

Cicindela laetescripta

コウチュウ目(鞘翅目)
ハンミョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	○	○	○	EX	EN

【形態・生態】

体長 14 ～ 17mm。脚は細く長い。上翅の周辺部に広く白紋を持つが、関東周辺の個体は中央の黒色部が発達する。成虫は夏を中心に出現し、幼虫で越冬する。砂質の海岸で砂丘状の環境を好む。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

稀に中流域の砂礫質の河原に見られた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩川での古い記録があるが、近年の採集例は全くなく、おそらく絶滅したと考えられる。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

クロナガオサムシ

Leptocarabus procerulus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 25 ～ 34mm。背面は光沢を欠いた黒色。側片の丘孔点列は翅端近くまで認められる。主に樹林に生息する。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

樹林性の種であるが、ときに河川敷などに生息することもある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

都市部・平地部においては、生息環境である樹林は減少傾向にある。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

セアカオサムシ

Hemicarabus tuberculosus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	DD	○	○	DD	NT

【形態・生態】

体長 16 ～ 22mm。小型の種で前胸は赤銅色、上翅側片は光沢ある赤銅色から金色を帯びる。上翅には特有の瘤状隆起の列がある。主に草地に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

草地性の種で、比較的まばらな草地を好む。樹林に生息する場合は下草のない場合が多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

芝地などにも生息する場合があるので、個体数の増減については不明であるが、本種が生息している草地環境は可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ヒメマイマイカブリ

Damaster blaptoides oxuroides

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 32 ～ 50mm。細長い頭部と前胸を持つ。前胸に青藍色の光沢を帯びる個体が多い。肉食性であるオサムシ科の中では、本種はカタツムリ食に特化している。

【分布の概要】

本州(東北南部、関東、中部の一部)

【都における生息環境】

河川敷に多いが、平地から山地の樹林にも生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

都市部においては生息環境は減少傾向にある。本種の食性上、カタツムリが生息できる環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

フタモンマルクビゴミムシ

Nebria pulcherrima

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	EX	○	○	CR	EN

【形態・生態】

体長 11 ～ 12.5mm。背面は黄褐色で、上翅後方に大きな黒紋を持つ。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

中流域の砂礫質の河原に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川敷の砂礫地の泥質化などにより、生息環境は悪化しつつある。近年の採集例はほとんどないため、詳細については不明である。

【関連文献】

上野俊一ら (編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

キベリマルクビゴミムシ

Nebria livida angulata

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	EX	○	○	CR	EN

【形態・生態】

体長 13 ～ 16.5mm。頭部と上翅は黒色。上翅側縁は黄褐色の縁取りを持つ。河原などに生息するカワチマルクビゴミムシに一見似ているが、本種は頭部が黒く、前胸の大部分が黄褐色で広く黒化しないこと、体が一般に大きいことから区別できる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

中流域の砂礫質の河原に生息するが、稀に住宅地などで見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川敷の砂礫地の泥質化などにより、生息環境は悪化しつつある。近年の採集例はほとんどないため、詳細については不明である。

【関連文献】

上野俊一ら (編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

ツヤヒメヒョウタンゴミムシ

Clivina castanea

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 7.2 ～ 8.5mm。黒褐色で光沢が強い。腹部末端両側の2孔点は近接する。中脛節は先端前に長いとげが1本ある。前胸は凸隆し、側部は丸い。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

詳細は不明。耕作地周辺などで得られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西日本に多い種で、関東などでは採集報告も少なく、個体数の増減などの詳細については不明である。

【関連文献】

中根猛彦, 1978a; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ホソチビヒョウタンゴミムシ

Dyschirius steno

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長 2.9 ～ 3.2mm。同属の中では体型が著しく細型。銅緑色の強い光沢を持つ。前頭に3条の横隆起がある。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

中流域の砂礫質の河原に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

砂礫地の泥質化による生息環境の悪化が挙げられ、本種の生息地自体も減少傾向にある。

【関連文献】

中根猛彦, 1978a; 上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ナガチビヒョウタンゴミムシ

Dyschirius cheloscelis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	□	□	□	DD	

【形態・生態】

体長 3.9 ～ 4.4mm。本属の中では大型の種。前頭にT字型の隆起がある。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

中流域の砂礫質の河原に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

砂礫地の泥質化による生息環境の悪化が挙げられ、本種の生息地自体も減少傾向にある。

【関連文献】

中根猛彦, 1978a; 上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

オサムシモドキ

Craspedonotus tibialis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	VU	—	—	NT	

【形態・生態】

体長 20 ～ 24mm。背面は光沢のない黒色。前胸は横長で後端がくびれる。脛節は黄褐色。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

砂礫質の河原、砂地の海岸などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大型の種で連続した比較的広い砂礫地や砂地環境が必要とされるが、そのような環境は減少している。砂礫地の泥質化も影響していると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

クラサワメクラチビゴミムシ

Kurasawatrechus eriophorus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	○	✳	✳	

【形態・生態】

体長 2.7 ~ 3.1mm。小型種、黄褐色で複眼を欠く。

【分布の概要】

本州(奥多摩)

【都における生息環境】

山地帯の地下浅層や洞窟などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

地中性の種であるため知見が断片的であり、生態についても不明点が多い。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ムツモンコミズギワゴミムシ

Paratachys plagiatus shimosae

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	DD	

【形態・生態】

体長 2.8mm 前後。平たくつやのある黒色で、上翅側方に3対の赤紋を持つ。

【分布の概要】

本州、種子島

【都における生息環境】

河口付近の汽水域、海岸の淡水の流入部周辺などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西日本の海岸部での報告が多い。関東では生息地は極めて限られる。河口域の干潟や湿地を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

アトモンコミズギワゴミムシ

Tachyura klugi euglypta

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	DD	

【形態・生態】

体長 3mm 前後。上翅は強い点刻列があり、上翅端近くに黄色の円紋がある。脛節と跗節は黄褐色である。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

平地から山地の裸地周辺、休耕畑などのスギゴケの生育するような環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

公園などでは環境の安定的な部分に見られる。都市部では生息に適した環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

キバネキバナガミズギワゴミムシ

Armatocillenus aestuarii

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

【形態・生態】

体長 4.5mm 前後。頭部と前胸は弱い金属光沢のある黒色。上翅は黄褐色で中央後方に不明瞭な黒紋を持つ。後脚転節が非常に長く末端は鋭くとがる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

河口付近の汽水域に生息する。満潮時には生息地は水没する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩川下流域で非常に限定された部分に見られたが、近年の採集例はない。河口域の干潟や湿地を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	□	□	□	CR	VU



(執筆: 田尾美野留)

キアシルリミズギワゴミムシ

Bembidion trajectory

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

【形態・生態】

体長 4mm 前後。細型で青い金属光沢を持つ。触角第1節と脚は黄褐色。灯火に飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

砂礫質の河原に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

都市部周辺では河川敷の砂礫地の泥質化や減少などにより、生息環境は減少しつつある。中・上流域では健全と思われる。

【関連文献】

中根猛彦, 1978b; 上野俊一ら(編著), 1985.

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	○	○	○	○	



(執筆: 田尾美野留)

アオヘリミズギワゴミムシ

Bembidion leucoleum

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

【形態・生態】

体長 5.5mm 前後。比較的細型で強い銅緑色の金属光沢を持つ。脛節は黄褐色。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の休耕中の耕作地などの、やや湿った草地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などにより、特に都市部では生息環境が減少しつつあると思われる。

【関連文献】

中根猛彦, 1978c; 上野俊一ら(編著), 1985.

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	□	□	□	NT	



(執筆: 田尾美野留)

ヒラタマルゴミムシ

Cosmodiscus platynotus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	DD	DD	○	DD	

【形態・生態】

体長8～9mm。マルガタゴミムシに似た幅広い体型を持ち、黒色で強い光沢がある。前胸側片は幅広く、特に後方で著しい。灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

不明。樹林や竹林などの周辺で見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

谷戸周辺などで見られることが多いので、開発などによる生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ルイスオオゴミムシ

Trigonotoma lewisii

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	⊖	○	

【形態・生態】

体長16～18mm。頭部と前胸は銅色の金属光沢、上翅は黒色でやや青みを帯びた光沢がある。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

樹林性の種。平地から丘陵地の土中で越冬している個体がよく見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地では樹林の縮小などにより、生息環境は減少傾向にあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

オオナガゴミムシ

Pterostichus fortis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	⊖	○	○	○	

【形態・生態】

体長17～21mm。黒色で大型の種。♀はやや光沢が弱い。クロオオナガゴミムシに似ているが、前胸背板は幅広く、基部両側の凹陷の外側に、明瞭な縦隆条がある。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

泥質の河川敷などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では河川改修などにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

アシミゾヒメヒラタゴミムシ

Agonum thoreyi nipponicum

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	VU	NT	VU	

【形態・生態】

体長 6.5 ～ 8.5mm。体はやや扁平な細型、背面は黒色で金属光沢はない。跗節に3本の縦溝を持つ。触角は第3節から微毛に覆われ、第5跗節下面に刺毛列がある。北海道や東北に多く、中部以西では少ない。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

湿地性の種で、ヨシ原などの根際に生息する。水辺を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

谷戸・河川敷ともに本種が好む湿地環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

コクロツヤヒラタゴミムシ

Synuchus melantho

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長 9.5 ～ 13mm。光沢のある黒色。上翅肩部は強く前方に張り出す。下唇ひげの末端は三角形に広がる。脚の爪に鋸歯がある。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

樹林性の種で、やや山地性。平地では比較的稀である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

山地や低山地では健全。平地部では樹林の減少などにより、生息環境は減少しつつある。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ヒメクロツヤヒラタゴミムシ

Synuchus congruus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	—	○	—	○	

【形態・生態】

体長 7.5 ～ 9.5mm。光沢ある黒色で、本属としては小型である。下唇ひげの末端部は強く膨らむ。脚の爪に鋸歯がある。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

樹林性の種。樹林周辺の側溝などで見られるが、詳細は不明。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林の縮小などにより、生息環境は減少しつつある。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ブリットンツヤヒラタゴミムシ

Synuchus orbicollis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

【形態・生態】

体長 8.5 ～ 11.5mm。光沢ある黒色、前胸は非常に幅広く強く隆起する。前胸側縁はほとんど平圧されない。脚の爪に鋸歯がある。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

平地のマツ林などの林床で得られることがある。河川周辺で見られることが多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などにより好適な生息環境は減少傾向にあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	—	—	NT	



(執筆: 田尾美野留)

キアシツヤヒラタゴミムシ

Synuchus callitheres

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

【形態・生態】

体長 11.5 ～ 14.5mm。黒色、♀の上翅は♂に比べて光沢が鈍い。脚は黄褐色で、爪に鋸歯がある。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地では中流域の河川敷で見られる。山地では樹林中の沢沿いなど。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地部では河川改修などにより生息環境が減少傾向にあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	—	○	NT	



(執筆: 田尾美野留)

ツヤマルガタゴミムシ

Amara obscuripes

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

【形態・生態】

体長 7.5 ～ 8mm。♂の背面に強い光沢がある。♀の光沢は鈍い。体表面の点刻を欠く。触角第1～3節は赤褐色である。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

不明。個体数も少ない。他県では低地の河川敷などの草地で確認されている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

稀に見られる種のため、減少傾向など詳細は不明である。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	DD	DD	DD	DD	



(執筆: 田尾美野留)

キアシマルガタゴミムシ

Amara ampliata

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	VU	—	VU	

【形態・生態】

体長 9 ～ 11mm。前胸は著しく横長、上翅側縁は褐色。脚の黄色い近似種がいるが、本種の前脚脛節の外端角は突出する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

中流域の砂礫質の河川敷や海岸の砂浜などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

砂礫地の泥質化などにより、生息環境は悪化しつつあると思われる。

【関連文献】

中根猛彦, 1983b; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ヒョウゴマルガタゴミムシ

Amara hiogoensis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	

【形態・生態】

体長 13.5 ～ 15.5mm。比較的大型の種。前胸背は横長。強い光沢を持つ。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

不明。一般的に個体数は少なく、単独個体で見られることが多い。他県では低地から丘陵地で確認されており、灯火に飛来する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録の少ない種であり、減少傾向など詳細は不明である。

【関連文献】

中根猛彦, 1983a; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

タナカツヤハネゴミムシ

Anisodactylus andrewesi

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	—	—	CR	DD

【形態・生態】

体長 11 ～ 12mm。背面に虹状の光沢があり、前胸背板の後角は丸い。脚と触角は黄褐色。灯火に飛来する。暖地性の種で、関東平野以西に多い。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

平地の湿地のヨシ原に生息し、かなり湿った場所を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

トゲアシゴモクムシ

Harpalus calceatus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	○	

【形態・生態】

体長 12.5 ～ 14.5mm。光沢のある黒色で、第 5 跗節の下面に櫛状のとげを持つ。灯火で得られることが多い。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

草地性と思われる。生態的知見は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種の生息に適した草地環境は宅地開発や河川改修などにより減少しつつあると思われる。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

チョウセンゴモクムシ

Harpalus crates

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	NT	○	○	NT	VU

【形態・生態】

体長 12 ～ 16mm。比較的大型の種で、背面に弱い金属光沢を持つことが多い。前胸基部の縁取りは中央で不明瞭。

【分布の概要】

本州、屋久島

【都における生息環境】

砂礫質の河原で、ヨシなどがまばらに生えた場所の石下に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

砂礫地の泥質化などにより、生息環境の悪化が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら (編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

ヒロゴモクムシ

Harpalus corporosus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 11 ～ 15.5mm。チョウセンゴモクムシに似るが、背面は黒色で金属光沢はない。前胸基部の縁取りは完全。♀の上翅は光沢がない。灯火に飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

草地性と思われるが不明。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生態的知見に乏しく、一般的に個体数も少ないので、減少傾向などは不明である。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

オオイクビツヤゴモクムシ

Trichotichnus nipponicus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長7～9mm。マルガタゴミムシ類に似た体型を持つ。横から見て後基節間の腹部が弱く隆起する。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

樹林性の種で平地から山地に生息する。樹林の状態が良好であれば公園の樹林などでも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地では宅地開発などにより、本種の生息に適した樹林環境は減少しつつあると思われる。低山地から山地にかけては健全である。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら(編著), 1985.

(執筆: 田尾美野留)



キュウシュウツヤゴモクムシ

Trichotichnus vespertinus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長9～10.5mm。光沢のある暗褐色、前胸は横長で後角が角張る。灯火によく飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地の耕作地周辺で見られることが多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などにより本種の生息環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら(編著), 1985.

(執筆: 田尾美野留)



ヒコサンツヤゴモクムシ

Trichotichnus noctuabundus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長8～9.4mm。キュウシュウツヤゴモクムシに似るが、前胸後角が鈍く丸まる。灯火によく飛来する。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

樹林性の種で、平地から低山地にかけて生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などにより本種が生息している樹林環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら(編著), 1985.

(執筆: 田尾美野留)



オオクロツヤゴモクムシ

Trichotichnus lewisi

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	—	—	NT	

【形態・生態】

体長 12.5 ～ 14.5mm。本属中最も大型の種で、背面に強い虹状光沢がある。灯火に飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

樹林性の種で、低山地から山地に見られる。平地では極めて稀。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生態的知見はほとんどない。開発などにより平地では本種が生息している樹林環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ホソチビゴモクムシ

Acupalpus sobosanus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	□	□	□	DD	

【形態・生態】

体長 3.7 ～ 4mm。黄褐色。触角第2節にまばらな細毛を持つ。普通種のキイロチビゴモクムシに似ているが、こちらの種は触角第2節は滑沢で、第3節から細毛がある。灯火に飛来したものを見ることが多い。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

湿地性の種で、平地に見られる。草の根際に生息すると思われる。一般的に稀な種である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ムネミゾチビゴモクムシ

Anthracus horni

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	□	□	□	DD	

【形態・生態】

体長 3.8 ～ 4.3mm。赤みを帯びた黄褐色。強い光沢がある。前胸後角は角張り、基部に1対の顕著な縦溝を持つ。灯火に飛来したものを見ることが多い。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

湿地性の種で、平地に見られる。草の根際に生息すると思われる。一般的に稀な種である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

Habu A., 1973; 上野俊一ら (編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ヨツボシゴミムシ

Panagaeus japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	NT	—	NT	

【形態・生態】

体長 10.5 ～ 12mm。上翅は黒色で、2 対の橙黄色の丸い紋を持つ。脚は赤褐色。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

河川敷などに生息。平地から丘陵地の樹林などでも見られる。比較的多様な環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

減少の原因は不明だが、各地で個体数の著しい減少が見られる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

クビナガヨツボシゴミムシ

Tinoderus singularis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	VU	VU	—	VU	DD

【形態・生態】

体長 10.7 ～ 11mm。ヨツボシゴミムシに似るが、やや小型で頭部が著しく細長い。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

河川敷に生息し、ときに多数の個体が見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

稀に河川敷で多数の個体が見られることがあるが、河川改修などにより本種の生息環境は悪化していると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

オオヨツボシゴミムシ

Dischissus mirandus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	NT	—	VU	

【形態・生態】

体長 17 ～ 19mm。ヨツボシゴミムシに似るが著しく大型。斑紋は角ばり、生時には鮮黄色。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

樹林に生息すると思われるが不明。崖などで越冬中の個体を見ることが多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大型の種なので、樹林の縮小など環境の悪化が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ニッポンヨツボシゴミムシ

Dischissus japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長8～9mm。上翅に2対の小さな黄紋を持つ。前胸側縁は黄色。灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

樹林に生息すると思われるが不明。一般的に個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

丘陵地などが主な生息地だが、樹林などの縮小などで、生息環境は減少傾向にあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

イグチケブカゴミムシ

Peronomerus auripilis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	NT	NT	●	NT	NT

【形態・生態】

体長9～9.5mm。背面は金銅光沢を持ち、金色の細毛に覆われる。前胸の最広部が突出する。灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湿地や、湿地状の環境があれば河川敷などでも生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

ムナビロアオゴミムシ

Chlaenius sericimicans

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	NT	●	NT	

【形態・生態】

体長13.2～14.5mm。体は金緑色の細毛に覆われる。前胸背は幅広く、中央より後方で最も広い。近似種がいるが、腹面から見て、上翅側片基部に毛がなく、滑沢であることによっても区別できる。灯火によく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河川敷や湿地などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

アカガネアオゴミムシ

Chlaenius abstersus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	NT	—	NT	

【形態・生態】

体長 14 ～ 14.5mm。頭部と前胸は銅光沢が強い。上翅は鈍い赤銅色。前胸背板は幅広く、後角は丸い。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

草地や丘陵地の栗林などの比較的明るい環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

疎林環境の減少などで、生息環境は減少傾向にあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

コアトワアオゴミムシ

Chlaenius hamifer

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	—	DD	・	VU	

【形態・生態】

体長 11.8 ～ 12.5mm。頭部と前胸は強い緑銅光沢、上翅は鈍い緑銅光沢を持ち、翅端に曲玉状の黄紋を持つ。アトワアオゴミムシに似ているが、翅端の紋がより広く外縁と接すること、前胸側縁の丸みが弱く、両側が顕著に黄色く縁取られていることにより区別できる。灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

不明。河川周辺で見られることが多い。草地性と思われる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や河川改修などにより、本種が生息している河川周辺の草地環境は減少傾向にあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

オオヒラタトックリゴミムシ

Oodes virens

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
・	・	EX	・	EX	CR

【形態・生態】

体長 15.5 ～ 17mm。トックリゴミムシ類の中では最も大型。体は鈍い光沢のある黒色で幅が広い。灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

不明。やや低山地性だと思われる。一般的に稀な種である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

近年の採集例はなく、詳細については不明である。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ニセトックリゴミムシ

Oodes helopioides tokyoensis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 9.5 ～ 10.5mm。近似種に比べて体型がやや短小で、背面の光沢は鈍い。上翅は微細印刻と密な細点刻を持つ。灯火に飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

平地の湿地で、ヨシ原などの湿潤な環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

湿地の減少など、生息環境は減少しつつあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

ヤマトトックリゴミムシ

Lachnocrepis japonica

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 10 ～ 12mm。トックリゴミムシ類の中では脚が赤褐色であることで区別できる。芝地などに設置された灯火によく飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

おそらく草地性と思われるが、詳細は不明。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

耕作地周辺などに生息すると思われるので、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

トックリゴミムシ

Lachnocrepis prolixa

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	—	NT	

【形態・生態】

体長 10.5 ～ 11.5mm。ヤマトトックリゴミムシに似るが脚は黒色。ニセトックリゴミムシとは体型が異なるほか、跗節下面に密毛があることで区別できる。灯火に飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

河川敷のヨシ原などの水辺に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川敷を好み、水辺環境を必要とするので、河川改修などにより、生息環境の悪化が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ナカグロキバネクビナガゴミムシ

Odacantha puziloi

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	□	□	□	DD	

【形態・生態】

体長6～6.5mm。前胸と頭部が細長く、上翅は黄褐色で会合部が幅広く帯状に暗色。腹部末端節が赤みを帯びる。上翅側縁に剛毛を欠く。北方系で、中部以西では少ない。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

平地の湿地でヨシ原のヨシの根際に生息する。非常に湿潤な環境を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

湿地の減少など、生息環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

チャバネクビナガゴミムシ

Odacantha aegrota

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	—	○	

【形態・生態】

体長6～7mm。上翅は明瞭な点刻列を持ち、腹部は黒色。前種に似るが、上翅側縁に剛毛を持つ。

【分布の概要】

北海道、本州、四国

【都における生息環境】

平地から丘陵地の湿地でヨシ原のヨシの根際に生息する。湿潤な環境を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

湿地の減少など、生息環境は減少傾向にあると思われる。湿地環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

フタモンクビナガゴミムシ

Archicolluris bimaculata nipponica

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	NT	—	NT	

【形態・生態】

体長7～8mm。頭部は黒色、前胸と上翅は赤褐色、上翅後半は黒色で1対の白紋を持つ。冬期、河川敷の崖の土中で集団越冬をすることが多い。灯火にも飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に河川敷に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修などにより、本種の生息環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

カタアカアトキリゴミムシ

Cymindis collaris

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	—	—	DD	

【形態・生態】

体長 8 ～ 9.5mm。頭部と前胸は弱い光沢を持つ。上翅は光沢がなく肩部に縦長の赤紋を持つ。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

中流域の砂礫河原の石下に見られる。カワラヨモギなどの生育するような環境を好む。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

砂礫地の泥質化など、生息環境の悪化が懸念される。稀な種であるため、減少傾向などは不明。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

アトグロジュウジアトキリゴミムシ

Lebia idae

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	DD	DD	

【形態・生態】

体長 6.5 ～ 8.5mm。上翅は黒色で肩部に1対の曲玉状の斑紋がある。樹上に生息し、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から低山地に生息する。コナラなどの葉上で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

里山的な環境を好む種で、好適な生息環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

キイロアトキリゴミムシ

Philorhizus optimus

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	

【形態・生態】

体長 4 ～ 4.5mm。頭部は暗赤褐色、上翅は黄褐色で会合部と側縁が暗色。ときに横につながり十字状の斑紋になる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

比較的稀な種で、ススキの葉上で得られたことがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

沿岸部での採集例が多い種で、ススキ草地などの減少が著しいために、生息環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

キイロホソゴミムシ

Drypta fulveola

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	□	□	□	CR	EN

【形態・生態】

体長 8～9.5mm。背面は黄褐色で脚は暗色。上翅側縁は狭く緑黒色を帯びる。

【分布の概要】

本州(東京、神奈川、千葉)

【都における生息環境】

河口部のヨシ原に生息する。一般に汽水域を好む。生息地は非常に限られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地が非常に限られており、汽水域の環境の悪化が懸念される。河口域の干潟や湿地を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

アオヘリホソゴミムシ

Drypta japonica

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 8mm 前後。上翅は黄褐色で、会合部と側縁が帯状に緑色光沢のある黒色。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

様々な環境に生息するが、河川敷のヨシ原などに多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修などにより、本種の生息環境は減少しつつあると思われる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 山本周平・渡辺恭平, 2009.



(執筆: 田尾美野留)

オオアオホソゴミムシ

Desera geniculata

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
□	□	CR	□	CR	

【形態・生態】

体長 9～10.5mm。背面は緑色の金属光沢を持つ。脚の爪に櫛状の突起がある。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

不明。ほとんどの採集例が灯火か、冬期の土中からのもの。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

近年の採集例はほとんどなく、減少傾向など詳細については不明である。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 田尾美野留)

ミイデラゴミムシ

Pheropsophus jessoensis

コウチュウ目(鞘翅目)
オサムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	NT	*	*	NT	

【形態・生態】

体長 11 ～ 18mm。比較的大型の種。上翅は緑色を帯びた黒色で、肩部と中央の斑紋と翅端部が黄褐色。おどかすと、尾端から爆発音をともなってガスを噴射する。幼虫はケラの卵塊に寄生する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地の竹林や耕作地周辺に多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

主な生息環境である耕作地や谷戸などでは減少傾向にある。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985。



(執筆: 田尾美野留)

キベリクロヒメゲンゴロウ

Ilybius apicalis

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	CR	—	—	CR	NT

【形態・生態】

体長 8 ～ 10mm。体型は長い楕円形。背面は弱い金属光沢を帯びた黒褐色。上翅の側縁は黄色で、翅端部に向かうに従い徐々に広がる。前胸背の両側は幅広く黄褐色となる。主に平地の池沼に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼に生息する種である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

北多摩では井の頭池から知られているが、近年の記録は見出せず絶滅した可能性がある。現在確実に生息しているのは皇居のみと考えられる。皇居内の生息環境は保たれていると思われるが、生息状況などについては不明である。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 野村周平ら, 2000。



(執筆: 須田真一)

シマゲンゴロウ

Hydaticus bowringi

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	CR	—	CR	NT

【形態・生態】

体長 12.5 ～ 14mm。体型は卵形で強く盛り上がる。上翅は黒色で光沢があり、明瞭な 2 対の黄色帯と基部付近に 1 対の黄色斑がある。前胸背は黄色。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

浅い水域を好み、水田に強く依存している種である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代までは各地で記録されているが、区部から多摩地域の平地ではすでに絶滅したと判断される。近年は多摩地域の丘陵地でわずかに記録されているが、散発的であり確実な生息地を見出せない状況となっている。水田の消失や圃場整備による乾田化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。

【関連文献】

秋山黄洋・酒井香, 1988; 荻部治紀(編), 2011。



(執筆: 須田真一)

オオイチモンジシマゲンゴロウ

Hydaticus pacificus conspersus

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	EX	—	—	EX	EN

【形態・生態】

体長 16 ～ 17mm。体型はやや長い卵形で背面はやや扁平。上翅は黒色で側縁は黄色、基部付近に 1 対の横長の黄色斑があり、中央と後端付近の側縁寄りにもある。前胸背は黄褐色で前・後縁中央の横紋は黒色。平地から丘陵地の湧水がある小規模な池沼や湿地、緩やかな流れなどに生息する。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

中型ゲンゴロウ類としては特殊な環境に生息しており、湧水に依存していたようである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930 ～ 40 年代を中心に数例の記録が知られるのみである。多摩地域の平地では絶滅したと判断されるが、丘陵地には現存している可能性も残されている。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 佐藤正孝, 1988.

(執筆: 須田真一)



ウスイロシマゲンゴロウ

Hydaticus rhanthoides

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	—	—	EN	—

【形態・生態】

体長 10 ～ 11mm。体型は卵形。上翅は黄褐色で光沢がある。前胸背も黄褐色でしばしば前・後縁に沿って細く暗色となる。平地の池沼や湿地などに生息する。暖地性の種で、北限の関東地方では稀な種である。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

東京都では皇居のみで記録されている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境は保たれていると思われるが、生息状況などについては不明である。

【関連文献】

野村周平ら, 2000.

(執筆: 須田真一)



マルガタゲンゴロウ

Graphoderus adamsii

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	—	EX	VU

【形態・生態】

体長 12 ～ 14.5mm。体型は卵形で強く盛り上がる。背面は黄褐色で光沢がある。前胸背の前・後縁には黒色の帯紋がある。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

水生植物の豊富な人為的な汚染や改変の少ない良好な水域のみに生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代までは各地で記録されており個体数も多かったようであるが、近年の確実な記録は見出せず絶滅したと判断される。丘陵地には現存する可能性も残されている。池沼や湿地の消失や質の劣化、水田の消失、圃場整備による乾田化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。

【関連文献】

秋山黄洋・酒井香, 1988; 荻部治紀(編), 2011.

(執筆: 須田真一)



クロゲンゴロウ

Cybister brevis

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	—	EN	CR	NT

【形態・生態】

体長 20～25mm。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で光沢がある。翅端付近には 1 対の小さな黄褐色斑があるが、個体によっては不明瞭となる。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部から多摩地域の池沼や湿地、水田に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代までは各地で記録されているが、区部から多摩地域の平地ではすでに絶滅したと判断される。最近までわずかに記録されていた西多摩の丘陵地でも見出せなくなってきており、絶滅が心配される。池沼や湿地の消失や質の劣化、水田の消失、圃場整備による乾田化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 荏部治紀 (編), 2011.



(執筆: 須田真一)

コガタノゲンゴロウ

Cybister tripunctatus orientalis

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	—	EX	VU

【形態・生態】

体長 24～29mm。体型は長卵形で、背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で強い光沢がある。前胸背から上翅の側縁は黄色で縁取られる。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島

【都における生息環境】

区部から多摩地域の池沼や湿地、水田に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には普通に見られたようであるが、区部では 1950 年代、多摩地域でも 1970 年頃を最後として確実な記録は見られず絶滅したと判断される。本州においては戦後、水田で農薬が多用されるようになるとともにほとんど見られなくなった。ただし、現在も安定的に生息する四国や九州では他の大型ゲンゴロウ類は生息しないような水域にもしばしば見られることから、本来、環境選好性の幅は広い種であると考えられる。

【関連文献】

秋山黄洋・酒井香, 1988; 荏部治紀 (編), 2011.



(執筆: 須田真一)

ゲンゴロウ(ナミゲンゴロウ)

Cybister japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	VU

【形態・生態】

体長 24～29mm で日本産ゲンゴロウ科の最大種。体型は卵形で比較的扁平、背面は緑色あるいは褐色を帯びた暗褐色で光沢があり♀では弱い。前胸背から上翅の側縁は黄色で縁取られ、翅端部に向かうに従い細くなる。平地から丘陵地の池沼などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部から多摩地域の池沼などに生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部と周辺地域では 1940 年代、多摩地域の丘陵地では 1970 年頃まで記録されているが、それ以降の確実な記録はなく、すでに絶滅したと判断される。絶滅の原因は池沼の消失や質の劣化によるところが大きい。水田の堀上げにも生息していたようであるが、水田の消失や圃場整備によってほぼ失われている。さらに、ウシガエルやアメリカザリガニなどの捕食性外来生物の影響も大きいと推測される。

【関連文献】

秋山黄洋・酒井香, 1988; 荏部治紀 (編), 2011.



(執筆: 須田真一)

シャープゲンゴロウモドキ

Dytiscus sharpi

コウチュウ目(鞘翅目)
ゲンゴロウ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EX	□	□	□	EX	CR

【形態・生態】

体長 28 ～ 33mm。体型は♂では長卵形、♀では卵形。背面はわずかに緑色を帯びた黒褐色。前胸背から上翅の側縁は黄色で縁取られる。♀には上翅に深い縦溝のある個体が見られる。平地の池沼や氾濫源の湿地などに生息する。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

区部の池沼に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1880 ～ 1930 年代の区部からの数例の記録のみで、すでに絶滅したと判断される。環境選好性の幅は狭く全国的に記録が途絶えた時期もあったが、関東地方では 1980 年代に千葉県で再発見された。しかしその後の大規模開発や圃場整備による乾田化、アメリカザリガニの侵入などによって著しく減少したことから、より早い時期にそれらの影響が及んだ東京都に現存する可能性は考えにくい。

【関連文献】

佐藤正孝, 1988; 荻部治紀 (編), 2011.

(執筆: 須田真一)



オオミズスマシ

Dineutus orientalis

コウチュウ目(鞘翅目)
ミズスマシ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EN	EN	—	—	CR	NT

【形態・生態】

体長 7 ～ 12mm で日本本土のミズスマシ科の最大種。明らかに大型であることと、上翅の側縁は黄色であることで容易に区別できる。平地から丘陵地の池沼に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

既知の生息地のほぼすべてで絶滅しており、確実に現存するのは皇居のみと考えられる。皇居内の生息環境は保たれていると思われるが、生息状況などについては不明である。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 野村周平ら, 2000.

(執筆: 須田真一)



ミズスマシ

Gyrinus japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
ミズスマシ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
CR	EN	VU	NT	VU	VU

【形態・生態】

体長 6 ～ 7.5mm。背面は黒色で光沢がある。コミズスマシやヒメミズスマシに似るが明らかに大型。平地から丘陵地の池沼などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼や湿地の水溜りなどに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

池沼や湿地の消失や質の劣化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測され、既知の生息地の多くからすでに絶滅している。現在では多摩地域の丘陵地や河川敷などにわずかな生息地が残されているのみ。個体数も少ないことから今後の動向には注意が必要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 荻部治紀 (編), 2011.

(執筆: 須田真一)



コミズスマシ

Gyrinus curtus

コウチュウ目(鞘翅目)
ミズスマシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	—	—	DD	EN

【形態・生態】

体長 4.9 ～ 5.6mm。背面は黒色で光沢がある。ヒメミズスマシに酷似しており、腹部の形状などによって区別される。平地から丘陵地の池沼に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

東京都からの確実な記録は数例のみで、区部においてはすでに絶滅したと判断される。池沼の消失や質の劣化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。近年、全国的にも減少著しい。

【関連文献】

板橋区役所土木部公園緑地課 (編), 1986; 苅部治紀 (編), 2011.



(執筆: 須田真一)

ヒメミズスマシ

Gyrinus gestroi

コウチュウ目(鞘翅目)
ミズスマシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	DD	—	—	DD	EN

【形態・生態】

体長 4.6 ～ 5.2mm。背面は黒色で光沢がある。コミズスマシに酷似しており、腹部の形状などによって区別される。平地から丘陵地の池沼に生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

水生植物の豊富な人為的汚染や改変の少ない池沼に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1940 年代以降の記録を見出せず、絶滅が危惧される。池沼の消失や質の劣化、農薬の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。近年、全国的にも減少著しい。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 苅部治紀 (編), 2011.



(執筆: 須田真一)

ヤマトホソガムシ

Hydrochus japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
ガムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	NT

【形態・生態】

体長 2.6 ～ 3.1mm。背面は赤褐色で体表に青緑金属光沢を持つ。前胸背板のくぼみは顕著。下唇基節は強く点刻される。平地から丘陵地の湿地や水田などに生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

水質のよい浅い湿地に見られ、環境選好性の幅は狭いようである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

確実な記録はわずかしか知られておらず、生息状況などについては不明な点も多い。小型で確認しづらい種であることから調査が進展すれば新たな生息地が発見される可能性もある。

【関連文献】

板橋区役所土木部公園緑地課 (編), 1986.



(執筆: 須田真一)

ガムシ

Hydrophilus acuminatus

コウチュウ目(鞘翅目)
ガムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	EN	—	EN	NT

【形態・生態】

体長 33 ～ 40mm で日本産ガムシ科の最大種。背面は黒色で鈍い光沢がある。腹部は無毛で後胸突起は腹部第 2 節に達する。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部から多摩地域の池沼や湿地、水田に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には普通に見られたようであるが、区部と周辺地域では 1950 年代以降激減し、すでに絶滅したと判断される。現在は多摩地域の丘陵地に残存しているが、安定的な生息地は見出せない状況となっている。池沼や湿地の消失や質の劣化、水田の消失、圃場整備による乾田化、農業の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 荻部治紀 (編), 2011.

(執筆: 須田真一)



ヒメガムシ

Sternolophus rufipes

コウチュウ目(鞘翅目)
ガムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	DD	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長 9 ～ 11mm。背面は黒色で鈍い光沢がある。コガムシに似るが明らかに小型で体型もやや細い。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

区部から多摩地域の池沼や湿地、水田に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には普通に見られたようであるが、区部と周辺地域では減少著しい。池沼や湿地の消失や質の劣化、水田の消失、圃場整備による乾田化、農業の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。多摩地域の丘陵地には生息地が残されているものの、今後の動向には注意が必要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 野村周平ら, 2000.

(執筆: 須田真一)



コガムシ

Hydrochara affinis

コウチュウ目(鞘翅目)
ガムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	NT	DD	NT	DD

【形態・生態】

体長 16 ～ 18mm。背面は黒色で鈍い光沢がある。小あごひげと脚は赤褐色。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部から多摩地域の池沼や湿地、水田に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には普通に見られたようであるが、区部と周辺地域では減少著しい。ヒメガムシと同所的に見られることも多いが、本種の方が減少している。池沼や湿地の消失や質の劣化、水田の消失、圃場整備による乾田化、農業の使用などによって大きな影響を受けたと推測される。多摩地域の丘陵地には生息地が残されているものの、今後の動向には注意が必要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1940; 武蔵野市生物生息状況調査会 (編著), 2001.

(執筆: 須田真一)



マメガムシ

Regimbartia attenuata

コウチュウ目(鞘翅目)
ガムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	—	—	VU	

【形態・生態】

体長 3.5 ～ 4mm。背面は黒色で微細毛を密に装う。平地から丘陵地の池沼や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

区部から多摩地域の池沼や湿地、水田に生息すると思われる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去には普通に見られたようであるが、近年の確実な記録は皇居外苑のみである。皇居内の調査では確認されていないことから、生息状況は安定的でない可能性も考えられる。更なる調査が必要な種である。

【関連文献】

武蔵野市生物生息状況調査会(編著), 2001; 自然環境研究センター, 2006.



(執筆: 須田真一)

オサシデムシモドキ

Apatetica princeps

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	DD	DD	○	○	

【形態・生態】

体長 6.5 ～ 7mm。黒褐色。体は丸みを帯び膨隆する。頭部は小さく粗い点刻を不規則に持つ。前胸背板は横長で前方に狭まり、粗大点刻がある。ハネカクシ科の中では珍しく上翅は腹部の大部分を覆い、深い縦溝を持つ。山地の樹林に生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

多摩地域の樹林に生息し、粗朶(そだ: 雑木の小枝を束ねたもの)などから得られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西多摩の樹林ではやや普通である。北多摩、南多摩での生息状況は不明。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 岸本年郎)

シラオビシデムシモドキ

Nodynus leucofasciatus

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	DD	DD	○	○	

【形態・生態】

体長 9.5 ～ 10mm。光沢のある黒色で上翅に赤褐色の横帯がある。頭部は小さく複眼間の点刻が目立ち、頭頂中央に短縦溝がある。前胸背板は横長で前方に狭まり、側縁は弧状で粗大点刻をまばらに持つ。上翅は長く、8条の点刻列がある。山地の樹林に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

多摩地域の樹林に生息し、キノコから見出されることが多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西多摩の樹林に生息する。北多摩、南多摩での生息状況は不明。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 岸本年郎)

オオツノハネカクシ

Bledius salsus

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	DD	VU	○	VU	DD

【形態・生態】

体長 6～7.5mm。黒～黒褐色で前胸背板、上翅、胸部は赤褐色。体は細長い筒型。♂は頭部前方に 1 対と前胸背板中央に、♀は頭部前方に 1 対の顕著な長い角状の突起がある。湿地などで湿潤な軟質土に穴を掘って生息する。夜間、灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

沿岸部でよく発見されるが、多摩丘陵など内陸の記録もあり、水田や河川周辺にも生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

近年の記録がなく生息状況の詳細は不明であるが、生息適地は開発や乾燥化の進行により状況が悪化している。

【関連文献】

柴田泰利, 1984; 千葉県自然保護課(編), 2000.

(執筆: 岸本年郎)



ウミベアカバハネカクシ

Phucobius simulator

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	○	○	○	VU	

【形態・生態】

体長 10.5～12mm。やや光沢のある黒色で上翅は赤色。頭部と前胸背板には不規則な横波状の微細印刻がある。前胸背板の点刻列は 3～5 個。海岸の打ち上げられた海藻、塵芥の下に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

沿岸部に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立てやコンクリート護岸化などの開発により生息地が減少している。

【関連文献】

柴田泰利, 1984; 岸本年郎, 1997.

(執筆: 岸本年郎)



クロガネハネカクシ

Platydracus inornatus

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 20～23mm。つやのない黒色。頭部と前胸背板は粗く密に点刻される。頭楯前縁は内側に湾入する。♂の腹部第 7 腹板は中央で大きく円形にえぐられ、第 6 節中央は平滑で毛を欠く。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から低山地の里山的な地域の開けた環境の地表に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部においては、生息適地となる里山的な環境の消失により生息地が減少している。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.

(執筆: 岸本年郎)



キンボシハネカクシ

Ocybus weisei

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	NT	—	NT	

【形態・生態】

体長 16 ～ 19mm。黒色で頭部、上翅、腹部第 5 ～ 6 節背板には密に金色毛を持つ。前胸背板は点刻を密布するが、正中線には細く不明瞭な平滑帯が認められる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から低山地の里山的な地域の開けた環境の地表に生息する。区部での現存する産地は赤坂御用地と皇居に限られている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息適地となる里山的な環境の消失により生息地が減少している。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 岸本年郎)

クシヒゲハネカクシ

Velleius pectinatus

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	NT	—	NT	

【形態・生態】

体長 13 ～ 20mm。黒色で幅広い。触角は櫛ひげ状で先端節は長く、その前の 3 節の和とほぼ同長。前胸背板は広く、強く膨隆する。幼虫はスズメバチ類の巣に寄生し、その幼虫を餌とする。成虫は樹液などに集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に低山地から山地の里山林などの樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録は少ない。樹林の消失により生息適地が減少している。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; Watanabe, Y., 1990.



(執筆: 岸本年郎)

クロヒゲオレハネカクシ

Acylophorus honshuensis

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	—	—	—	NT	

【形態・生態】

体長 7.2 ～ 8mm。黒色で脚は赤褐色。触角第 1 節は長く、第 2 ～ 6 節の和と等長で、1 節と 2 節の間でひざ状に曲がる。頭部は小さく、複眼間に 2 個の点刻がある。小楯板、上翅は粗くやや密に点刻される。湿地の水際などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

東京都では皇居の記録が唯一の記録である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

広く分布していた可能性が高いが、生息地であった湿地の多くは失われたと考えられる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; Nomura, S. et al., 2000.



(執筆: 岸本年郎)

チャムネハラホソハネカクシ

Atanygnathus terminalis

コウチュウ目(鞘翅目)
ハネカクシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	○	NT	NT	

【形態・生態】

体長 4.5 ～ 5.5mm。黒色で、前胸、上翅端、腹部各節後縁は赤褐色。一見、シリホソハネカクシ亜科のような体型をしているが、中・後脚の跗節は 4 節。複眼は細長く、複眼間は無点刻。前胸背板中央両側の点刻列は 2 個。上翅は小点刻を密に持つ。湿地の水際などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、九州、南西諸島

【都における生息環境】

記録は少ないが、湿地の水際などに生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地であった湿地の多くは失われたと考えられる。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985.



(執筆: 岸本年郎)

ミヤマクワガタ

Lucanus maculifemoratus

コウチュウ目(鞘翅目)
クワガタムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	○	NT	○	○	

【形態・生態】

♂は体長 43 ～ 76mm で赤褐～黒褐色、小型個体と大型個体とで変異が大きい。腿節に橙褐色紋が現れ、♀は 25 ～ 40mm で全体黒色。夏に出現し、樹液に集まるほか、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

丘陵地では宅地開発など都市化が進んだことで衰退が著しい。広い面積の樹林環境を保全することが重要である。区部でも古い記録があるが生息していたかどうかは疑問。

【関連文献】

桜井俊一ら, 1966; 岡島秀治・山口進, 1988.



(執筆: 高桑正敏)

ノコギリクワガタ

Prosopocoilus inclinatus

コウチュウ目(鞘翅目)
クワガタムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

♂は体長 33 ～ 74mm、♀は 25 ～ 35mm でともに赤褐色(稀に暗褐色)、小型個体と大型個体とで変異が大きい。夏に出現し、樹液に集まるほか、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地や丘陵地では宅地開発など都市化が進んだことで減少が目立つ。保全には広い樹林と河畔林の保存が重要である。皇居では比較的個体数も多い。

【関連文献】

岡島秀治・山口進, 1988; 野村周平ら, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

スジクワガタ

Macrodorcas striatipennis

コウチュウ目(鞘翅目)
クワガタムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	○	

【形態・生態】

♂は体長 15 ～ 38mm、♀は 14 ～ 20mm で暗赤褐～黒褐色、小型個体と大型個体とで変異が大きいが、♂小型個体と♀は上翅にすじがある。夏に出現し、樹液に集まるほか、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地や丘陵地では宅地開発など都市化が進んだことで衰退が著しい。保全には広い樹林環境の保存が重要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1937; 岡島秀治・山口進, 1988.



(執筆: 高桑正敏)

ヒラタクワガタ

Serrognathus platymelus pilifer

コウチュウ目(鞘翅目)
クワガタムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

♂は体長 30 ～ 71mm、♀は 30 ～ 41mm で全体黒色、小型個体と大型個体とで変異が大きいが、♂の大あごは端方で強く湾曲する。夏から秋に出現し、樹液に集まるほか、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

公園や社寺林など都市にも生息するが、平地や丘陵地では宅地開発など都市化が進んだことで減少が著しい。社寺林の保存が重要である。

【関連文献】

藤田宏, 1985; 岡島秀治・山口進, 1988.



(執筆: 高桑正敏)

オオクワガタ

Dorcus hopei

コウチュウ目(鞘翅目)
クワガタムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	CR	—	CR	VU

【形態・生態】

全体黒色、♂は体長 32 ～ 75mm、♀は 34 ～ 45mm で光沢が強い。♂は小型個体と大型個体とで変異が大きいが、大あごは基部から湾曲する。夏に出現し、樹液に集まるほか、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

全域にわたって生存の可能性は低く、最近の記録は飼育から逃げ出したものの可能性が高い。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

岡島秀治・山口進, 1988; 中村俊彦, 2011.



(執筆: 高桑正敏)

© 東京大学総合研究博物館

マエカドコエンマコガネ

Caccobius jessoensis

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	○	DD	

【形態・生態】

体長4～9mmで光沢のある黒色から黒褐色。ときに上翅の基部や翅端部に黄褐色紋をあらわす。前胸背はゆるやかに膨隆し、表面の点刻は小さくまばら、♂は前方と側方に計4つの瘤状隆起がある。上翅には浅く細い条溝があり、間室の点刻は大きい。シカ、サル、キツネ、イノシシ、牛、馬などの糞に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

草原から林内まで広範な環境に生息するが、やや山地性で奥多摩に多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域の山間部では食餌であるシカ、サル、イノシシなどの糞が豊富で発生も安定している。区部での生息状況は不明。

【関連文献】

庄田達巳, 1990; 芳賀馨, 2007.

(執筆: 酒井香)



ヤマトケシマグソコガネ

Psammodius japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	□	□	□	DD	

【形態・生態】

体長4～5mmで光沢のある黒色。前胸背はやや幅広く粗大点刻をまばらに持ち、正中部の後半に縦溝があるが、側縁の刺毛を欠く。上翅の条溝は細いが明瞭、間室には点刻がほとんどない。海浜の砂地に生息し、海藻や流木、漂着物下から見つかることが多い。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

沿岸部からの記録がある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

環境の保全された海浜がほとんどないため生息条件はよくない。既知の生息地は公園化のため改変が行われた地域であり、他地域からの移入の可能性も考えられる。

【関連文献】

石田正明, 1984; 川井信矢ら, 2008.

(執筆: 酒井香)



ヒゲブトハナムグリ

Anthypna pectinata

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長7～10mmでやや細長く、背面には白灰色の長毛をまばらに装う。♂は前胸背および上翅が暗銅色で触角片状部が長い、♀では前胸背が緑銅色、上翅は紫銅色となり触角片状部は短い。成虫は5～6月に発生し、♂は日中に草地や林縁などを低く飛翔する。

【分布の概要】

本州、四国

【都における生息環境】

平地から低山地の、樹林に隣接した明るい草地に多い。生息環境が良好な地域ではときに大発生する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1960年代までは区部でも普通に見られたが、最近ではほとんど見られなくなった。発生に好適な草地が年々少なくなっていることから、全般的に生息地、個体数とも減少している。

【関連文献】

福井勇三郎, 1966; 市橋弘昭, 2007.

(執筆: 酒井香)



ヒゲコガネ

Polyphylla laticollis

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	VU	VU	○	VU	

【形態・生態】

体長 29 ～ 39mm と大型の種で背面は明褐色から黒褐色、上翅には不定形の白斑を多数散布する。♂は触角片状部が非常に長く、前脛節は 2 外歯、♀は触角片状部が短く、前脛節には 3 外歯がある。成虫は夏に出現し、灯火にも多く集まる。

【分布の概要】

本州(関東以南)、四国、九州

【都における生息環境】

主に多摩川の中流域から下流域の河川敷に生息し、局地的に多数の個体が発生することがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在は個体数が少なくなったが、区部でも稀に見られる。河川敷が舗装され、緑地化、公園化するに伴い発生源であるヨシの生えた広い砂地が少なくなったことから、生息環境は悪化している。

【関連文献】

木村欣二, 1988; 檜木忠志, 2000.



(執筆: 酒井香)

ツヤスジコガネ

Mimela difcilis

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 12 ～ 15mm と同属の他種に比べ小型。背面は光沢のある黄褐色から緑銅色、脛節および腿節は黄褐色。前胸背は正中部に縦溝があり、両側には普通 1 対の楕円形の凹陷を持ち、後縁は全体に縁どられる。夜間灯火に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地から低山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩地域では少数ながら各地から記録があるが、区部においては情報がほとんどなく生息状況は不明である。

【関連文献】

武蔵村山市史編さん委員会, 1999; 酒井香・藤岡昌介, 2007.



(執筆: 酒井香)

© 東京大学総合研究博物館

ハンノヒメコガネ

Anomala puncticollis

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	一	DD	

【形態・生態】

体長 12 ～ 19mm でつやのある緑黄色。前胸背の点刻は大きく密、上翅には明瞭な縦隆線があり、側縁の隆起は基部から 2/3 付近で消失する。腹部腹板の側縁には縦稜を欠く。海岸部や河川敷などに多く、夜間灯火に集まる。成虫はヤナギ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

比較的湿潤な環境を好み、区部西部に古い記録があるほか、荒川および多摩川の河川敷で局地的に生息している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

成虫の食餌であるヤナギ類、ハンノキなどが少なくなり全般的に個体数は減少しているが、まだ多産地がいくらか残っている。

【関連文献】

東京府, 1938; 板橋区役所土木部公園緑地課(編), 1986.



(執筆: 酒井香)

トラハナムグリ

Trichius japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	—	—	DD	

【形態・生態】

体長 13 ～ 16mm。前胸背は縦長の楕円形、表面には黄灰色から黄褐色の毛が密に生え、上翅は黄褐色で縁部に 3 対の大きな黒色紋がある。尾節板と後胸腹板には灰白色の長毛が密生する。成虫はシシウド、ノリウツギ、アザミ、ショウマなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地の樹林に生息する種で、区部西部の古い記録がある。南多摩や西多摩の山地からは確実な記録が見られない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部西部では絶滅した可能性が高い。もともと山地性であることから、西多摩の山地での発見が期待される。

【関連文献】

東京府, 1938; 平山修二郎, 1940.

(執筆: 酒井香)



ヒメトラハナムグリ

Lasiotrichius succinctus

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	NT	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 10 ～ 14mm で、灰白色から黄褐色の長毛をやや密に装う。前胸背は暗黒褐色、上翅は黒褐色から赤褐色で黄褐色の太い横帯が 2 対ある。成虫はクリ、ウツギ、サワフタギ、ノリウツギ、リョウブなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

樹林性の種で、主に丘陵地から低山地で見られるが、樹林環境の保全状態がよければ区部でも少数ながら生息している。

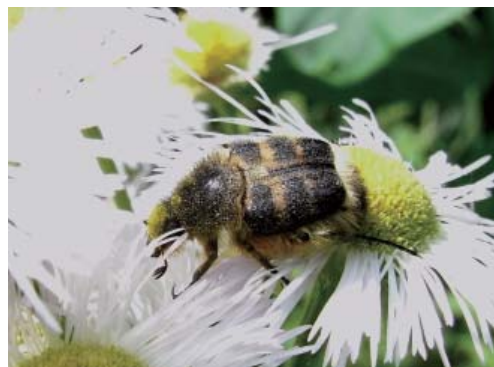
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では 1960 年代から個体数が激減した。北多摩や南多摩でも個体数は少なくなりつつあるが、生息地での発生は比較的安定している。

【関連文献】

長尾 悟, 1969; 芳賀馨, 2007.

(執筆: 酒井香)



クロカナブン

Rhomborrhina polita

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 26 ～ 32mm で光沢のある黒色。中脛節および後脛節の内縁には黄褐色毛を装う。頭部は相対的に小さく、点刻は大きく密、前胸背と上翅の表面は滑らかで、点刻は目立たない。成虫は各種広葉樹の樹液や熟果に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地から丘陵地のコナラやクヌギなどの雑木林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

雑木林の減少や乾燥化に伴い、生息域、個体数とも減少傾向にあるが、好適な林があれば区部でも姿が見られる。

【関連文献】

福井勇三郎, 1966; 石田正明, 1984.

(執筆: 酒井香)



ハナムグリ

Eucetonia pilifera

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	DD	○	NT	

【形態・生態】

体長 16～19mm でやや幅広く、背面は緑黄色の被覆物に覆われつやはない。頭楕の前縁は縁どられ、中央はゆるやかに湾入する。前胸背および上翅は黄褐色の長毛をやや密に装い、上翅の縦隆線は明瞭。成虫は各種の花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

沿岸部から低山地にかけて生息する種であるが、東京都では良好な海浜がなく、主に丘陵地や低山地で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などによる樹林環境の減少により、区部では 1960 年以降の確実な記録がなく、北多摩や南多摩でも個体数が少なくなっている。

【関連文献】

平山修二郎, 1940; 板橋区役所土木部公園緑地課 (編), 1986.



(執筆: 酒井香)

シラホシハナムグリ

Protaetia brevitarsis

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	—	EN	CR	

【形態・生態】

体長 20～25mm で黒銅色から暗赤銅色、前胸背および上翅にはまばらに白斑を散布する。頭楕の前縁は直線状で軽く上反し、翅端は小さく突出する。♂の腹部腹板中央には明瞭な縦溝がある。成虫は夏にクヌギやコナラの樹液に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

樹種が多く大木なども生育する平地から丘陵地の雑木林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

関東地方では個体数が少ない種で、東京都では 1960 年代以降の確実な採集記録がない。開発などによる雑木林の減少に起因している可能性があるが、詳細については不明である。

【関連文献】

東京府, 1938; 板橋区役所土木部公園緑地課 (編), 1986.



(執筆: 酒井香)

アカマダラコガネ (アカマダラハナムグリ)

Poecilophildes rusticola

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	*	*	*	DD

【形態・生態】

体長 16～21mm で長楕円形、脚は相対的に短い。前胸背および上翅にはつやがなく、黄褐色の地に不定形な黒色紋をまだら状に配し、腹面には中胸腹板突起を除き光沢のある黒色。成虫はクヌギやコナラなどの樹液に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

樹種が多く大木なども生育する樹林に生息し、区部では古い記録があるのみである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

猛禽類やカワウの巣中などから多数の幼虫や蛹が発見され、重要な発生源であることが明らかとなったことから、こうした鳥類の生息環境の保全が本種の生存にも直結するものと思われる。

【関連文献】

平山修二郎, 1940; 森川清志, 1987.



(執筆: 酒井香)

コカブトムシ

Eophileurus chinensis

コウチュウ目(鞘翅目)
コガネムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 18～26mm で光沢のある黒色、上翅には明瞭な点刻列がある。♂は頭楯に直立する短い角状突起をそなえ、前胸背は中央が円形に幅広く凹むが、♀は頭楯に角状突起を欠き、前胸背の中央は縦溝となる。朽木や樹木の樹洞内の土中で見られ、夜間灯火に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

樹林性で、樹種が多く大木なども生育する平地から低山地の雑木林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では 1960 年代までは少ないながら見られたが、現在は皇居など特別な地域を除いて絶滅したものと思われる。丘陵地や低山地でも樹林の縮小などに伴い個体数が減少している。

【関連文献】

福井勇三郎, 1966; 野村周平ら, 2000.



(執筆: 酒井香)

タマガワナガドロムシ

Heterocerus japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
ナガドロムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
*	—	—	—	○	

【形態・生態】

体長 2.9～4.2mm。細長い黄褐色の体の背面には毛が密生し、上翅に暗色の複雑な模様がある。同属のタテスジナガドロムシとは、腹部第1節の腿節線が完全であることにより区別できる。川辺の砂泥中に生息し、成虫は灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部の荒川や多摩川における古い記録があるが、現在も生息しているかは不明である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や水質汚濁により、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 林成多, 2011.



(執筆: 雛倉正人)

アヤスジミゾドロムシ

Graphelmis shirahatai

コウチュウ目(鞘翅目)
ヒメドロムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
*	■	■	■	○	EN

【形態・生態】

体長 3.4～3.7mm。全体に黄色だが、上翅の点刻列に沿って黒条がある。脚は著しく長く、爪が大きい。河川の比較的緩やかな流れに生息し、成虫、幼虫ともに流木の表面にいる。成虫は夏に出現し、灯火に飛来する。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

区部の荒川における古い記録があるが、現在も生息しているかは不明である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

流木に固着して生活していることから、河川改修や水質汚濁・河畔林の減少により、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

上野俊一ら(編著), 1985; 林成多, 2011.



(執筆: 雛倉正人)

マスダクロホシタマムシ

Ovalisia vivata

コウチュウ目(鞘翅目)
タマムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 6 ～ 13mm。体は平たく、上翅は美しい金緑～緑～赤緑色で数対の黒紋がある。成虫は初夏に出現し、針葉樹の伐採木に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、スギやヒノキなど針葉樹に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地ではスギ・ヒノキ植林地が激減したこともあり、ほとんど見かけなくなったが、南多摩や西多摩では普通に見られる。針葉樹を伴った広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

黒沢良彦ら(編著), 1985; 野村周平ら, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

ウバタマムシ

Chalcophora japonica

コウチュウ目(鞘翅目)
タマムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 20 ～ 40mm。体は金銅色、上翅は 3 ～ 4 対の縦隆起線が走り、中央辺に 2 対の不鮮明な明色紋がある。成虫は初夏から夏に出現し、マツ類の伐採木に集まるが、ときに越冬個体も見つかる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、アカマツなどマツ科に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

マツ林が激減したため、特に平地では減少が著しい。マツ類を伴った広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

黒沢良彦ら(編著), 1985; 野村周平ら, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

タマムシ(ヤマトタマムシ)

Chrysochroa fulgidissima

コウチュウ目(鞘翅目)
タマムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 25 ～ 40mm。体は美しい緑色、上翅は 1 対の赤い縦条紋が走る。成虫は夏に出現し、特にエノキの梢に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、エノキやケヤキ、クヌギなど広葉樹に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

特に平地では樹林環境の消失とともに減少が著しいが、小規模な樹林でも生息していることもある。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

黒沢良彦ら(編著), 1985; 野村周平ら, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

クロタマムシ

Buprestis haemorrhoidalis japonensis

コウチュウ目(鞘翅目)
タマムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	VU	VU	NT	VU	

【形態・生態】

体長 11 ～ 22mm。体は全体ほぼ黒色、♂は顔面が橙赤色、上翅は中央辺に 2 対の不明瞭な明色紋がある。成虫は夏に出現し、マツ類の伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、アカマツやモミなどマツ科に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

マツ林が激減したため、特に平地では激減した。マツ類を伴った広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

平山修次郎, 1933; 黒沢良彦 (編著), 1985.



(執筆者: 高桑正敏)

ウバタマコメツキ

Cryptoalaus berus

コウチュウ目(鞘翅目)
コメツキムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	NT	NT	VU	

【形態・生態】

体長 22 ～ 30mm。触角は短くて鋸歯状、上翅は不明瞭なまだら模様の黒色紋を持つが中央両側の 1 対は明らか。成虫は夏以降に出現し、しばしば灯火にも飛来する。越冬個体はマツ類の樹皮下で見つかる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地に分布し、アカマツなどマツ科に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

マツ植林地が激減したため、全体的に減少が著しい。マツ類を伴った広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

黒沢良彦 (編著), 1985.



(執筆者: 高桑正敏)

ゲンジボタル

Luciola cruciata

コウチュウ目(鞘翅目)
ホタル科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	○	○	○	

【形態・生態】

体長 10 ～ 16mm。よく知られた種で、本科としては大型、前胸は黄橙色で中央にやや不明瞭な十字架紋を持つ。成虫は梅雨どきに出現し、ときに灯火にも飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地の清流または源流域、谷戸に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水系の汚染と、護岸工事など流域の開発によって、特に平地では減少が著しい。谷戸を伴った広い緑地環境の保全が重要である。

【関連文献】

黒沢良彦 (編著), 1985; 野村周平ら, 2000.



(執筆者: 高桑正敏)

ヘイケボタル

Luciola lateralis

コウチュウ目(鞘翅目)
ホタル科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長7～10mm。よく知られた種で、ゲンジボタルより小型、前胸は黄橙色で中央に太い縦条紋を持つ。成虫は梅雨どきから夏に出現し、ときに灯火にも飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地の湿地や水田、谷戸に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

流域の開発、水系の汚染、乾田化などによって、特に平地では減少が著しい。谷戸を伴った広い緑地環境の保全が重要である。

【関連文献】

黒沢良彦ら(編著), 1985; 野村周平ら, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

ホソカミキリ

Distenia gracilis

コウチュウ目(鞘翅目)
ホソカミキリ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	VU	○	○	NT	

【形態・生態】

体長19～30mm。触角は第1節が他の節よりも著しく太いことで、他の種類とは容易に区別できる。♂の第5腹節は先端が湾入するが、♀ではまっすぐに切断状である。成虫は夏に出現し、明るい間は暗い部分にひそんでいるが、夜になると各種の枯れ木に集まり、しばしば灯火にも飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部でも生息しているが局地的。広い樹林環境の保全が重要である。南多摩や西多摩では普通に見られる。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 齊藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

ウスバカミキリ

Megopis sinica

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	○	NT	

【形態・生態】

体長32～51mmで赤褐色～暗褐色。触角は上翅端に達する(♂)か届かない(♀)。上翅は平たく、無紋。♀腹端からキチン化した産卵管が伸びる。夏に出現し、夜間に立ち枯れた木に現れ、また灯火に飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地に多く、古木の多い林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

社寺林など都市にも生息するが、平地や丘陵では宅地開発など都市化が進んだことで減少が目立つ。社寺林の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 伊藤淳ら, 2009.



(執筆: 高桑正敏)

ノコギリカミキリ

Prionus insularis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	○	NT	

【形態・生態】

体長 20～38mm で暗赤褐色～黒色。触角は平たく鋸歯状(♂)か通常(♀)。前胸は光沢が強く、側部には大きな2対のとげ状突起がある。上翅は無紋。ニセノコギリカミキリとの区別は難しい。夏に出現し、ときに地面上に見るほか、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、古木の多い樹林に生息する傾向が強い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地や丘陵地では宅地開発など都市化が進んだことで減少が目立つ。広い面積の樹林の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 伊藤淳ら, 2009.



(執筆: 高桑正敏)

コバネカミキリ

Psephactus remiger

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
■	DD	○	○	○	

【形態・生態】

体長 11～30mm でほぼ全体が黒色、ときに明色を帯びる。上翅は短くて腹部の大部分を露出し、特に♂は短くて触角は上翅端を越えるが、♀は届く程度。前胸側部には1対のとげ状突起がある。後脚の脛節は非常に平たい。夏に出現し、♂は薄暮時に飛び回る習性がある。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に山地に分布し、自然林に生息する傾向が強い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

北多摩で記録があるというのが詳細は不明。奥多摩では健全である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 八木下潤, 2002.



(執筆: 高桑正敏)

オオマルクビヒラタカミキリ

Aseum striatum

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	EX	○	VU	

【形態・生態】

体長 10～19mm で黒色～褐色、体はやや平たい。触角は短く、上翅肩部を少し越える程度。前胸背はほぼ円形。上翅は両側が平行、無紋で数対の縦すじがある。脚は短い。春から初夏に出現し、マツ類やスギの新しい伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、対馬

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、幼虫はマツ類とスギに依存するが、奥多摩以外ではほとんど記録がない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

古い記録がある区部と八王子市ではすでに絶滅したと考えられる。奥多摩では健全と思われる。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 八木下潤, 2002.



(執筆: 高桑正敏)

ケブカヒラタカミキリ

Nothorhina punctata

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	—	NT	—	NT	

【形態・生態】

体長 6 ～ 13mm で褐色～暗褐色、体はやや平たい。触角は短く、上翅肩部を少し越える程度。前胸背はやや縦長、しばしば中央に赤紋を現す。上翅は両側が平行、無紋。脚は明褐色で短い。夏から晩夏に出現し、夜間にマツ類の古木の幹を這い回る。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地に多く、幼虫はアカマツやクロマツの樹皮内部を食べる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

都市の公園にも生息するが、都市化やマツ枯れ現象によって減少が目立つ。寺社や並木のマツ古木の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984; 伊藤淳ら, 2009.



(執筆: 高桑正敏)

サビカミキリ

Arhopalus coreanus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	EN	○	○	NT	

【形態・生態】

体長 15 ～ 25mm で赤褐色～暗褐色、体はやや平たい。触角は短く、上翅中央を少し越える (♂) か届かない (♀)。上翅は両側平行、無紋、背面に 2 対の不明瞭な縦すじが現れる。脚は短い。夏に出現し、マツ類の新しい伐採木に集まり、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地まで分布し、幼虫はマツ科を主体とした針葉樹を食べる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

都市化やマツ枯れ現象によって、特に区部など平地や丘陵地での減少が目立つ。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984; 藤村俊彦, 1954.



(執筆: 高桑正敏)

クロカミキリ

Spondylis buprestoides

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	NT	

【形態・生態】

体長 11 ～ 23mm で黒色、体は厚く、ほぼ円筒型。触角は非常に短く、上翅肩部にかろうじて届く程度。大あごは発達し、特に♂で大きい。上翅は無紋、♂では背面に 2 対の明瞭な縦すじが現れる。脚は非常に短い。夏に出現し、主に夜間にマツ類の新しい伐採木に集まり、灯火にもよく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地まで分布し、幼虫はマツ科を主体とした針葉樹を食べる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

都市化やマツ枯れ現象によって、特に区部など平地や丘陵地での減少が目立つ。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

ホンドニセハイロハナカミキリ

Rhagium femorale

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 12～17mm で体は黒色。触角はほぼ褐色、非常に短く、上翅肩部をやや越える程度。上翅は黒いがまだら状に明褐色部があり、明褐色の微毛で覆われて不明瞭な紋を形成、背面に 2 対、側面に 1 対の縦すじがある。春から初夏に出現し、モミ類の新しい倒木や伐採木に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に山地に分布し、自然林に生息する傾向が強い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部ではすでに絶滅し、南多摩でも減少が目立つ。モミ類の生育する自然林の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

フタコブルリハナカミキリ

Stenocorus caeruleipennis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	NT	○	○	

【形態・生態】

体長 18～24mm。前胸背は縁を除いて黒色、二瘤状で光沢があり、側突起は大きいが鈍い。通常上翅は全体り色～青緑色、中央付近は多少とも側部がえぐられる。脚は非常に長い。初夏から夏に出現し、クリなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に丘陵地と山地に分布し、自然林などの良好な樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部ではすでに絶滅し、南多摩でも都市化によって減少が目立つ。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984; 国立科学博物館付属自然教育園 (編), 2007.



(執筆: 高桑正敏)

ヒナルリハナカミキリ

Dinoptera minuta

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 5～8mm。前胸背は黒色、滑らかで光沢がある。通常上翅は全体り色～青緑色だが変異がある。一見するとクワハムシなどハムシ科に似る。春に出現し、カエデ類などの花に集まるほか、ミズキの枯れ枝からも見つかる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、自然林などの良好な樹林に多く生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では生息環境の大部分が失われてしまったが、他の地域では良好な樹林があれば多くの個体を産する。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

ツヤケシハナカミキリ

Anastrangalia scotodes

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	VU	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長9～13mm。前胸背は黒色、滑らかで光沢がない。上翅は♂で全体黒色、♀では黒色のものから肩部だけが赤くなるものや、全体が赤色になるものまで変異がある。幼虫は主に針葉樹の枯れ木を食べ、成虫は春から夏に出現し、各種の花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、自然林などの良好な樹林に多く生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などで樹林環境が減少したことにより、区部では絶滅、北多摩や南多摩でも平地ではほとんど見かけないが、南多摩の山地や西多摩では多くの個体を産する。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

アカハナカミキリ

Corymbia succedanea

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	○	○	○	

【形態・生態】

体長13～20mm。触角は黒色、特に♂は強く鋸歯状。前胸背は黒色～赤色、滑らかで光沢が鈍く、基部は横に張り出す。上翅は全体赤色、上翅端は内・外角ともとげ状。夏に出現し、各種の花や伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、樹林に多く生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などで樹林環境が減少したことにより、区部と北多摩の平地ではほとんど絶滅状態となったが、南多摩の山地や西多摩では夏に最も普通に見かける種のひとつ。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ツマグロハナカミキリ

Leptura modicenotata

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	○	○	NT	

【形態・生態】

体長12～17mm。触角は上翅端にほぼ届き、普通は黄褐色～基部側だけ黒色。前胸背は黒色、黄色微毛で密に覆われる。上翅は全体黄褐色のものから基部だけ黄褐色になるものや、全体黒色になるものまで変異がある。♂後脚の脛節は湾曲して端部が膨らむ。初夏から夏に出現し、各種の花や伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、樹林に多く生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などで樹林環境が減少したことにより、区部ではほとんど絶滅、北多摩もほとんど絶滅状態となったが、南多摩の山地や西多摩では比較的に見かける種のひとつである。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ムネアカクロハナカミキリ

Leptura dimorpha

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 12 ～ 16mm、全体黒色(♂)か前胸だけ赤色。前胸背は光沢がほとんどなく、滑らかで長い立毛をごくまばらに生やす。上翅端は切断状、外角は突出しない。♂後脚の脛節はやや湾曲して端部が少し膨らむ。幼虫は針葉樹の枯れ木を食べ、成虫は初夏から夏に出現し、各種の花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、自然林などの良好な樹林に多く生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などで樹林環境が減少したことにより、区部では絶滅、南多摩も減少が目立つが、西多摩や南多摩の山地ではまだ比較的健全である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヨツスジハナカミキリ

Leptura ochraceofasciata

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	○	○	○	

【形態・生態】

体長 14 ～ 21mm。前胸背は黄色微毛で密に覆われる。上翅は4帯状の紋を持ち、端は内・外角とも突出する。少なくとも前・中脚はほぼ黄褐色、♂後脚の脛節は後方が強く膨らむ。成虫は初夏から夏に出現し、各種の花や伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などで樹林環境が減少したことにより、区部と北多摩の平地ではほぼ絶滅状態だが、西多摩や南多摩の山地では多く見かける。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

オオヨツスジハナカミキリ

Megaleptura regalis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
■	■	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 20 ～ 29mm。触角はやや短い。前胸背は黒色～赤褐色、後角は横に強く突出する。上翅は基本的に4帯状の紋を持つが、♂は黄褐色紋がより小さく、端部は内・外角とも突出する。脚はやや短く、♂後脚の脛節端は膨らむ。幼虫は針葉樹に依存し、成虫は夏に出現し、各種の花や針葉樹の伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地に分布し、自然林などの良好な樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林など自然林の伐採によって、幼虫の食樹であるモミが失われたため、南多摩の山地では減少が目立つ。西多摩でも個体数は多くない。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 八木下潤, 2002.



(執筆: 高桑正敏)

カタキハナカミキリ

Pedostrangalia femoralis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 11 ～ 15mm、背面は強く猫背状。上翅は全体黒色～黄褐色まで変異が大きいが、肩部だけ黄色の型が多く、上翅端は内・外角とも突出しない。後脚はやや短く、♂脛節は端部でわずかに膨らむ程度。成虫は初夏から夏に出現し、各種の花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

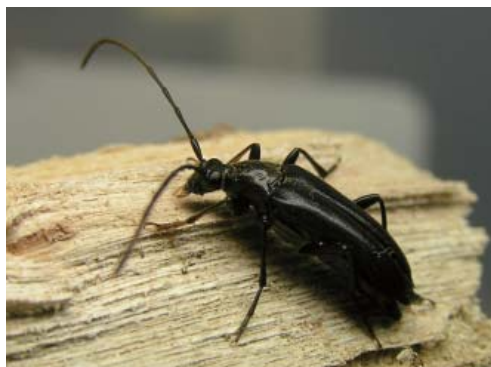
山地に分布し、自然林などの良好な樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

かつては平地にも生息していた可能性があるが、開発などで本種の生息に適した樹林環境が減少したことにより、現在では西多摩や南多摩の山地に生息は限られており、個体数は少ない。

【関連文献】

小宮次郎, 1967; 日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ベニバハナカミキリ

Paranaspia anaspoides

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	○	○	○	○	

【形態・生態】

体長 9 ～ 15mm。触角はやや太く黒色、第 3、4 節は非常に短く、♂は上翅端を越える。上翅は通常全体紅色、両側はほぼ平行、上翅端は広く丸まる。脚は通常ほぼ黒色。成虫は初夏から夏に出現し、樹洞内に見かけることが多い。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、ときに社寺林などの小規模な林にも生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部でも生息しているが、極めて局地的である。社寺林や緑地公園の樹林の保全が望まれる。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984; 齊藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

オニホソコバネカミキリ

Necydalis gigantea

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	●	●	DD	DD	

【形態・生態】

体長 16 ～ 34mm。触角は黄褐色、せいぜい体長の半分に届く程度。上翅は通常ほぼ黒色、非常に短縮して腹部全体を露出する。脚の大部分は黄～赤褐色。生時はハチ類を思わす。幼虫はケヤキなどの樹洞内の材部を食べ、成虫は初夏から夏に出現する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

西多摩の山地の一部から知られるにすぎない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

記録地では、原因が不明だが最近の生息情報がもたらされておらず、生存が危惧される。他の地域からは確認されていない。

【関連文献】

昆野安彦, 1971; 日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

アオスジカミキリ

Xystrocera globosa

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	VU	—	EN	

【形態・生態】

体長 20 ～ 33mm、大部分が赤褐色～暗赤褐色で、背面に特徴ある青緑色の金属光沢部を持つ。触角は♂で上翅端を大きく越え、♀で少し越える。上翅背面の1対の青緑色条は鮮やか。成虫は夏に出現し、ネムノキの樹液に集まるほか、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地に分布し、主にネムノキの生木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ネムノキは多いが各地での減少が著しい。里山環境の維持が重要と推測される。

【関連文献】

秋元克己, 1936b; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

マルクビケマダラカミキリ

Trichoferus campestris

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	—	NT	

【形態・生態】

体長 12 ～ 20mm、全体が黒赤色～黒褐色。触角は♂で上翅端に近づく程度。前胸は側部・背面とも丸み強い。上翅は無紋、光沢があり、両側ほぼ平行で端部は丸まる。成虫は夏に出現し、夜間に薪上を這うほか、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地に分布し、住宅地や里山の薪や伐採木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

緑の少ない住宅地の増加と、薪が使用されなくなったことで、各地での減少が著しい。里山環境の維持が重要と推測される。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 新里達也, 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ミヤマカミキリ

Massicus raddei

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	NT	

【形態・生態】

体長 32 ～ 54mm、体は褐色～黒色で、背面は黄色短毛で一面に覆われる。触角は♂で上翅端を大きく越え、♀で届く程度。前胸は横しわ状。上翅は無紋。成虫は夏に出現し、クヌギなどの樹液に集まるほか、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から低山地に分布し、主にブナ科の生木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部でも生息しているが局地的である。社寺林や緑地公園の樹林の保全が望まれる。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 新里達也, 1984.



(執筆: 高桑正敏)

キマダラヤマカミキリ

Aeolesthes chrysothrix

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 26～34mm、体は赤褐色～赤黒色で、背面は金色微毛で覆われる。触角は♂で上翅端を大きく、♀で少し越える。前胸は背面が虫食い状、側部がとげ状に突出する。成虫は初夏から夏に出現し、クリの花や各種樹液に集まるほか、灯火にも飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地に分布し、主にブナ科の枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部でも生息しているが局地的である。社寺林や緑地公園の樹林の保全、里山環境の維持が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

キイロミヤマカミキリ

Margites fulvidus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
■	■	VU	■	VU	

【形態・生態】

体長 13～18mm、赤褐色～暗赤褐色で、前胸は強く黒色がかかる。触角は♂で上翅端を大きく、♀で少し越える。前胸背面は虫食い状、側突起を欠く。上翅は無紋、黄色微毛で覆われる。成虫は初夏から夏に出現し、クリの花や広葉樹の枯れ木に集まるほか、灯火にもよく飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

南多摩の山地の一部だけに分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

かつて南多摩の山地の一部でよく発見されたが、最近は生息情報をほとんど聞かない。原因については不明である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 藤田宏, 1988.



(執筆: 高桑正敏)

ヨツボシカミキリ

Stenygrinum quadrinotatum

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	CR	CR	CR	EN

【形態・生態】

体長 8～14mm の小型種で、赤色～暗赤色。前胸は縦長、光沢を欠く。上翅は2対の明色紋とその周囲に暗色部を持つ。脚の各腿節は強く膨らむ。成虫は初夏から夏に出現し、クリの花や各種の薪に集まるほか、灯火にもよく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、広葉樹の薪に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

各地での減少が著しく、最近の生息情報はない。良好な里山環境の維持が重要と推測される。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

台湾メダカカミキリ

Stenomolus taiwanus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	—	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長5～8mmの小型種で、ほぼ赤褐色～暗赤褐色。前胸は縦長、前・後縁部で強くくびれ、側部は瘤状に突出する。上翅は2本の淡いV字紋を持つ。♀の第2腹節端には長毛列がある。成虫は初夏から夏に出現し、灯火によく飛来する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、ミカン科の枯れ枝に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

各地での減少が目立ち、最近の生息情報は少ない。里山環境の維持が重要と推測される。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

オダヒゲナガコバネカミキリ

Glaphyra gracilis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
●	—	NT	○	○	

【形態・生態】

体長5～7mmの小型種で、褐色～黒褐色。触角は♂で腹端を越える。前胸は縦長、光沢は弱い。上翅は短縮して腹部を露出し、無紋あるいは1対の淡色紋を中央に現す。脚の各腿節は後方で膨らむ。成虫は春に出現し、カエデ類の花に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地から山地に分布し、モミの枯れ枝に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩丘陵ではモミの衰退で減少が危惧される。モミの保全が望まれる。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 伊藤淳ら, 2009.



(執筆: 高桑正敏)

クスベニカミキリ

Pyrestes nipponicus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長14～19mmの中型種で、赤色～黒色。触角は幅広くて扁平、前胸は縦長、光沢を欠く。上翅は大部分で紅色、無紋、厚く高まり、両側が並行。脚は短い。成虫は初夏から夏に出現し、クリの花などに集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、クスノキ科に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での減少が著しく、最近の生息情報は少ない。広い樹林環境の保全が重要と推測される。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

アオカミキリ

Schwarzerium quadricolle

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 21 ～ 30mm で、深緑色～青緑色、ときに赤銅色がかかる。触角は♂で上翅端に届く程度。前胸は側面突起を持つ。上翅は長く、後方に狭まり、無紋。後脚は長い。成虫は夏に出現し、アカメガシワなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、主にカエデ科の生木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地での減少が著しく、最近の生息情報は少ない。広い樹林環境の保全が重要と推測される。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

アカアシオオアオカミキリ

Chloridolum japonicum

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	VU	EN	DD	EN	

【形態・生態】

体長 25 ～ 30mm で、腹面と触角、脚は赤褐色、背面は金緑色～青緑色。触角は♂で体長のほぼ 2 倍、♀でも上翅端を越える。成虫は夏に出現し、夜にクヌギの樹液に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地に分布し、公園などにある太いクヌギの生木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

クヌギの大木が減少し、山野のクヌギも管理されなくなったためか、最近の減少が著しい。管理されたクヌギ古木の維持が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984; 須田孫七ら, 2007.



(執筆: 高桑正敏)

ミドリカミキリ

Chloridolum viride

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	EN	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 12 ～ 20mm で、金緑色～青緑色、ときに強く赤みがかかる。前胸は縦長(♂)か縦横ほぼ同長(♀)、光沢が強い。上翅と脚は非常に細くて長い。成虫は初夏から夏に出現し、各種の花や薪に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、かつては住宅地にも見られた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

特に区部の平地での減少が著しい。里山環境の維持が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

スギカミキリ

Semanotus japonicus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 14～23mm で、体はやや平たくて黒色、触角と脚は強く赤褐色がかかる。触角は♂で上翅端を越え、♀は全く届かない。上翅は2対の褐色紋を現す。成虫は春に出現し、夜間にスギやヒノキの太い幹を這う。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から低山地に分布し、スギ科やヒノキ科の太い生木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での減少が目立つ。社寺林などのスギ古木の維持が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヨツボシヒラタカミキリ

Phymatodes quadrimaculatus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	CR	—	CR	

【形態・生態】

体長 4～6mm で、体は平たくてほぼ黒色、触角と脚の一部は褐色。前胸は強い光沢を持つ。上翅は2対の灰白紋を現す。脚の各腿節は強く膨らむ。活動時はアリを思わす。成虫は春に出現し、新しい粗朶(そだ: 雑木の小枝を束ねたもの)や薪に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から低山地に分布し、ブナ科の薪に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

薪を使用しない地域では生存が難しく、区部では絶滅した。広い里山環境の維持が重要と推測される。

【関連文献】

秋元克己, 1936a; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ブドウトラカミキリ

Xylotrechus pyrrhoderus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	NT	

【形態・生態】

体長 6～13mm で、体は黒色で前胸は赤色。触角は非常に短く、上翅肩部に達する程度。前胸はほぼ円形。上翅は細く、目立つ2黄帯を持つ。後脚が長い。成虫は夏から秋に出現する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、住宅地にも見られる。ブドウ科に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ブドウを植えている民家の減少で、特に区部では発見困難となった。里山環境の維持が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

トラフカミキリ

Xylotrechus chinensis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 17～26mm。触角は非常に短く、上翅肩部を少し越える程度。前胸はほぼ円形、前方に黄、黒、赤褐色の横帯を持つ。上翅の虎縞もようは独特。活動時はスズメバチ類を思わせる。成虫は夏に出現する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から低山地に分布し、住宅地にも見られる。クワ類の古木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

クワ類のある民家の減少で区部では発見困難、他地域も里山環境の悪化などで減少が目立つ。里山環境の維持が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

シロオビトラカミキリ

Clytus raddensis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	○	DD	DD	

【形態・生態】

体長 8～14mm で、体は黒色、上翅は通常淡色がかかる。触角は細く、上翅中央の前後に届く。前胸背は平坦部がある。上翅は長く、独特の白紋を持つ。近縁種がいるので同定には注意が必要である。一般に、成虫は夏に出現し、広葉樹の薪に見つかる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

西多摩の山地から記録があるだけである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

最近の生息情報が全くないため、現在の状況は不明である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

キスジトラカミキリ

Cyrtoclytus caproides

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 11～18mm。触角は短く、上翅肩部を少し越える程度。前胸はほぼ円形。上翅は肩周辺が暗褐色を呈し、中央前後に2黄帯を持つ。脚は部分的に強く褐色がかかる。成虫は初夏から夏に出現し、伐採木やノリウツギなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、広葉樹の枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地での減少が著しく、最近の生息情報は少ない。広い樹林環境の保全が重要と推測される。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会 (編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

タケトラカミキリ

Chlorophorus annularis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 10～15mm、黄色地に黒紋を交える。触角は細く、上翅中央前後に達する。前胸はほぼ円形、背面中央に逆Y紋を持つ。上翅の紋は独特、端の1対の黒紋は会合部で離れる。成虫は夏に出現し、枯れたタケ類に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から低山地に分布し、枯れたタケ類に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

タケ類の使用の減少に伴い、特に住宅地や農地で見られなくなった。里山環境などでタケ類の使用が望まれる。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

クロトラカミキリ

Chlorophorus diadema inhirsutus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	VU	VU	VU	

【形態・生態】

体長 9～14mm。触角はやや短く、上翅肩部を多少とも越える程度。前胸はやや円形、背面に大黒紋を持つ。上翅はやや幅広く、黒紋は発達する傾向があり、上翅端の外角はとげ状とならない。近縁種がいるので同定には注意が必要である。成虫は夏に出現し、伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

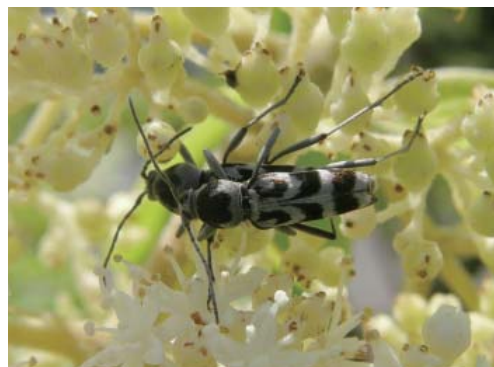
平地から山地に分布し、広葉樹の枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

特に区部では減少が著しく、最近の生息情報はない。広い樹林環境の保全が重要と推測される。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

トウキョウトラカミキリ

Rhaphuma yedoensis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	DD	•	DD	DD	

【形態・生態】

体長 8～10mm。触角はトラカミキリ類としてはやや長く、♂は上翅端に近づく。前胸はやや縦長。上翅は特異な紋を持ち、特に基部直後の1対の楔紋は他に類を見ない。成虫は春に出現し、一般に伐採木やミズキなどの花に集まる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、ブナ科の枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

“東京”が基準産地である。近年、北多摩の丘陵地と奥多摩で記録されているが、個体数は少ないと考えられる。広い樹林環境の保全が重要と推測される。

【関連文献】

原島真二, 1997; 源河正明, 2007.



(執筆: 高桑正敏)

ホソトラカミキリ

Rhaphuma xenisca

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	VU	○	○	○	

【形態・生態】

体長6～11mm。触角はトラカミキリ類としては長く、♂は上翅端にほぼ届く。前胸は縦長、小楯板は純白。上翅の白色斑紋は特異で、肩後方に縦長の小紋を持つ。脚は細くて長い。成虫は初夏から夏に出現し、伐採木やノリウツギなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、自然林などの良好な樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地での減少が著しく、最近の生息情報は少ない。広い樹林環境の保全が重要と推測される。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

キイロトラカミキリ

Grammographus notabilis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	VU	○	○	NT	

【形態・生態】

体長13～19mm。♂触角は上翅端前に届く。前胸はやや縦長、背面に1対の黒紋を持つ。上翅の斑紋は特異で、基部後方に四角の黒紋を持ち、その後方に3対の黒紋がある。成虫は初夏から夏に出現し、クリの花や枯れ木などに集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、栗林や自然林などの良好な樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

平地での減少が目立つ。里山環境の維持が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

トガリバアカネトラカミキリ

Anaglyptus niponensis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長7～12mm。触角は第3節でとげ突起が顕著、♂では上翅端を大きく越え、♀の触角はやや短い。前胸はほぼ卵形。上翅は暗赤褐色で黒紋があり、上翅端外角は後方に針状に長く突出する。成虫は春から初夏に出現し、伐採木やカエデ類などの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、広葉樹の枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部でもともと記録が少なく、最近では皇居内などで記録されているにすぎない。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

スギノアカネトラカミキリ

Anaglyptus subfasciatus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	—	—	DD	

【形態・生態】

体長8～12mm。トガリバアカネトラカミキリに似るが中・後胸は暗色。触角は第3節でとげ突起が顕著、♂は上翅端に届く程度。前胸はほぼ卵形。上翅はより暗く、上翅端外角は後方にとげ状に短く突出する。成虫は春から初夏に出現し、コゴメウツギなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地に分布し、山地での記録を見ない。一般にスギやヒノキ科に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での記録がいくつかあるが、最近の生息情報はない。本種の生息可能なスギやヒノキ科の針葉樹林が減少していることが原因の一つではないかと考えられる。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ホタルカミキリ

Dere thoracica

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	NT	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長7～10mm。頭と腹面、脚は黒、前胸は赤色。触角は上翅中央を越える。上翅は一面が青藍色で無紋、両側平行か後方でやや膨らむ。脚は短い。成虫は春から初夏に出現し、ネムノキの新しい枯れ木やクリなどの花に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、特にネムノキの枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部など平地での減少が目立つ。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

シロオビゴマフカミキリ

Falsomesosella gracilior

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長6～11mm。触角は♂で上翅端を大きく越え、♀は少し越える。上翅は金褐色で細かな黒紋が散らばり、中央の白帯の中にも数個の黒紋が現れる。成虫は初夏から夏に出現し、アカメガシワやオニグルミなどの枯れ枝に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、広葉樹や稀にモミなどの枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での記録が1例あるが、最近の生息情報はない。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

キクスイモドキカミキリ

Asaperda rufipes

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長6～11mm。触角は♂で上翅端を大きく越える。上翅は一様に黒色だが、会合部には細くはっきりしない白条が走る。脚はほぼ赤褐色。成虫は初夏から夏に出現し、アカメガシワやオニグルミなどの枯れ枝に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、広葉樹や稀にモミなどの枯れ木に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での記録があるが、最近の生息情報はない。広い樹林環境の保全が重要である。南多摩や西多摩でも個体数は少ない。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ハイイロヤハズカミキリ

Niphona furcata

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	○	○	○	

【形態・生態】

体長12～21mm。触角は細く、♂で上翅端を越えるが、♀は届かない。前胸は丸みを帯び、側部は岩石群状、背面は縦瘤状にゴツゴツとしている。上翅端は矢筈状。新成虫は枯れた稗内にとどまって冬を越し、翌春から夏に出現するが、一般に姿を見る機会は少ない。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、ネザサ類に依存する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部など平地での減少が目立つ。アズマネザサなどを伴った広い緑地環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

イタヤカミキリ

Mecynippus pubicornis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	VU	VU	NT	VU	

【形態・生態】

体長18～25mm。触角は下面に短毛を密生し、♂♀とも上翅端を大きく越える。上翅には中央やや前方と後方に明るい帯紋が現れるが、ときに不明瞭。成虫は夏に出現し、ヤナギ類やヤマハンノキに集まり、枝や若木の樹皮をかじる。灯火にも飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布し、平地では湿地、山地では溪流沿いで見かける。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での記録もあるが、最近の生息情報はない。広い水辺環境の復元・維持が重要である。溪流沿いの工事にあたってはヤナギ類を存続するような配慮が望まれる。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヒゲナガカミキリ

Monochamus grandis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	—	NT	○	NT	

【形態・生態】

体長 26～45mm。触角は長く、♂では体長の2倍以上。前胸側部の黄紋は鮮やか、上翅は黒色またはまだらに不明瞭な白紋を現す。♂前跗節の下面にはタワシ状の毛を生やす。成虫は夏に出現し、夜にモミ類の衰弱木に集まる。灯火にもよく飛来する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

丘陵地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部ではすでに絶滅し、南多摩でも減少が目立つ。モミ類が多く生育する樹林の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 藤田宏, 1988.



(執筆: 高桑正敏)

ヒメヒゲナガカミキリ

Monochamus subfasciatus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 10～18mm。触角は長く、♂で体長の3倍、♀で2倍程度。上翅は白～黄色の微小紋を散らし、中央は帯紋となる。成虫は夏に出現し、各種の枯れ枝に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部など平地での減少が目立つ。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

センノカミキリ

Acalolepta luxuriosa

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	○	

【形態・生態】

体長 20～37mm。触角は長く、♂で体長の2倍以上、♀で2倍以下。上翅は中央とその前後にぼやけた黄帯を持つ。成虫は夏から秋に出現し、タラノキやハリギリなどウコギ科の葉や枝をかじる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

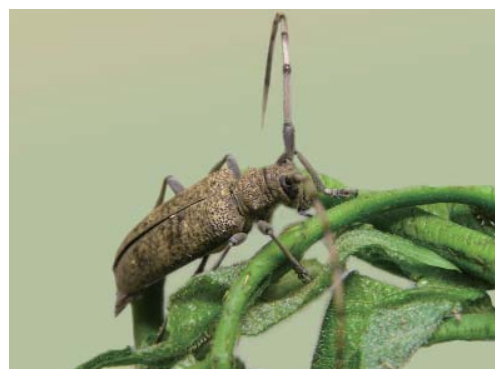
平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

かつては区部でも広く普通に分布していた。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヒメビロウドカミキリ

Acalolepta degener

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	—	—	CR	NT

【形態・生態】

体長8～12mm。この仲間としては小型(しかし太型)で、触角は短く、♂でも体長の2倍に達しない。上翅は不明瞭な白紋を持つ。成虫は初夏に出現し、特にオトコヨモギに好んで集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から多摩川中流域の草地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部ではすでに絶滅したと思われ、多摩川中流域でも絶滅一步手前の状態にある。このため、多摩川中流域ではオトコヨモギの生育する草地環境の維持・拡大が必要であると同時に、採集圧を防ぐ手だてが望まれる。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

チャイロヒゲビロウドカミキリ

Acalolepta kusamai

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	NT	NT	NT	—

【形態・生態】

体長17～29mm。触角は長く、♂で体長の2.5倍、♀で1.5倍程度、第1節は端方に強く肥大する。上翅は無紋だが、眺める角度によって光沢紋が複雑に現れる。成虫は夏に出現し、ニワトコまたはユズリハの生木に集まり、しばしば寄生木を枯らす。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から低山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部でもわずかに生存している。林縁環境にニワトコまたはユズリハを植栽することが保全対策として重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 齊藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

シロスジカミキリ

Batocera lineolata

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	NT	NT	○	NT	—

【形態・生態】

体長44～55mm。よく知られた大型種で、前胸と上翅の黄～白黄色のすじ紋は死後、やがて白～濁白色へと変わる。成虫は初夏から夏に出現し、特にクリ、コナラ、スダジイなどブナ科の生木に集まる。クリ園や、ときに都市公園内にも生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950～1960年代までは区部でも普通に見られたようだが、最近の減少が顕著である。林縁の若木に依存する傾向が強いので、林縁環境の維持と寄主植物の植栽が保全対策として重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヒゲナガゴマフカミキリ

Palimna liturata

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	○	○	NT	

【形態・生態】

体長 13 ～ 20mm。触角は長く、♂で体長の2.5倍以上、♀で1.5倍程度。背面は灰白地に小黑紋を密にちりばめる。成虫は夏に出現し、ブナなど広葉樹の衰弱木に集まるが、体の色彩が保護色となって発見しづらい。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に山地に分布するが低地でも記録される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部と北多摩ではすでに絶滅したと考えられる。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ネジロカミキリ

Pogonocherus seminivens

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	NT	DD	NT	

【形態・生態】

体長 6 ～ 8mm。触角は長く、♂で上翅端を越える程度。上翅の基部は白～黄白部が広がる。成虫は初夏から秋にタラノキやハリギリの枯死部分に見られるが、体の色彩が保護色となって発見しづらい。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での減少が顕著である。南多摩や西多摩でも減少傾向が著しいように、最近の生息情報は少ない。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

フタオビアラゲカミキリ

Rhopaloscelis bifasciatus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長 5 ～ 8mm。触角は♂♀とも上翅端を大きく越える。体はやや細く、上翅は基部とその後方、中央、後方に黒紋を持ち、中央紋が目立つ。成虫は初夏から夏にアカメガシワをはじめ各種の細い枯れ枝に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地に多いが、低地にも分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では最近でも皇居で多数が確認されている。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

カッコウカミキリ

Miccolamia cleroides

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EN	○	○	NT	

【形態・生態】

体長3～6mm。触角は上翅端に届く程度。体は光沢があり、上翅の後半は黒色、その前縁には細い白条が沿う。成虫は春から初夏と秋に出現し、ケヤキやミズキ、ツルウメモドキなど各種の細い枯れ枝やつるに集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地に多いが、低地にも分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部ではすでに絶滅したと考えられる。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヒゲナガモモフトカミキリ

Acanthocinus orientalis

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	DD	NT	DD	NT	

【形態・生態】

体長9～14mm。触角は長く、♂では上翅の3倍、♀で2倍程度。体は平たく、上翅の中央直前に不鮮明な白帯を持つが、中に微小黒点をちりばめる。成虫は夏に出現し、夜間に活動してマツ類やモミ類に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部での記録があるが、最近の生息情報はほとんどない。近隣各県の減少も目立つ。マツ林を含む広い樹林環境の保全が必要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ナカバヤシモモフトカミキリ

Leiopus guttatus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	VU	VU	VU	

【形態・生態】

体長5～9mm。触角は長く、♂では上翅の2.5倍以上、♀で2倍強。体は平たく、上翅の中央直後に黒帯を持ち、明色部には微小黒点をちりばめる。成虫は初夏から夏に出現し、夜間に活動してマツ類やモミ類に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

マツ林の衰退が減少の主因と考えられる。マツ林を含む広い緑地環境の維持が必要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 藤田宏, 1988.



(執筆: 高桑正敏)

シラオビゴマフケシカミキリ

Exocentrus guttulatus

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
NT	—	○	○	○	

【形態・生態】

体長5～9mm。触角は上翅端を越える。体は平たくて幅広く、上翅の中央直後に白黄帯を持ち、暗色部には微小な白黄紋をちりばめる。成虫は初夏から夏に出現し、クワ類など各種の細い枯れ枝に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部でもわずかに生存しているらしく、皇居で記録されている。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

ハンノキカミキリ

Cagosima sanguinolenta

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	CR	VU	VU	EN	

【形態・生態】

体長15～22mm。触角は♂で上翅端に届く程度。上翅は光沢のない黒色だが、会合部と側縁には細い赤条がある。成虫は初夏から夏に出現し、ハンノキやヤマハンノキの葉や枝に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦後の頃までは区部にも生息していたが、すでに絶滅したと考えられる。南多摩や西多摩でも減少が著しい。湿地を伴った広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

オニグルミノキモンカミキリ

Menesia flavotecta

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	—	NT	○	○	

【形態・生態】

体長6～10mm。触角は上翅端を越える。体の大部分が鮮やかな黄色、上翅は側部寄りに3対の黒紋がある。成虫は初夏に多く、オニグルミの葉裏に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地に多いが、低地にも分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では1950年代の採集例があるが、最近の生息情報はない。ただし、生息環境は残っており、少ないながらも生息していると思われる。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヤツメカミキリ

Eutetrarcha ocelota

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
VU	NT	○	○	NT	

【形態・生態】

体長12～18mm。触角は上翅端を少し越える。上翅は普通は青緑がかった浅黄色、側部には4対の黒紋がある。成虫は初夏から夏に出現し、サクラ類の葉や伐採木に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では、皇居の記録が最近の唯一の記録であり、減少が顕著である。北多摩でも樹林の縮小などに伴い個体数が減少している。広い樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

日本鞘翅目学会(編), 1984; 斉藤明子, 2000.



(執筆: 高桑正敏)

アサカミキリ

Thyestilla gebleri

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	CR	CR	CR	VU

【形態・生態】

体長10～15mm。触角は♂で上翅端を少し越え、♀は届く程度。上翅は灰黄～黒色だが、会合部と側縁には細い白条がある。成虫は初夏から夏に出現し、アザミ類に集まる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地の草地に生息し、かつてはアサの害虫として有名であった。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部と北多摩で記録があるが、すでに絶滅したと考えられる。南多摩や西多摩でも絶滅が危惧される。ノアザミなどの生育する広い草地環境の維持・復元が必要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ヘリグロリンゴカミキリ

Nupserha marginella

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EN	VU	○	○	○	

【形態・生態】

体長9～13mm。触角は上翅端を少し越える程度。上翅は黄色だが後方へ黒ずみ、側縁は細い黒条がある。成虫は初夏から夏に出現し、アザミ類などキク科に集まる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地に分布する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は区部にも普通に見られたが、最近の生息情報はほとんどない。北多摩でも個体数が減少している。南多摩や西多摩でも減少傾向にある。草地や林縁環境の保全が重要である。

【関連文献】

藤村俊彦, 1954; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

アオキクスイカミキリ

Phytoecia coeruleomicans

コウチュウ目(鞘翅目)
カミキリムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	—	EX	CR

【形態・生態】

体長 7.5 ～ 9mm。キクスイカミキリに似るが、腹部は全体が黒色、前胸背面も全体黒色。

【分布の概要】

本州(関東)

【都における生息環境】

春から夏に平地から低山地で記録されている。南多摩ではホタルサイコ(セリ科)から得られたという。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去 60 年以上にわたって生息情報がなく、東京都では絶滅したと考えられる。

【関連文献】

藤村俊彦, 1955; 日本鞘翅目学会(編), 1984.



(執筆: 高桑正敏)

ホソネクイハムシ

Donacia vulgaris

コウチュウ目(鞘翅目)
ハムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	□	□	○	EN	

【形態・生態】

体長 6 ～ 8.9mm。背面は銅色の金属光沢があり、腹面には毛が密生している。同属の類似種が複数存在し、食草が共通のものもいるが、上翅端外角が突出し、前胸背に毛がないことにより他種と区別できる。ガマ属やミクリ属を食草とし、成虫は春に出現し、葉を摂食する。幼虫はこれらの根を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

西多摩の多摩川流域に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部に古い記録があるが、現在も生息するかは不明である。抽水植物に依存していることから、ガマ属・ミクリ属の自生する湿地・池沼環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

木元新作・滝沢春雄, 1994; 林成多, 2005.



(執筆: 雛倉正人)

ツヤネクイハムシ

Donacia nitidior

コウチュウ目(鞘翅目)
ハムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
□	*	□	□	*	

【形態・生態】

体長 5 ～ 6.5mm。全身に金属光沢があり、銅色・青色などの色彩変異があり、青系統の色はみに現れる。別属のスゲハムシと似ており、混生することがあるが、やや小さく、腹部第 1 節がそれ以降の節に比べて顕著に長いことで区別できる。スゲ属を食草とし、成虫は早春に出現し、これらの花粉を食べる。幼虫はスゲ属の根を食べる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

北多摩の丘陵地から記録されている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息場所が局地的なため、スゲ群落が改変されればその地域から消滅する危険性がある。スゲ属が自生する湿地に依存していることから、湿地環境およびスゲ群落を保全することが望ましい。

【関連文献】

木元新作・滝沢春雄, 1994; 林成多, 2005.



(執筆: 雛倉正人)

スゲハムシ

Plateumaris sericea

コウチュウ目(鞘翅目)
ハムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	CR	—	VU	EN	

【形態・生態】

体長 6.5 ～ 8.8mm。全身に金属光沢がある。銅色・青色などの色彩変異があり、青系統の色は♂に現れる。別名キヌツヤミズクサハムシ。北関東以北には同属のシラハタミズクサハムシが分布し、酷似するが、東京都の記録があるのは本種だけである。スゲ属を食草とし、成虫は早春に出現し、これらの花粉を食べるほか、湿地周辺の各種様々な花を訪れる。幼虫はスゲ属の根を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

台地辺縁部の残存緑地、丘陵地の谷戸、河川近傍の湿地に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部、北多摩、西多摩に記録がある。スゲ属が自生する湿地に依存していることから、湿地環境およびスゲ群落を保全することが望ましい。

【関連文献】

木元新作・滝沢春雄, 1994; 林成多, 2005.



(執筆: 雛倉正人)

ハッカハムシ

Chrysolina exanthematica

コウチュウ目(鞘翅目)
ハムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	—	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長 7.5 ～ 9mm。背面は銅色の金属光沢があり、上翅には隆起物による暗色・列状の紋がある。腹面は藍色に光る。シソ科のハッカ・ヤマハッカ・カキドオシなどを食草とする。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

主に丘陵地の谷戸や河川周辺の湿地で、ハッカ類やカキドオシが自生する場所に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

南多摩で確認されているほか、区部に古い記録がある。既知記録が乏しいが、丘陵地の谷戸や河川周辺の湿地を精査すれば、産地が追加される可能性が高い。他県の次種オオルリハムシの生息域では、本種も同所的に見られることがある。食草のハッカ類・カキドオシが自生する環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

木元新作・滝沢春雄, 1994; 大塚康司, 2005.



(執筆: 雛倉正人)

オオルリハムシ

Chrysolina virgata

コウチュウ目(鞘翅目)
ハムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	□	□	□	CR	NT

【形態・生態】

体長 11 ～ 15mm。日本在来種のハムシとしては最大級の種。地域変異があり、関東周辺から西日本の個体は、金緑色の光沢があり、上翅が赤銅色を帯びる(青い色調が出るのは主に日本海側から北日本の個体である)。シソ科のシロネ・ヒメシロネを主な食草とし、成虫は飛ぶことができない。成虫越冬の多いこの属では珍しく、土中で幼虫越冬することが知られている。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

平地の河川に沿った氾濫原でシロネ類が自生する環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部の荒川に古い記録があるが、現在も生息しているかは不明である。シロネ類が自生する湿地環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

板橋区役所土木部公園緑地課(編), 1986; 木元新作・滝沢春雄, 1994.



(執筆: 雛倉正人)

ドロノキハムシ

Chrysomela populi

コウチュウ目(鞘翅目)
ハムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR	—	CR	CR	CR	

【形態・生態】

体長 10 ～ 12mm。上翅は赤褐色。胸部や腹面は黒青色。ドロノキ・ヤマナラシ・ヤナギ類の葉を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地にかけての、ドロノキ・ヤマナラシ・ヤナギ類の生育する環境に見られると考えられる。他県では北日本に多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

近隣の神奈川県でも近年は確認がなく、区部および南多摩、西多摩の山間部に古い記録があるが、現在も生息しているかは不明である。ドロノキ・ヤマナラシ・ヤナギ類の生育する環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

青梅市郷土博物館(編), 1982; 南雅之・滝沢春雄, 2005。



(執筆: 鎌倉正人)

ヤナギハムシ

Chrysomela vigintipunctata

コウチュウ目(鞘翅目)
ハムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EN	—	—	EN	

【形態・生態】

体長 6.8 ～ 8.5mm。上翅は黄褐色の地に列状の黒い紋を持つ。前胸背は銅色で側方が黄褐色、脚や腹面は黒色である。ヤナギ類の葉を食べる。成虫は春に出現し、河畔林に見られることが多い。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河畔林などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部ではすでに絶滅したと考えられる。北多摩も個体数は非常に少ないと思われる。ヤナギ類の自生する環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

大野正男, 1981; 木元新作・滝沢春雄, 1994。



(執筆: 鎌倉正人)

オオアオゾウムシ

Chlorophanus grandis

コウチュウ目(鞘翅目)
ゾウムシ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長 12 ～ 15mm。全身が金緑色の鱗片で覆われ、前胸・上翅の側縁部は黄色味を帯びる。上翅末端はとがる。成虫は初夏に出現する。葉上では本種の色彩は保護色となり、発見しにくい。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

既存の確認例が乏しいが、他県では河川敷や高原のヤナギ類の葉上で見つかることが多いことから、ヤナギ類を主たる食樹とし、東京都においては河川との結びつきが強いものと推測される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部、北多摩、南多摩に記録があるが、区部における近年の生息状況については不明である。ヤナギ類の自生する環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

林匡夫ら(編著), 1984; 町田市企画部広報広聴課(編), 2008。



(執筆: 鎌倉正人)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名については、東京都本土部昆虫目録 (東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト)<http://homepage3.nifty.com/TKM/index.html> を基本とし、評価者の判断により修正を加えた。また、配列は、以下の3巻に従った。

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ. 保育社 .
黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅲ. 保育社 .
林匡夫・森本桂・木元新作 (編著), 1984. 原色日本甲虫図鑑Ⅳ. 保育社 .

【留意種とした理由】

和名	地域区分	留意種とした理由
クラサワメクラチビゴミムシ	西多摩 本土部	タイプロカリティであること、また高い採集圧がかかる可能性があるため。
ミイデラゴミムシ	南多摩 西多摩	草地環境を指標する種であること、また幼虫はケラの卵塊を食して成長するという特殊な生態を有するため。
アカマダラコガネ (アカマダラハナムグリ)	南多摩 西多摩 本土部	幼虫はオオタカをはじめとした猛禽類の残渣に依存して生活することが知られ、その盛衰と密接に関連すると考えられるため。
タマガワナガドロムシ	区部	本州から九州の各地で記録されているが、良好な水環境に生息すると考えられるため。また、準絶滅危惧 (NT) に準ずると考えられ、動向に注目する必要があるため。
アヤスジミゾドロムシ	区部	ほとんど記録のない稀な水生種であるが、顕著な形態を示し、また良好な水環境を指標すると考えられるため。

【関連文献】

- 秋元克己, 1936a. 東京市西部の天牛. 大阪昆虫同好会会報, (1): 4-10.
秋元克己, 1936b. 「東京市西部の天牛」増補並びに訂正. 大阪昆虫同好会会報, (1): 87-90.
秋山黄洋・酒井香, 1988. 東京都下のゲンゴロウ科 4 種の記録. 甲虫ニュース, (81): 6.
千葉県自然保護課 (編), 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—動物編. 438 pp.
榎戸良裕, 1985. 神奈川県のカミキリムシ類—基礎資料—. 神奈川虫報, (77): 3-10.
藤村俊彦, 1954. 東京都内産天牛科目録. *Insects Magazine*, (30): 3-24.
藤村俊彦, 1955. 東京都内産天牛科目録 (追加及び訂正). *Insects Magazine*, (33): 21-30.
藤田宏, 1985. 東京都内の上野動物園でヒラタクワガタ. 月刊むし, (175): 43.
藤田宏, 1988. 東京都高尾山のカミキリムシ. 日本鞘翅学会特別報告, (3): 72-93.
福井勇三郎, 1966. 東京市神井の甲虫類. *Insect Magazine*, (67): 39-42.
源河正明, 2007. 奥多摩町日原地域のカミキリムシの記録 (2002 ~ 2006 年). *EXIMIA*, (6): 1-20.
Habu, A., 1973. Fauna Japonica Carabidae: Harpalini (Insecta: Coleoptera). Keigaku Publishing Co., Ltd. 430 pp.
芳賀馨, 2007. 1970-90 年代に奥多摩で採集した甲虫類. うすばしろ, (35): 1- 45.
原島真二, 1997. トウキョウトラカミキリを東京都東大和市で採集. 月刊むし, (317): 34.
林成多, 2011. 島根県の水生甲虫. ホシザキグリーン財団研究報告, 特別号 (1): 1-117.
林匡夫・森本桂・木元新作 (編著), 1984. 原色日本甲虫図鑑Ⅳ. 保育社. 450 pp.
檜木忠志, 2000. 東京都多摩市のコガネムシ 2 種の記録. 月刊むし, (358): 47.
平山修次郎, 1933. 原色千種昆虫図譜. 三省堂. 186 pp. + 104 pls.
平山修次郎, 1937. 原色千種続昆虫図譜. 三省堂. 194 pp. + 88 pls.
平山修次郎, 1940. 原色甲虫図譜. 三省堂. 172 pp. + 52 pls.
市橋弘昭, 2007. 東京都町田市西部のヒゲブトハナムグリ. 月刊むし, (432): 34-35.
石田正明, 1984. 大田区のコガネムシ類. 大田区公害環境部公害対策課 (編). 大田区の昆虫 大田区自然環境保全基礎調査報告書, pp. 79-83. 東京都大田区 .
板橋区役所土木部公園緑地課 (編), 1986. 板橋区昆虫類等実態調査. 東京都板橋区. 180 pp.
伊藤淳・澤田裕二・中里俊英・林友彦, 2009. 東京都稲城市のカミキリムシ. 神奈川虫報, (167): 53-68.
苅部治紀 (編), 2011. 水生昆虫大百科 2011 年度特別展展示解説書. 神奈川県立生命の星・地球博物館. 140 pp.
川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志, 2008. 日本産コガネムシ上科図説 第 1 巻食糞群. 昆虫文献六本脚. 189 pp.
木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会. 539 pp.
木村欣二, 1988. 東京都大田区における数種の甲虫の記録. 甲虫ニュース, (83,84): 7.
岸本年郎, 1997. 大田区のハネカクシ類. 大田区環境部環境保全課 (編). 大田区自然環境保全基礎調査報告書—大田区の昆虫—, pp. 164-167. 大田区 .
国立科学博物館付属自然教育園 (編), 2007. 自然教育園動物目録, 105 pp.
小宮次郎, 1967. 奥多摩カミキリ目録. *Insect Magazine*, (70): 9-21.
昆野安彦, 1971. 奥多摩でオニホソコバネカミキリを採集. 月刊むし, (9): 33.

- 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅲ. 保育社. 514 pp.
- 町田市企画部広報広聴課 (編), 2008. ひっそり生きる町田の自然. 町田市. 278 pp.
- 南雅之・滝沢春雄, 2005. 東京都本土部のハムシ. 神奈川虫報, (149): 1-21.
- 森川清志, 1987. 東京都におけるアカマダラコガネの記録. 月刊むし, (202): 22.
- 武蔵村山市史編さん委員会 (編), 1999. 武蔵村山市史資料編 自然＝植物・キノコ・動物＝里山の輝き. 武蔵村山市. 355 pp.
- 武蔵野市生物生息状況調査会 (編著), 2001. 武蔵野市生物生息状況調査報告書 平成 12 年度. 武蔵野市環境部環境対策課. 429 pp.
- 長尾悟, 1969. ヒメトラハナムグりを都区内で. 昆虫と自然, 4(5): 7.
- 中村俊彦, 2011. 東京都内のオオクワガタの古い記録. 月刊むし, (490): 7-8.
- 中根猛彦, 1978a. 日本の甲虫 (46) ひょうたんどみむし科. 昆虫と自然, 13(1): 4-8.
- 中根猛彦, 1978b. 日本の甲虫 (50) ごみむし科 4. 昆虫と自然, 13(6): 20-25.
- 中根猛彦, 1978c. 日本の甲虫 (51) ごみむし科 5. 昆虫と自然, 13(8): 4-10.
- 中根猛彦, 1983a. 日本の甲虫 (64). 昆虫と自然, 18(10): 20-23.
- 中根猛彦, 1983b. 日本の甲虫 (65). 昆虫と自然, 18(13): 22-24.
- 日本鞘翅目学会 (編), 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社. 565 pp.
- 新里達也, 1984. 大田区の甲虫類. 大田区公害環境部公害対策課 (編). 大田区の昆虫 大田区自然環境保全基礎調査報告書, pp. 41-61. 東京都大田区.
- Nomura, S., Kishimoto, T., Watanabe, Y., 2000. A faunistic study on the staphylinoid beetles (Insecta, Coleoptera) from the Garden of the Imperial Palace, Tokyo, Japan. *Memoirs of the National Science Museum*, 36: 257-286.
- 野村周平・平野幸彦・斉藤明子・上野俊一・渡辺泰明, 2000. 皇居の甲虫相. 国立科学博物館専報, (36): 185-255.
- 岡島秀治・山口 進, 1988. 検索入門 クワガタムシ. 保育社. 207 pp.
- 青梅市郷土博物館 (編), 1982. 青梅市の自然Ⅱ. 青梅市郷土博物館. 534 pp.
- 大野正男, 1981. 自然教育園のハムシ相. 自然教育園報告, (12): 3-19.
- 大塚康司, 2005. 東京都町田市で採集された甲虫類 (3) ハムシ科. 神奈川虫報, (151): 21-34.
- 斉藤明子, 2000. 皇居のカミキリムシ類. 国立科学博物館専報, (36): 287-294.
- 酒井香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説第 2 巻食葉群Ⅰ. 昆虫文献六本脚. 174 pp.
- 桜井俊一・柄沢保彦・岩田一郎, 1966. 日本大学文学部構内 (世田谷区下高井戸) に産する甲虫類について. 動植物研究会報, (10): 50-52.
- 佐藤正孝, 1988. 消えゆく水生昆虫. 昆虫と自然, 17(8): 2-6.
- 柴田泰利, 1984. 大田区のハネカクシ. 大田区公害環境部公害対策課 (編). 大田区の昆虫 大田区自然環境保全基礎調査報告書, pp. 73-78. 東京都大田区.
- 須田孫七・須田真一・高槻成紀, 2007. 東京大学総合研究博物館所蔵須田昆虫コレクション標本目録 鞘翅目 2. 東京大学総合研究博物館. 68 pp.
- 庄田達巳, 1990. 東京・奥多摩町のコガネムシ主科. *Lamellicornia*, (6): 26-32.
- 東京府, 1938. 武蔵野昆虫誌. 東京緑地計画調査彙報第 11 号. 東京府. 194 + 28 pp.
- 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ. 保育社. 526 pp.
- Watanabe, Y., 1990. A revision of the Japanese species of the genus *Velleius* (Coleoptera, Staphylinidae). *Elytra*, 18(1): 59-72.
- 八木下潤, 2002. 奥多摩町のカミキリムシ. うすばしろ, (25): 1-15.
- 山本周平・渡辺恭平, 2009. 多摩川河川敷におけるゴミムシ類の記録. 神奈川虫報, (166): 1-14.
- 自然環境研究センター, 2006. 平成 17 年度皇居外苑濠水環境改善調査業務報告書. 71 pp.

(6) ハチ目

1 選定・評価方法の概要

ハチ目は、前回(1998年版)の本土部のレッドリストでは対象とされていなかったが、今回、アリ科を除くハチ目を評価対象とした。ハチ目(アリ科を除く)では東京都全体のまとまった調査報告はないため、初歩的段階として隣接県での分布及び生息状況等を参考に、検討対象種として11科18種を選定し、定性的要件により評価を行った。文献及び標本調査では、なるべく最近の記録を取り上げるようにしたが、種類や地域区分によっては1920年代の文献記録や標本しか見いだせなかった場合がある。なお、ハチ目は上位分類も含めて、研究途上にある。ここでは、現在広く受け入れられていると考えられる分類を用いたが、今後の研究の進展により科などの扱いが変わる可能性がある。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、15種が本レッドリストの掲載種に選定された。ハチ目(アリ科を除く)は、文献・標本等が限定されていることもあり、本土部全体におけるランクの内訳は、絶滅(EX)が5種、情報不足(DD)が10種となった。

区部では1950年代まではムツボシクモバチ、キスジクモバチ、ヤマトアシナガバチ、キボシトックリバチの記録があった。河川周辺では最近でもキオビクモバチ、キアシハナダカバチモドキの生息が確認されている。絶滅(EX)としたクロマルハナバチであるが、野生個体群でないハウス内花粉媒介用に放飼されたと考えられる個体が野外で得られており注意が必要である。

北多摩地域では都内他地域で記録が見い出されなかったヤスマツヒメハナバチ、フルカワフトハキリバチ、ウスルリモンハナバチの記録があった。花蜂と訪花植物の関係では、ヤスマツヒメハナバチとヤナギ類、フルカワフトハキリバチとキキョウ・アザミ類、ウスルリモンハナバチとアキノタムラソウという結びつきがあるので、これらの昆虫がいたということは、かつて植物相が豊かであったということが想像できる。狭山丘陵には、その名残があるが、これらの昆虫は絶滅したと考えられる。

南多摩地域では都内他地域で記録のないバラヒラタハバチの記録があるが、これは西多摩地域でも発見される可能性が高い。南多摩地域及び西多摩地域には山地性の種類が分布しているが、調査不十分で検討できなかった。今回検討できなかったが、多摩地域の丘陵地における環境の変化は著しく、かなりの種類が激減または絶滅していると考えられる。

なお、検討対象種としたものの、評価の結果、ランク外とした種にクチナガハバチとヒダクチナガハバチがある。両種は全国的にも記録が少なく、環境省レッドリスト(2007)では「情報不足」(DD)に挙げられている。都内においても記録はわずかしがなく、生態情報が不足しているが、実際には都内の西部に広く分布している可能性がある。

(高橋 秀男)

バラヒラタハバチ

Pamphilus hilaris

ハチ目(膜翅目)
ヒラタハバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	DD	—	DD	

【形態・生態】

体長約 10mm。頭部は黄褐色で単眼部を中心に黒いが黒色部は個体変異がある。胸部は黒く、前胸背、脚は赤黄色。♀では第 2～6 腹背板は赤黄色、♂では第 2 腹背板以降は赤黄色で、腹背板中央部が部分的に黒い。単眼後域はわずかに幅よりも長い。頭楯は粗点刻がある。頭頂部は粗点刻を欠く。触角第 3 節は第 4 節よりやや長い。前翅縁紋は基半が黄色で、外半は褐色、前縁室は全面に毛がある。食樹はノイバラである。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

食樹であるノイバラの周辺で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

東京都本土部では南多摩で 1984 年まで記録があった。食樹の分布は広いが他地域では見つかっていない。広葉樹林が更新され、在来の下草が維持されている環境が必要と考えられる。

【関連文献】

Shinohara, A., 2002; Shinohara, A. & J.-W. Lee, 2010.

(執筆: 高橋秀男)



© 国立科学博物館

ウマノオバチ ※備考 (p.544)

Euurobracon yokahamae

ハチ目(膜翅目)
コマユバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	DD	DD	NT

【形態・生態】

体長約 20mm。黄褐色で胸部に黒斑があり、腹背にも黒色部の多い個体がある。触角と後脚は大部分黒褐色。翅は黄褐色で前翅に 3 個、後翅に 1 個の黒褐色斑があり、外縁は幅広く暗褐色を帯びる。♀は体長の 7～9 倍、150mm に達する産卵管がある。ミヤマカミキリに寄生した記録が報告されている。文政七年の「武江産物志」に「馬尾蜂」が出ているが、本種とは断定できない。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

高齢木が存在する落葉広葉樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

寄主であるミヤマカミキリなどの減少により減ったと考えられるが、近年一時的な寄主の増加によると考えられる本種の確認例が増えている。大型カミキリムシが生存できるような、落葉広葉樹林の維持が必要と考えられる。

【関連文献】

佐久間聡, 2010; 原島真二, 2010.

(執筆: 高橋秀男)



ムサシトゲセイボウ

Elampus musashinus

ハチ目(膜翅目)
セイボウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	—	—	DD	NT

【形態・生態】

体長 4～5mm。体色は紫黒色、腹部は紅金色でしばしば強く緑色を帯び、脚は金緑色、後楯板突起はへら状で比較的長く、側面から見るとやや上方に細く突出する。腹部末端は三角状に切り込まれ、側面から見るとその先端は切断され、鈍く腹方へ角ばる。寄主は不明である。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

河川敷などの草地に生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1985 年に区部、2005 年に北多摩から記録されている。河川敷などで在来植生の保全が必要と考えられる。

【関連文献】

新里達也, 1986; 吉田進, 2008.

(執筆: 高橋秀男)



ムツボシクモバチ (ムツボシベッコウ)

Anoplius viaticus

ハチ目 (膜翅目)
クモバチ科
(ベッコウバチ科)

【形態・生態】

体長 8 ～ 15mm。体は黒色。腹部第 1 ～ 3 腹背板に各 1 対の橙色斑があるが、小型のみでは帯状または退化傾向がある。翅はわずかに曇り、外縁は幅広く暗色。ハラクロコモリグモなどを狩り幼虫の食餌とする。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

平地では、田畑、草原などに生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代までは、区部、北多摩では普通に見られた。全国的に平地では見られなくなった。他県の山地では生息しているところがあるため、東京都本土部においても山地では発見される可能性がある。耕作地や未舗装道路などの裸地的環境が必要と考えられる。

【関連文献】

鹿野忠雄, 1927; 丸山工作, 1943.

(執筆: 高橋秀男)

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EX	EX	—	—	EX	NT



© 国立科学博物館

キオビクモバチ (キオビベッコウ)

Batozonellus annulatus

ハチ目 (膜翅目)
クモバチ科
(ベッコウバチ科)

【形態・生態】

体長 ♂ 16 ～ 18mm、♀ 23 ～ 28mm。♀ は黒色で頭部、胸部背面、触角および脚の大部分が黄褐色。腹部は第 2 背板基部に黄色帯があり、腹端部は黄褐色。翅は黄褐色で外縁は黒褐色。♂ は黒色で全体に鮮黄色の斑紋がある。触角は褐色。脚は黒・褐・黄の斑紋がある。翅は透明で黄色をおび、外縁は幅広く黒褐色。コガネグモなどの大型のクモを狩り幼虫の食餌とする。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

河川敷などに生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1960 年代までは普通に見られたと推定される。広い砂地などの営巣環境が必要と考えられる。

【関連文献】

石井重美, 1927; ネイチャーリーダー協議会, 2004.

(執筆: 高橋秀男)

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	DD	—	—	DD	



キスジクモバチ (キスジベッコウ)

Batozonellus lacerticida

ハチ目 (膜翅目)
クモバチ科
(ベッコウバチ科)

【形態・生態】

体長 ♂ 12 ～ 16mm、♀ 16 ～ 27mm。黒色で、複眼の内外側、頭楯の末端両側、大顎中央、前胸背の前端と後縁、中胸盾板の後方中央と側部、肩板、小盾板の後方中央、腹部第 2 ～ 4 背板基部両側、触角の大部分、各脚腿節の末端以下 (跗節の末端 1 ～ 4 節は黒褐色) は黄白～橙褐色 (♂ ではより黒色部が広い)。翅は黄褐色で外縁は黒褐色。ナガコガネグモなどの大型のクモを狩り幼虫の食餌とする。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

河川敷などに生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代までは、区部、北多摩では普通に見られた。広い砂地などの営巣環境が必要と考えられる。

【関連文献】

自由学園初等部 ハチのグループ, 1952.

(執筆: 高橋秀男)

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EX	EX	DD	—	DD	



© 国立科学博物館

キボシトックリバチ

Eumenes fraterculus

ハチ目(膜翅目)
スズメバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	—	—	DD	

【形態・生態】

体長 13～17mm。黒色で黄白色の微毛に覆われ、光沢は鈍い。腹部第2腹背板両側に黄紋があり、脚は基部を除き大部分黄褐色。泥土で徳利に似た形の巣を作り、その中に幼虫の食餌であるオオウンモンクチバなどの幼虫を麻痺させて入れる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

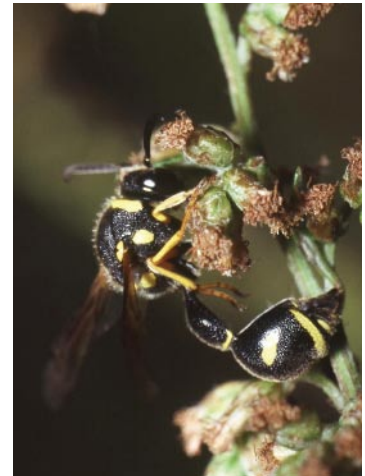
河川敷などの環境に生息していると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多摩川流域では 1990 年代まで記録があった。ヨシ群落の維持が必要と考えられる。

【関連文献】

自由学園初等部 ハチのグループ, 1952.



(執筆者: 高橋秀男)

ヤマトアシナガバチ

Polistes japonicus

ハチ目(膜翅目)
スズメバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	DD	—	DD	DD

【形態・生態】

体長 16～22mm。中型のアシナガバチで体は黒色。腹部第3、4腹背板の色帯上に黄色の紋がないことはキボシアシナガバチと同じであるが、触角上面前半が黄褐色。中胸背、前伸腹節に2本の縦帯がある。草本の葉裏や樹木の細枝に営巣し、巣の藁の色は緑がかった黄色である。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

家屋周辺で見られるアシナガバチとして代表的なもののひとつであったが、本種のみ見られなくなった。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950年代までは普通に見られたが、その後激減した。理由については不明である。関西地方では増加しているといわれているので、再び見られるようになる可能性がある。

【関連文献】

自由学園初等部 ハチのグループ, 1952.



© 国立科学博物館

(執筆者: 高橋秀男)

フジジガバチ

Ammophila atripes japonica

ハチ目(膜翅目)
アナバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	—	—	EX	NT

【形態・生態】

体長 23～34mm。♀は黒色で腹部に紺色の光沢があり、腹柄の大部分、脚の腿節以下の大部分、触角第11節の中央部などは赤褐色。翅はやや黄褐色を帯びる。♂は腹柄第2節の下半部のみ褐色で、翅は透明。低山地の裸地に穴を掘り、ヤガ科の幼虫を狩ると考えられる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

河川敷などに生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前には現在の港区、新宿区にあたる地域から記録されていた。北多摩では 1950 年頃まで記録があった。営巣できる砂地のある環境の維持が必要と考えられる。

【関連文献】

東京府, 1938; 自由学園初等部 ハチのグループ, 1952.



© 国立科学博物館

(執筆者: 高橋秀男)

アカオビケラトリ

Larra amplipennis

ハチ目(膜翅目)
ギングチバチ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	—	DD	DD	DD	NT

【形態・生態】

体長 16～18mm。体は黒色。腹部は平滑で、第1～3節は赤色。後方単眼は痕跡的。翅は暗褐色で紫光沢がある。前胸背は中胸背と同位で圧下されない。♀の尾域は平滑で微毛がない。一般に狩りバチは巣を作って獲物を貯えるが、本種は巣を作らず、幼虫の食餌であるケラを一時麻痺させ卵を産みつける。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

田畑や草原環境に生息していたと考えられるが、現在は湾岸部の1箇所でのみ確認されている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1960年頃までは、区部には広く分布していたと推定される。いまのところ湾岸部の生息地は安定しているが、東京都本土部の他地域では発見されていないので、極めて存続が憂慮される側面もある。獲物であるケラが生息できる環境の維持が必要と考えられる。

【関連文献】

青梅市郷土博物館(編), 1982; 高橋秀男・鎌倉正人, 2010.

(執筆: 高橋秀男)



キアシハナダカバチモドキ

Stizus pulcherrimus

ハチ目(膜翅目)
ギングチバチ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	—	—	—	DD	VU

【形態・生態】

体長約 23mm。黒色で光沢がある。顔面の両側、頭楯の大部分、前胸背後縁、第1～5腹背板には黄白色の斑紋がある。脚は腿節前半より先が黄褐色。翅は透明で黄褐色をおび、外縁は灰色に曇る。翅脈は黄褐色。砂地や砂混じりの地面に巣穴を掘り、イナゴ類やバッタ類を狩り、幼虫の食餌とする。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

河川敷などに生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1995年に区部で1♂1♀が記録されているだけである。営巣できる砂地と獲物の豊富な環境が必要と考えられる。

【関連文献】

青木隆, 1996.

(執筆: 高橋秀男)



ヤスマツヒメハナバチ

Andrena yasumatsui

ハチ目(膜翅目)
ヒメハナバチ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
—	DD	—	—	DD	DD

【形態・生態】

体長 8～11mm。体は黒色で、頭、胸部に灰白色毛を密生する。♂の頭楯は黄白色で2黒点がある。前翅の肘室は2個。早春に出現し、主にヤナギ類の花に集まる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

低地から丘陵地の草原や河川敷などに生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1923年に北多摩から1♀が記録されたのみで、東京都本土部からの他の記録はない。在来植物が豊富で広い砂地が維持された環境が必要と考えられる。

【関連文献】

Hirashima, Y., 1952.

(執筆: 高橋秀男)



フルカワフトハキリバチ

Megachile lagopoda furukawai

ハチ目(膜翅目)
ハキリバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	EX	—	—	EX	DD

【形態・生態】

体長 14～18mm。大型のハキリバチで腿節が太く、特に♂では前脚、後脚、大顎、頬が発達している。夏季に出現し、訪花植物としてキキョウやアザミ類が報告されている。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

自然度の高い草原の見られる丘陵地に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950年頃に北多摩に生息していた記録がある。営巣場所(地中)と訪花植物(キキョウ、アザミ類)のある環境が必要と考えられる。

【関連文献】

自由学園初等部 ハチのグループ, 1952.



(執筆: 高橋秀男)

ウスルリモンハナバチ

Thyreus centrimacula

ハチ目(膜翅目)
ミツバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	EX	—	—	EX	

【形態・生態】

体長約 15mm。近似種ルリモンハナバチとは体の斑紋が淡青色で、第1～5腹背板の斑紋は腹背中央で幅広く遮断され、小楯板の斑紋を欠くことで区別できる。第1腹背板基部にも淡青色紋がある。シロスジコシブトハナバチ(シロスジフトハナバチ)に労働寄生すると考えられている。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

在来植物が豊富な里山に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950年頃に北多摩に生息していた記録がある。寄主と考えられているシロスジコシブトハナバチ(シロスジフトハナバチ)が生息できる営巣場所(地中)と訪花植物(アキノタムラソウ)が豊富な環境が必要と考えられる。

【関連文献】

自由学園初等部 ハチのグループ, 1952.



(執筆: 高橋秀男)

クロマルハナバチ ※備考(p.544)

Bombus ignitus

ハチ目(膜翅目)
ミツバチ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	DD	DD	DD	DD	NT

【形態・生態】

体長♂約 20mm、♀ 19～23mm、ワーカー(働き蜂) 12～19mm。♀とワーカーは同じ毛色で、全体黒色の長毛を密生し、腹端3節に赤褐色毛がある。♂は黄色長毛に覆われ、胸背中央部と第3腹背板の毛は黒色。平地から低山地に生息し、春から秋まで見られる。一般的に太平洋側では個体数は少ない。

【分布の概要】

本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

平地では、かつては広く分布していたと推定される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

花蜜および花粉が利用できる在来植物が、春から秋まで連続的に存在する環境に生息していると考えられるため、在来植物の豊富な環境の維持が必要と考えられる。セイヨウマルハナバチにかわるポリネーターとして利用されることがあるが、在来種とはいえ、異なった地域個体群の逸出は問題である。

【関連文献】

平山修次郎, 1933.



(執筆: 高橋秀男)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は基本的に、九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター（編），1989. 日本産昆虫総目録 II. を基本とし、評価者の判断により修正を加えた。

【備考】

和名	備考
ウマノオバチ	区部の最近の記録は移入の可能性が高い。
クロマルハナバチ	野生個体でないものが見つかった。

【関連文献】

青木隆，1996. キアシハナダカバチモドキを東京都足立区で採集．月刊むし，(308): 38.

原島真二，2010. ウマノオバチを東京都青梅市で採集．うすばしろ，(41): 22.

Hirashima, Y., 1952. Description of *Andrena yasumatsui* n. sp., with a provisional key to the subgenera of Palaearctic *Andrena*(Hymenoptera, Andrenidae). *Mushi*, 24(10): 59-65.

平山修次郎，1933. 原色千種昆虫図譜．三省堂．186 pp. + 104 pls.

石井重美，1927. キオビベッカウバチに就ての二三の観察．昆虫，2(3): 183-188.

丸山工作，1943. 六星鼈甲蜂の観察．昆虫界，(115): 511-513.

ネイチャーリーダー協議会，2004. 江東区 PES(ポケットエコスペース) 昆虫類の生息状況調査報告書．64 pp.

新里達也，1986. 膜翅目 セイボウ科．板橋区役所公園緑地課（編）. 板橋区昆虫類等実態調査，pp. 124-125. 東京都板橋区．

青梅市郷土博物館（編），1982. 青梅市の自然 II ．青梅市郷土博物館．534 pp.

佐久間聡，2010. ウマノオバチを東京都町田市で採集．うすばしろ，(41): 17.

鹿野忠雄，1927. ムツボシベツコウバチの生態観察．台湾博物学会会報，(90): 214-220.

Shinohara, A. & J.-W. Lee, 2010. New distribution record of *Pamphilius hilaris*(Hymenoptera, Pamphiliidae) from Sakhalin. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 16(1): 83-84.

Shinohara, A., 2002. Pamphiliid sawflies(Hymenoptera, Symphyta) from Kamiange at the foot of Mt. Jinbayama, southwestern Tokyo. *Memoirs of the National Science Museum*, (38): 179-194.

高橋秀男・雛倉正人，2010. 東京都のアカオビケラトリバチ．埼玉動物研通信，(67): 53-54.

東京府，1938. 武蔵野昆虫誌．東京緑地計画調査彙報第 11 号．東京府．194 + 28 pp.

吉田進，2008. 東京都西東京市の東大農場でムサシトゲセイボウを採集．月刊むし，(444): 48.

自由学園初等部 ハチのグループ，1952. 南沢のハチの名簿．採集と飼育，14(5): 157-159.

(7) ハエ目

1 選定・評価方法の概要

ハエ目は、昆虫類の中ではコウチュウ目、ハチ目、チョウ目に次いで種数が多いグループであり、日本から約 5,300 種、世界では約 11 万種が知られている。なおかつ、周極地域から熱帯地域に至る、海浜から油田や氷河の下の中流水まで、ありとあらゆる環境に適応して生息している。このため、生活史は極めて多様であり、特定の環境にはそれに対応したハエ目相が見られ、環境指標性は比較的高い。

東京都から記録されたハエ目については古い記録はほとんど見られないが、平成になってからは、『多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究』（里山昆虫研究会,1995）、『皇居の生物相Ⅲ．昆虫』（2000. 国立科学博物館専報 No.36.）、「狭山丘陵の双翅目(2)」（伊東憲正,2003. はなあぶ No.15-1.）、『赤坂御用地と常盤松御用邸の動物相』（2005. 国立科学博物館専報 No.39.）、「森林総合研究所多摩森林科学園の双翅目昆虫相」（松本和馬・三井偉由・鳥居隆史,2007. 森林総合研究所研究報告 No.6(1):77-88.）などのすぐれた報告が公表されており、現時点で 1,331 種（東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト, <http://homepage3.nifty.com/TKM/>, 2010 年 1 月 1 日現在）のハエ目が記録されている。この種数は全国の都道府県の記録を見ても上位に位置する。しかし、その内訳を見るとほとんどが区部の記録に偏っており、本来ハエ目の種数が多いはずの北多摩地域や南多摩地域、西多摩地域の記録は少なく、中でも東京都最高峰の雲取山を含む東京都の中で一番良好な自然が残っていると考えられる西多摩地域の記録が最も少ない。

今回のリストは、このような東京都のハエ目の現状をふまえて、現時点で記録されている種の中から、主に環境指標性が高く比較的特徴的であり、なおかつ同定が容易な 12 種を検討対象種とした。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、本レッドリストの掲載種は 12 種となった。ガガンボ科からは大型種で里山的な環境との結びつきが強いミカドガガンボ（北多摩地域、南多摩地域、西多摩地域に記録あり）を、カ科からは良好な樹林環境に生息し幼虫は他種のボウフラを捕食するトワダオオカ（南多摩地域、西多摩地域に記録あり）を、ハルカ科からは樹林環境に生息し第三紀の周北極要素を示す種として学術的にも貴重な種であるハマダラハルカ（南多摩地域、西多摩地域に記録あり）を留意種に選定した。また、ムシヒキアブ科からは樹林環境に生息する大型のムシヒキアブであるオオイシアブ（北多摩地域、南多摩地域、西多摩地域に記録あり）とチャイロオオイシアブ（北多摩地域、南多摩地域、西多摩地域に記録あり）を、ハナアブ科からは良好な樹林環境に生息するハチモドキハナアブ（北多摩地域、南多摩地域に記録あり）とクロベッコウハナアブ（区部、北多摩地域、南多摩地域に記録あり）を留意種とした。さらに、ニクバエ科からは海浜砂丘に生息するハマベニクバエ（区部に記録あり）を、クロバエ科からは湿性草地に生息するショウジョウクロバエ（西多摩地域に記録あり）と樹林環境に生息するミドリバエ（南多摩地域、西多摩地域に記録あり）を留意種として選定した。

また、過去に記録があるものの最近の記録がほとんどない種として、良好な樹林環境に生息するハナアブ科のオオナガハナアブ（1950 年に日原で採集されて以降最近まで記録なし）と良好な湿地環境に生息するクロバエ科のカエルキンバエ（1968 年以前に東京都から記録があるが以降記録なし）の 2 種を絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）に選定した。

（伊東 憲正）

ミカドガガンボ

Ctenacroscelis mikado

ハエ目(双翅目)
ガガンボ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	*	*	*	*	

【形態・生態】

日本最大のガガンボで、体長 30 ～ 36mm、翅長は 35 ～ 50mm。胸部は黄褐色で、背板に暗褐色の斑紋がある。小楯板、後小楯板、腹部背面は中央部が暗褐色。翅は褐色。幼虫は丘陵地から低山地の細流の砂礫地などに生息しており、成虫も細流沿いや林内に見られ、良く飛翔する。4 ～ 9 月に出現する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から低山地にかけて生息するが個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林道整備や河川改修、宅地開発などによって生息域は狭まりつつある。

【関連文献】

川合禎次・谷田一三(編), 2005; 平嶋義宏・森本桂(監修), 2008。



(執筆: 伊東憲正)

ハマダラハルカ

Haruka elegans

ハエ目(双翅目)
ハルカ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	*	*	*	DD

【形態・生態】

体長♂ 6.5 ～ 9mm、♀ 7 ～ 11mm、翅長♂ 6 ～ 8.5mm、♀ 7 ～ 8.5mm。体脚とも黒褐色で光沢がある。触角は短く、頭長の約 2 倍。翅には白色の斑紋が大小合わせて 15 個内外あり、縁紋は黒色。低地から山地にかけて生息しており、早春に出現する。幼虫はネムノキの朽木の樹皮下で成育する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の丘陵地から低山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林道整備や河川改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

石原保(監修), 1983; 平嶋義宏・森本桂(監修), 2008。



(執筆: 伊東憲正)

トワダオオカ

Toxorhynchites towadensis

ハエ目(双翅目)
力科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	*	*	*	

【形態・生態】

体長♂♀ともに 10 ～ 13mm、翅長♂ 7.8mm ～ 10.5mm、♀ 7.5 ～ 8.5mm で、日本最大の蚊である。吻は大きく下方に曲がり、体は青藍色。腹部第 6 ～ 8 節の両側に顕著な黒と橙黄色の毛束がある。幼虫は樹洞内の溜まり水に発生し他種のボウフラを捕食する。6 ～ 9 月に出現する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の丘陵地から山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

古い樹木の残る良好な樹林環境が本種の生息には必要であり、林道整備や河川改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

石原保(監修), 1983; 平嶋義宏・森本桂(監修), 2008。



(執筆: 伊東憲正)

オオイシアブ

Laphria mitsukurii

ハエ目(双翅目)
ムシヒキアブ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	*	*	*	*	

【形態・生態】

体長 15 ～ 26mm。黒色で黒長毛を密生するが、胸背には褐色毛が混じり、腹部は黒色部が大きく、第4節以下の節は橙黄色の長毛で被われる。成虫、幼虫ともに捕食性であり、幼虫は朽木に生息し、成虫も樹林環境周辺に見られる。5 ～ 9 月に出現する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林環境が本種の生息に必要であり、林道整備や河川改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

石原保(監修), 1983; 平嶋義宏・森本桂(監修), 2008。



(執筆: 伊東憲正)

チャイロオオイシアブ

Laphria rufa

ハエ目(双翅目)
ムシヒキアブ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	*	*	*	*	

【形態・生態】

体長 23 ～ 28mm。オオイシアブに似るが、一般に橙黄毛が多く、腹部は通常基部2節と3節前半に暗色毛を装うが、それ以下の節は全体橙黄色の長毛で被われる。成虫、幼虫ともに捕食性であり、幼虫は朽木に生息し、成虫も樹林環境周辺に見られる。5 ～ 9 月に出現する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林環境が本種の生息に必要であり、林道整備や河川改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

石原保(監修), 1983; 平嶋義宏・森本桂(監修), 2008。



(執筆: 伊東憲正)

クロベッコウハナアブ

Volucella nigricans

ハエ目(双翅目)
ハナアブ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
*	*	*	—	*	

【形態・生態】

体長 18 ～ 21mm。大型で、羽毛状の触角刺毛と翅脈に特徴がある。胸背は光沢のある黒色。翅の中央と先端には黒斑がある。腹部は黒色。ときに基部に黄褐色の斑紋を有す。幼虫はクロスズメバチ類の巣に寄生する。5 ～ 8 月に出現する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

区部や多摩地域の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

クロスズメバチ類が生息する良好な樹林が本種の生息に必要であり、林道整備や河川改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

石原保(監修), 1983; 双翅目談話会, 2002。



(執筆: 伊東憲正)

ハチモドキハナアブ

Monoceromyia pleuralis

ハエ目(双翅目)
ハナアブ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	*	*	—	*	

【形態・生態】

体長 15.5 ~ 17.0mm。触角は長く、額突起も長い。翅は前縁が広く褐色で R4+5 脈は独特の曲がり方をする。体は黒色で、腹部の各節に黄色い帯がある。ヒサマツハチモドキハナアブに良く似ているが、本種の腹部は基部で強くくびれるため区別できる。コナラ、クヌギ、アベマキなどの樹液に良く飛来する。5 ~ 10 月に出現する。

【分布の概要】

本州、九州

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種はコナラ、クヌギ、アベマキなどの樹液に良く飛来することから、そのような樹種が生育している良好な樹林が本種の生息に必要であり、林道整備や河川改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

双翅目談話会, 2002; 岩井大輔, 2002.

(執筆: 伊東憲正)



オオナガハナアブ

Spilomyia gigantea

ハエ目(双翅目)
ハナアブ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	—	CR EN	CR EN	

【形態・生態】

体長 27 ~ 30mm で極めて大型である。複眼にはほとんど斑紋が現れない。胸背は肩瘤付近を除き光沢のある黒色。小楯板は生時赤色だが死後黒色。翅の前縁は褐色を帯び、r-m 脈は著しく斜めである。腹部は黒色で、各節に 2 本の黄褐色の帯があり、末端ほど発達する。7 ~ 9 月に出現する。幼虫はおそらく大木の朽木に生息すると考えられる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

大木が残る自然林に生息すると考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年に奥多摩で 1 ♀ が記録されて以降、東京都本土部からの正式な記録はなかったが、2011 年に 61 年ぶりに奥多摩で 1 ♂ が記録された。大木が残る自然林を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

Shiraki, T., 1968; 笹井剛博, 2011.

(執筆: 伊東憲正)



ショウジョウクロバエ

Dexopollenia flava

ハエ目(双翅目)
クロバエ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
—	—	—	*	*	

【形態・生態】

体長約 7mm。体全体が黄金色の綿毛で覆われる黄色の美しいハエである。本種の生態は不明であるが、草地環境(湿性草地や林間草地など)で見られることから、そのような環境を好む種であると考えられる。7 ~ 9 月に出現する。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

西多摩の丘陵地から山地の草地環境(湿性草地や林間草地など)に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林道整備や河川改修、宅地開発などによる草地環境の改変が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

Kano, R. & S., Shinonaga, 1968; 里山昆虫研究会, 1995.

(執筆: 伊東憲正)



カエルキンバエ ※備考 (p.550)

Lucilia chini

ハエ目 (双翅目)
クロバエ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
—	—	—	—	CR EN	DD

【形態・生態】

体長 5 ～ 7mm。身体は金緑色の金属光沢を持ち、腹部の第 1 節から第 2 節は紫黒色で、第 3 節後縁にも紫黒色の狭い縁取りがある。また腹部第 3 節後縁には一対の長大な正中辺縁剛毛を持つ。5 ～ 10 月に出現する。

【分布の概要】

本州 (近年の記録がある県は、青森、秋田、栃木、埼玉の 4 県のみ)

【都における生息環境】

東京都の詳細は不明であるが、関東近県の生息環境から勘案すると、①池やワンド、クリークなどの場所が付近にある河川敷や水田、湿地で、②土地利用が明治時代くらいよりほとんど変化していないこと、③カエル類が多く生息していることの 3 つが生息環境の条件として挙げられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境の条件を満たす場所は、おそらくほとんど残っていないと考えられるが、再発見された場合は、可能な限り確認された環境全体の保全に努めることが望ましい。

【関連文献】

徳本洋, 2000; 伊東憲正・古田治, 2009.

(執筆: 伊東憲正)



ミドリバエ

Isomyia senomera

ハエ目 (双翅目)
クロバエ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
—	—	*	*	*	

【形態・生態】

体長約 9mm。体は黄緑色で金属光沢をもっている。頬は白く、白毛を持つが、中央部に黒色斑がある。本種の幼虫は、朽木などに生息するシロアリに寄生する可能性が疑われており、シロアリが生息する樹林が本種の生息に必要である可能性が考えられる。6 ～ 9 月に出現する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の丘陵地から山地の樹林環境周辺に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林道整備や河川改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、生息環境の減少が懸念される。

【関連文献】

石原保 (監修), 1983; 小松貴, 2009.

(執筆: 伊東憲正)



ハマベニクバエ

Sarcophaga alba

ハエ目 (双翅目)
ニクバエ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
*	■	■	■	*	

【形態・生態】

体長約 8mm。小型で灰白色の美しいニクバエで、♂♀ともに両複眼の間隔が甚だ広い。側頭部、側顔部、頬は銀白色で、頬には白毛が密生している。海岸の砂浜に生息する。6 ～ 9 月に出現する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部の海岸に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸の砂浜に生息する種であるが、東京都本土部においては、海岸の砂浜がある場所は非常に限られているため、可能な限り砂浜を保全する必要がある。

【関連文献】

村山茂樹, 2006; 平嶋義宏・森本桂 (監修), 2008.

(執筆: 伊東憲正)



【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名は、環境庁（編），1995. 日本産野生生物目録無脊椎動物編Ⅱ．に、配列は、石井実ら，1997. 日本動物大百科第9巻 昆虫Ⅱ．平凡社．に準拠した。
ただし、ハマベニクバエの学名は、Pape,T., 1996. Catalogue of the Sarcophagidae of the World (Insecta; Diptera). に準拠した。

【備 考】

和名	備考
カエルキンバエ	東京都における記録は、Fauna Japonica に Tokyo と記述されているのみで、具体的な記録地が不明である。そのため、地域区分ごとの 評価ができず、本土部全体での判定のみとせざるを得なかった。 Kano,R. & S., Shinonaga, 1968. Fauna Japonica Calliphoridae (Insecta: Diptera). Tokyo Biogeographical Society of Japan.

【留意種とした理由】

和名	地域区分	留意種とした理由
ミカドガガンボ	北多摩	幼虫は細流の砂地中に生息することから、里山的な環境を指標する種であり、なおかつ大型種で確認が容易であるため。
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
ハマダラハルカ	南多摩	幼虫はネムノキの朽木の樹皮下に生育することから、樹林環境を指標する種であり、なおかつ、第三紀の周北極要素を示す種として学術的にも貴重な種であるため。
	西多摩	
	本土部	
トワダオオカ	南多摩	幼虫は樹洞内の溜まり水に発生し、他種のボウフラを捕食することから、古い樹木の残る良好な樹林環境を指標する種であるため。
	西多摩	
	本土部	
オオイシアブ	北多摩	成虫、幼虫ともに捕食性であり、幼虫は朽木に生息し、成虫も樹林環境周辺に見られることから、良好な樹林環境を指標する種で、環境指標性が高いため。
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
チャイロオオイシアブ	北多摩	成虫、幼虫ともに捕食性であり、幼虫は朽木に生息し、成虫も樹林環境周辺に見られることから、良好な樹林環境を指標する種で、環境指標性が高いため。オオイシアブよりも山地に生息する。
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
クロベッコウハナアブ	区部	本種の幼虫はクロスズメバチ類の巣に寄生することから、クロスズメバチ類が生息している良好な樹林環境の指標となるため。
	北多摩	
	南多摩	
	本土部	
ハチモドキハナアブ	北多摩	低地から台地、丘陵地のクヌギを主とした樹林環境を指標する種であり、なおかつ特徴的で確認が容易であるため。
	南多摩	
	本土部	
ショウジョウクロバエ	西多摩	丘陵地から山地の湿地草原に生息し、環境指標性が高いため。
	本土部	
ミドリバエ	南多摩	丘陵地から山地の樹林環境周辺に生息しており、環境指標性が高いため。なお本種の幼虫は、朽木などに生息するシロアリに寄生する可能性が疑われている。
	西多摩	
	本土部	
ハマベニクバエ	区部	海岸の砂浜に生息する種で環境指標性が高く、全国的に個体数が減少しているため。
	本土部	

【関連文献】

- 平嶋義宏・森本桂 (監修), 2008. 新訂原色昆虫大図鑑Ⅲ. 北隆館. 654 pp.
- 石原保 (監修), 1983. 学研生物図鑑 昆虫Ⅲ. 学習研究社. 398 pp.
- 伊東憲正・古田治, 2009. カエルキンバエ調査会報告ならびに既報の整理. はなあぶ, (27): 58-61.
- 岩井大輔, 2002. 埼玉県におけるハチモドキハナアブに関する知見. はなあぶ, (14): 11-12.
- Kano, R. & S., Shinonaga, 1968. Fauna Japonica Calliphoridae (Insecta: Diptera). Biogeographical Society of Japan. 181 pp.+ 23 pls.
- 川合禎次・谷田一三 (編), 2005. 日本産水生昆虫 ― 科・属・種への検索, 東海大学出版会. 1342 pp.
- 小松貴, 2009. 野外におけるミドリバエ *Isomyia senomera* の産卵行動. はなあぶ, (27): 34-35.
- 村山茂樹, 2006. 葛西臨海公園に出現したニクバエ (東京都新記録のハマベニクバエの報告). はなあぶ, (22): 81.
- 笹井剛博, 2011. 61年ぶりに東京都から記録されたオオナガハナアブ. はなあぶ, (32): 59.
- 里山昆虫研究会, 1995. 多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究, 229 pp.
- Shiraki, T., 1968. Fauna Japonica Syrphidae (Insecta: Diptera) Vol. II. Biogeographical Society of Japan. 243 pp.
- 双翅目談話会, 2002. データアップ図鑑 日本のハナアブ Ver.1. 228 pp. + 付録7.
- 徳本洋, 2000. カエルキンバエを探そう ― 研究史と種の特性解説 ―. はなあぶ, (10): 35-41.

(8) チョウ目チョウ類

1 選定・評価方法の概要

東京都の蝶類データ集(倉地正・栗山定(編), 2007. グループ多摩虫. 187pp.)によれば、戦前(1945年以前)を含め、2006年までに記録された東京都本土部のチョウ類の種数は、アゲハチョウ科13種、シロチョウ科12種、シジミチョウ科37種、テングチョウ科1種、マダラチョウ科5種、タテハチョウ科(ジャノメチョウ亜科を含む)52種、セセリチョウ科19種の合計139種に及ぶ。このうち、前回(1998年版)に選定された本土部のチョウ類の種数は、アゲハチョウ科3種、シロチョウ科2種、シジミチョウ科21種、テングチョウ科1種、タテハチョウ科(ジャノメチョウ亜科を含む)20種、セセリチョウ科7種、合計54種を数える。

今回の改定作業は、文献による情報収集を中心に定性要件を取り入れ評価した。前回、人為分布の可能性が考えられるとし、評価対象から外したギフチョウを今回は検討対象種に加え、奥多摩の石灰岩地域に遺存分布するホシミスジも貴重種と判断し、検討対象種に組み入れた。その結果、今回の改定で検討対象種は56種とした。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、本レッドリストの掲載種は50種となった。2009年よりさかのぼっておおむね30年以上記録がなく、絶滅したと判断できる場合は絶滅(EX)とした。また、環境の変化で絶滅した可能性が高いが判断が困難な種は、絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)としたものもある。区部のオナガアゲハ、ウラナミアカシジミ、南多摩のアイノミドリシジミ、ウラギンスジヒョウモン、西多摩のウスイロオナガシジミ、ウラミスジシジミ、ジョウザンミドリシジミ、ウラギンスジヒョウモン、ウラギンヒョウモンがそれに当たる。また、前回(1998年版)掲載種のうち、ベニシジミ、テングチョウ、サカハチチョウ、フタスジチョウ、コミスジ、サトキマダラヒカゲの6種は今回の改定によりランク外となり、掲載種から外れる結果となった。

前回、区部でAランク*であったコミスジが、今回は個体数の増加によりランク外になった。増加の理由はよく分からないが、ニセアカシアの街路樹で発生している点は興味深い。

長いスパンで振り返ると、東京都から大規模な湿地帯が無くなったことで絶滅したのではないと思われるチョウがいる。古くは、ヒメシロチョウ、ここ30年では、アサマイチモンジである。

多摩地域では、森林草地の刈取りが衰退し、奥多摩の尾根に分布していたヒメシジミが絶滅した。このように、東京都には、人間の営みの中で個体数の増減があるチョウと、奥多摩の自然林の中で発生するアイノミドリシジミ、キバネセセリのように、人間の営みにほとんど影響されないチョウが生息している。今回の掲載種50種はこれら両方に関係している。

* 1998年当時環境庁レッドデータブックの「絶滅危惧種」に相当。

(福田 晴男)

ギフチョウ ※備考 (p.570)

Luehdorfia japonica

チョウ目(鱗翅目)
アゲハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	EX	○	EX	VL

【形態・生態】

開長 50～55mm 程度で、ナミアゲハの春型よりも一回り小さい。翅表は、黒と黄色のだんだら模様で、後翅後縁角に赤色紋、外縁に沿って橙色の紋列、その内側に青色の点列がある。後翅には尾状突起がある。交尾後の♀は、♂の分泌物で作られた板状で黒色の受胎嚢を腹端に付ける。年 1 回早春に発生し、幼虫はカンアオイ類を食べる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

林床が明るくカンアオイが生育する植林地や雑木林に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1970 年代前半に東京都本土部から絶滅した。過去における東京都の生息地は、おそらく神奈川県側からの分布拡大と思われる。東京都本土部で最後まで生息が確認されていた多摩丘陵も、急速な住宅地化が絶滅に拍車をかけたと思われる。

【関連文献】

西多摩昆虫同好会(編), 1991; 白水隆, 2006.

(執筆: 福田晴男)



ウスバアゲハ

Parnassius citrinarius

チョウ目(鱗翅目)
アゲハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 60～70mm で、モンシロチョウを二回り大きくした程度である。翅表の地色は純白で、後翅内縁部が黒色である。翅全体に鱗粉が少なく、半透明である。交尾後の♀は、♂の受胎嚢を腹端に付ける。年 1 回春に発生し、幼虫はムラサキケマンなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国

【都における生息環境】

西多摩の溪流沿いの草地斜面、南多摩や西多摩の栗林や梅林などの林床に生息する。1980 年代以降、神奈川県側から多摩丘陵に分布を拡大したが、現在は住宅地化により減少傾向にある。北多摩では極めて限られた場所で発生しているものと思われるが、詳細は不明である。区部の記録は遺産と考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

栗林や梅林の林床を保全し、食草のムラサキケマンが生育する環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

福田晴男, 1990; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



オナガアゲハ

Papilio macilentus

チョウ目(鱗翅目)
アゲハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR EN	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 80mm(春型)～100mm(夏型)程度で、ナミアゲハよりやや大きい。翅表・翅裏ともに黒色で、後翅裏面には外縁に沿って 1 室から 7 室に弦月状の赤紋が並び、この赤紋は♀では表面にも明瞭に出現するが、♂では明瞭でない。クロアゲハに似るが、尾状突起が長いので区別は容易である。年 2 回春と夏に発生し、幼虫はコクサギなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地の多様な植物が生育する樹林環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林環境の減少に伴い、区部ではほとんど見られなくなった。周辺からの飛来により、一時的に発生している可能性も考えられるが、分布の詳細は不明である。

【関連文献】

白水隆, 2006; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ミヤマカラスアゲハ

Papilio maackii

チョウ目(鱗翅目)
アゲハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 100mm(春型)～120mm(夏型)程度で、ナミアゲハよりも一回り大きい。翅表は黒色の地色で、表面に青緑色の鱗粉が乗っている。♂は前翅後角部から外縁下部の内側に黒い筋(性漂)があるが、♀にはない。後翅には尾状突起がある。本種は、後翅裏面外縁の赤い弦月紋の内側に沿うように白帯が出現するが、カラスアゲハには出現しない。年2回春と夏に発生し、幼虫はキハダやカラスザンショウなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

平地から山地の多様な植物が生育する樹林環境に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多様な植物が生育する樹林環境のある南多摩などからの飛来により、区部や南多摩で一時的に発生している可能性も考えられるが、分布の詳細は不明である。

【関連文献】

白水隆, 2006; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ヒメシロチョウ

Leptidea amurensis

チョウ目(鱗翅目)
シロチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 40mm 程度で、モンシロチョウよりも一回り小さい。翅表は白色、前翅端に黒色の斑紋がある。この斑紋は♀よりも♂の方が濃い。春型は、夏型に比べ、前翅端にある黒色の斑紋の発達が弱い。春型の翅裏は、クリーム色になる。年3回春(5月前後)と夏(7月前後)と晩夏～初秋(8月中旬～9月)に発生し、幼虫はツルフジバカマなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

河川沿いの適湿な草地が主な生息地であったと思われる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1980年代に絶滅。絶滅前の奥多摩の発生地も人為分布の可能性がある。東京都本土部での生息は1940年代には高尾山麓で確認されている。おそらく1930年代頃までは、湿地のある河川沿いに生息していたものと思われる。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1960; 白水隆, 2006.

(執筆: 福田晴男)



ツマグロキチョウ

Eurema laeta

チョウ目(鱗翅目)
シロチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 30～35mm 程度で、モンシロチョウよりも一回り小さい。翅表の地色は黄色で、前翅端がとがる。特に秋型は鋭くとがる。秋型では後翅裏面には茶褐色の筋が横に入る。年数回発生し、成虫で越冬する。幼虫はカワラケツメイを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

カワラケツメイが生育する河川敷などが主な生息地であったと思われる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1990年代に入り絶滅したようである。1960年代までは、区部を含め個体数も多かった。特に秋型はかなり見られた。河川の改修で食草が減ったことも一因であろうが、詳細は不明である。

【関連文献】

白水隆, 2006; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ゴイシシジミ

Taraka hamada

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 20 ～ 25mm 程度である。翅表は黒色で、翅裏は白色の地色に黒い斑点が多数散りばめられている。♀は♂よりも翅形が丸い。年数回発生し、幼虫はタケ・ササ類に寄生するササコナフキツノアブラムシを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部において 1960 年代までは各所で見られたが、1980 年代には数ヶ所程度まで減少した。区部の詳細は不明であるが、樹林に囲まれたアズマネザサなどが生育する環境がないと生存は不可能であろう。1990 年代以降、多摩地域においても分布が分断されている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林に囲まれたアズマネザサなどが多く生育する環境が連続している場合、そのような環境全体を保全することが望ましい。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ウラゴマダラシジミ

Artopoetes pryeri

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 35 ～ 40mm 程度である。翅表は中央が青色で、幅広く黒色で縁取られる。翅裏は純白色で、中央部には黒斑がなく、外縁の内側に沿って二重の黒点が並ぶ。年 1 回初夏に発生し、幼虫はイボタやミヤマイボタなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

世田谷区において 1970 年までは生息が確認されていたが、谷戸の湿地の消滅により、1970 年代前半に絶滅した。その後同様の理由で区部から絶滅した。南多摩でも谷戸の湿地の減少で絶滅した場所がある。北多摩での生息状況は不明である。谷戸の湿地などの存在する西多摩に多くの生息地が存在している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

雑木林の隣接する谷戸や河川沿いの湿地を保全することが重要である。乾燥化が進むと絶滅すると考えられる。

【関連文献】

浜栄一ら(編), 1989; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ムモンアカシジミ

Shirozua jonasi

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	DD	DD	DD	

【形態・生態】

開長 35mm 程度である。翅表・翅裏ともに地色は橙色である。♀は地色が赤味を帯び、前翅端から前縁に沿って黒色の帯が出現する。アカシジミのように翅裏に銀白色の線は出ない。尾状突起がある。年 1 回 8 月頃に発生し、幼虫はコナラ、ミズナラ、クヌギ、アベマキなどに寄生するアブラムシやカイガラムシなどを主に食べる。共生関係にあるアリの営巣が発生の必須条件である。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

多様な植物が生育する樹林環境でわずかに記録がある。南多摩や西多摩の山地で稀に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

分布の詳細は不明であるが、多様な植物が生育する樹林環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

倉地正・栗山定(編), 2007; 福田晴男, 2012.

(執筆: 福田晴男)



アカシジミ

*Japonica lutea*チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 35mm 程度である。翅表は橙色で、前翅外縁は黒く縁取られる。翅裏も橙色で、中央部と亜外縁に銀白色の線が走る。♀は♂よりも翅形が丸味を帯びる。尾状突起がある。年 1 回初夏に発生し、幼虫はクヌギ、コナラ、ミズナラなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部の分布の詳細は不明であるが、広い緑地で散発的に記録があるので細々と生息しているものと思われる。自然環境が残る多摩地域では、コナラのある雑木林で多く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

コナラを含む雑木林の連続性を保つことが重要である。区部では、多様な植物が生育する広い緑地や屋敷林の保全を図ることが望ましい。

【関連文献】

久居宣夫ら, 2006; 杉並区環境清掃部環境課 (編), 2008.

(執筆: 福田晴男)



ウラミアカシジミ

*Japonica saepestrata*チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR EN	*	○	○	○	

【形態・生態】

開長 35 ~ 40mm 程度である。地色は翅表・翅裏共橙色である。翅裏には、黒色の縞模様があるので、アカシジミやムモンアカシジミとはすぐ区別できる。尾状突起がある。年 1 回初夏に発生し、幼虫はクヌギ、コナラ、ミズナラなどを食べるが、特にクヌギを好む。

【分布の概要】

北海道、本州、四国

【都における生息環境】

区部の最近の記録が 2005 年に 1 例ある。クヌギの残存する大きな公園や屋敷林などに細々と生息している可能性がある。北多摩では、植生が多様な地域に一部生息しているが、北多摩の大部分では、その詳細が不明である。環境変化で絶滅が危惧される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

クヌギ林の存在する樹林を保全することが重要である。クヌギのひこばえが多く出るような管理を行うことで個体数の増加が図れると考えられる。

【関連文献】

久居宣夫ら, 2006; 倉地正・栗山定 (編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ミズイロオナガシジミ

*Antigius attilia*チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
*	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 25 ~ 30mm 程度で、アカシジミより一回り小さい。翅表はやや褐色がかった黒色で、後翅外縁に沿って灰白色の斑紋が出現する。翅裏は白色で、中央に黒色の帯が走る。尾状突起がある。年 1 回初夏に発生し、幼虫はクヌギ、コナラ、ミズナラなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部においてもクヌギが数本あれば生息している可能性が高い。クヌギやコナラのある大きな公園には生息していることが多い。区部ではクヌギやコナラを伐採することで絶滅危惧種になるおそれがある。多摩地域では多く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

クヌギやコナラのある雑木林を含めた樹林の保全が重要である。区部においては広い緑地に存在するクヌギやコナラ、その周囲の草地を保全することが望ましい。

【関連文献】

久居宣夫ら, 2006; 杉並区環境清掃部環境課 (編), 2008.

(執筆: 福田晴男)



ウスイロオナガシジミ

Antigius butleri

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	VU	CR EN	VU	

【形態・生態】

開長 25 ～ 30mm 程度で、アカシジミより一回り小さい。翅表は茶褐色で、後翅外縁とその内側に沿って灰白色の斑紋が出現する。ミズイロオナガシジミよりも灰白色の紋の広がりが大きい。翅裏は茶色味を帯びた白色の地色に、やや大きめの褐色斑点が散りばめられている。尾状突起がある。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はカシワやミズナラなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

南多摩のカシワ林でわずかに発生しているが、分布の詳細は不明である。最近の西多摩の分布状況は不明で、絶滅が危惧される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

南多摩の山林に存在するカシワ林と林床の草地の保全が重要である。

【関連文献】

田中剛, 1991; 倉地正・栗山定(編), 2007.



(執筆: 福田晴男)

ウラミスジシジミ

Wagimo signatus

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	DD	CR EN	DD	

【形態・生態】

開長 30 ～ 35mm 程度である。翅表は黒色で、基部から中央にかけて青紫色の斑紋が広がる。翅裏の地色は橙色で、銀色の帯が縦に走り、尾条突起がある。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はカシワやコナラ、ミズナラなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

多様な植物が生育する南多摩の山地でわずかに記録がある。西多摩においては最近記録がないので、絶滅した可能性も考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

山頂から山腹にかけてのカシワ林などと林床の草地の保全が重要である。

【関連文献】

西多摩昆虫同好会(編), 1991; 倉地正・栗山定(編), 2007.



(執筆: 福田晴男)

ハヤシミドリシジミ

Favonius ultramarinus

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	VU	VU	VU	

【形態・生態】

開長 35 ～ 40mm 程度である。♂の翅表は青色を帯びた緑色である。♀の翅表は褐色味を帯びた黒色で、前翅中室外側に灰白斑が出現する。その灰白斑はしばしば橙や青の金属斑を伴う。翅裏の地色は灰色で、前後翅ともに垂外縁の基部側に白帯が縦に走るが、白帯の基部側の黒い縁取りは明瞭でない。尾状突起の長さは短く 2.5mm 位である。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はカシワを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

多様な植物が生育する南多摩や西多摩の山地のカシワ林に生息するが個体数は少ない。カシワ林の衰退で絶滅する可能性も考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

主に山頂付近のカシワ林と林床の草地の保全が重要である。

【関連文献】

田中剛, 1991; 倉地正・栗山定(編), 2007.



(執筆: 福田晴男)

オオミドリシジミ

Favonius orientalis

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 35mm 程度である。尾状突起は長く 5mm 位ある。♂の翅表は薄青色を帯びた緑色である。♀の翅表は褐色味を帯びた黒色で、前翅中室外側に灰白斑が出現する。翅裏の地色は灰白色で、前後翅ともに白帯が縦に走り、白帯の基部側の黒い縁取りは明瞭である。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はコナラやカシワ、ミズナラなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部の分布の詳細は不明であるが、広い緑地で散発的に記録があるので細々と生息しているものと思われる。自然環境が残る多摩地域では、コナラのある雑木林で多く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

コナラが生育する雑木林の連続性を保つことが重要である。区部では、多様な植物が生育する広い緑地や屋敷林の保全を図ることが望ましい。

【関連文献】

福田晴男, 1995; 福田晴男, 1997.

(執筆: 福田晴男)



ジョウザンミドリシジミ

Favonius taxila

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
□	□	□	CR EN	CR EN	

【形態・生態】

開長 35mm 程度である。尾状突起はやや長く 4mm 位ある。♂の翅表は青色を帯びた緑色である。♀の翅表は褐色味を帯びた黒色で、前翅中室外側に灰白斑が出現する。翅裏の地色は褐色味を帯びた灰色で、前後翅ともに垂外縁の基部側に白帯が縦に走り、白帯の基部側の黒い縁取りは明瞭である。尾状突起がある。年 1 回夏に発生し、幼虫は主にミズナラを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

自然環境が残る西多摩において、1972 年に記録されて以来、確認されていないが、本種の分布生態などを勘案すると生息している可能性が高い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多様な植物が生育する樹林環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

西多摩昆虫同好会(編), 1991; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ミドリシジミ

Neozephyrus japonicus

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
DD	*	*	*	*	

【形態・生態】

開長 30 ~ 35mm 程度である。♂の翅表は緑色で、幅広く黒色で縁取られる。♀の翅表は黒褐色で、前翅中室周辺に赤斑(A型)、青斑(B型)、斑無し(O型)、赤青斑(AB型)が出現する。尾状突起がある。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はハンノキなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部東部のハンノキ林で発生している。区部西部でも最近再確認されたが、過去からその生息域がつながっていたかどうかは不明。多摩地域においても湿地のハンノキ林に生息しているが、分布域はかなり減少しているものと思われる。

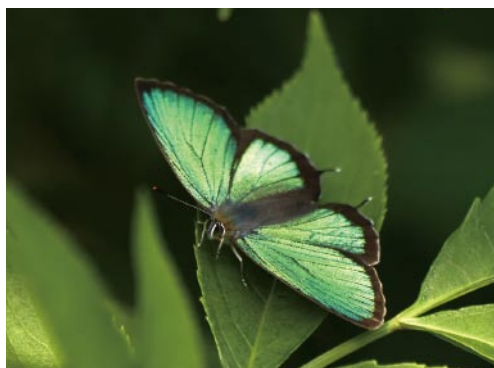
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

谷戸などの湿地に自生するハンノキ林と周辺の草地の保全が重要であり、分断されると絶滅するおそれが生じる。広範囲に湿地保全を図ることが望ましい。

【関連文献】

森本峻, 2005; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



アイノミドリシジミ

Chrysozephyrus brilliantinus

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	CR EN	DD	DD	

【形態・生態】

開長 35～40mm 程度で、尾状突起は 3mm 位である。♂の翅表は強い光沢をもった黄緑色で、前後翅共幅広く黒色で縁取られる。♀の翅表は黒褐色で、前翅中室周辺に赤斑(A型)、青斑(B型)、斑無し(O型)、赤青斑(AB型)が出現する。翅裏の地色は暗褐色で、後翅中央の白帯は細く、内側の黒い縁取りはほとんど認められない。尾状突起がある。年1回夏に発生し、幼虫は主にミズナラを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

自然環境の残る西多摩でわずかに記録があるので、生息しているものと思われる。南多摩は 1960 年代以降記録がなく、絶滅した可能性が高い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多様な植物が生育する樹林環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

西多摩昆虫同好会(編), 1991; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



カラスシジミ

Fixsenia w-album

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	NT	DD	NT	

【形態・生態】

開長 30mm 程度である。翅表は黒色で、♂には前翅に光沢のない性標があるが、♀にはない。翅裏は暗い茶褐色に地色で、前後翅ともに白色の線が縦に走る。尾状突起がある。年1回初夏から夏に発生し、幼虫はハルニレ、コブニレ、ズミ、サクラ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

南多摩において、ハルニレのある雑木林の林縁環境にわずかに生息している。西多摩の詳細は不明であるが極めて少ないと思われる。南多摩の一部で、雷の直撃を受け、ハルニレが枯れたため絶滅した産地もある。

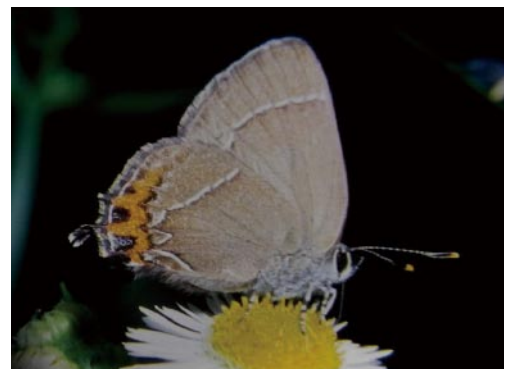
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川や雑木林沿いに自生するハルニレの保全が重要である。

【関連文献】

白水隆, 2006; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



コツバメ

Callophrys ferrea

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 25mm 程度である。翅表は淡い黒の地色に青色の斑紋がかぶさっている。♀は♂よりも青色部分の面積が広く、色彩の光沢も強く、翅の形も丸味を持つ。♂は前翅に性標を持つ。年1回早春に発生し、幼虫はガマズミ、ヤマツツジ、アセビ、ネジキ、ウワミズザクラ、ユキヤナギなど多くの植物の花、蕾、実などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部では、おそらく 1950 年代に絶滅したものと思われる。西多摩には普通に見られるが、南多摩でも都市部に近い地域は少ないと思われる。北多摩ではわずかに記録があるのみであるが、多様な植物が生育する雑木林周辺で発生している可能性が高い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

北多摩においては、多様な植物が生育する広い面積の樹林環境の保全が重要である。

【関連文献】

倉地正・栗山定(編), 2007; 鎌倉正人, 2009.

(執筆: 福田晴男)



クロシジミ

Niphanda fusca

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 35～40mm 程度である。♂の翅表は、にぶい光沢をもった紫色で、黒色で縁取られている。♀の翅表は黒褐色で黒い縁取りはない。裏面は薄い褐色の地色に濃褐色の斑紋が出現する。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫は最初アブラムシやキジラミの甘露をなめて成長するが、3 齢になるとクロオオアリの巣に運ばれて育てられる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

明るい疎林的な環境に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930 年代には世田谷区で記録があるが、区部においては、おそらく 1940 年代に絶滅した可能性が高い。1950 年代には多摩地域で数多く見られたが、1990 年代の北多摩を最後に東京都本土部から絶滅した。雑木林の管理放棄などにより絶滅したと考えられる。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



シルビアシジミ

Zizina otis

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 20～25mm 程度である。♂の翅表は青藍色で、幅広く黒色で縁取られる。♀の翅表は黒色で、春や秋の個体は黒色の中に青色部が発達する。裏面の地色は夏型は白色に近く、春型や秋型は灰色や暗灰色になる。ヤマトシジミに似るが、裏面前翅中室内～基部の方に黒点がヤマトシジミには存在するが、本種には存在しない。年数回発生し、幼虫はミヤコグサを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

荒川や多摩川の河川敷に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代には、区部の荒川河川敷や南多摩の多摩川河川敷に生息していたが、1960 年代に東京都本土部から絶滅した。河川改修などにより食草であるミヤコグサが減少したことが主な絶滅原因であると考えられるが、詳細は不明である。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1961; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ヒメシジミ

Plebejus argus

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
□	□	□	EX	EX	NT

【形態・生態】

開長 30mm 程度である。♂の翅表は紫藍色か青藍色で、幅広く黒色で縁取られる。♀の翅表は暗褐色である。翅裏の地色は灰白色で、前後翅表・裏面の垂外縁に沿って橙斑が並ぶが、前翅表垂外縁の橙斑は出ない個体もある。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はマアザミ、タイアザミ、ヨモギなどのキク科、タイツリオウギ、イワオウギ、クサフジなどのマメ科、イタドリ、チダケサシ、ヤナギ類など多くの植物を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、九州

【都における生息環境】

山梨県側と連続している西多摩の山地の尾根部に分布が確認されていた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1980 年代を最後に東京都本土部から絶滅した。定期的な草原の手入れが失われたため、草丈が長くなったことや、隣接する生息地での衰退が原因と考えられる。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1961; 松原豊, 1984.

(執筆: 福田晴男)



アサマシジミ

Lycaeides subsolanus

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	EX	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 30～35mm 程度で、ヒメシジミよりも一回り大きい。♂の翅表は明るい青色か青藍色であるが、青色鱗の発達が悪い場合は、黒褐色の地色に青色鱗が乗るような状態になる。外縁に沿って黒い縁取りがある。♀の翅表は暗褐色である。翅裏は、地色が白色か灰白色である。前後翅表・裏面の垂外縁に沿って橙斑が並ぶ。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はナンテンハギを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

山頂部の草原に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代までは南多摩の山地の尾根部に分布が確認されていたが、1970 年代を最後に東京都本土部から絶滅した。山頂部の草原は現在も存在するが、隣接する山梨県や埼玉県での衰退と呼応するように絶滅した。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1961; 西多摩昆虫同好会 (編), 1991.

(執筆: 福田晴男)



ミヤマシジミ

Lycaeides argyrognomon

チョウ目(鱗翅目)
シジミチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 30mm 程度である。♂の翅表は藍紫色で、前翅外縁の黒い縁取りは細いが、後翅は黒い縁取りと内側の黒点がつながる傾向がある。♀の翅表は、黒褐色である。翅裏は、褐色味のある灰白色である。前後翅表・裏面の垂外縁に沿って橙斑が並ぶが、前翅表垂外縁の橙斑は出ない個体もある。年数回発生し、幼虫はコマツナギを食べる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

多摩川の河川敷に生息していた。

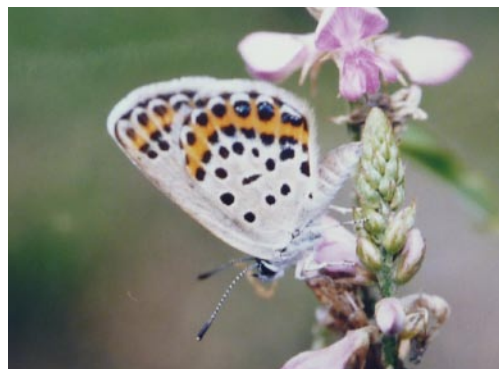
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1950 年代には、南多摩の多摩川河川敷に生息していたが、1960 年代に東京都本土部から絶滅した。河川改修などにより食草であるコマツナギが減少したことが主な絶滅原因であると考えられるが、詳細は不明である。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1961; 西多摩昆虫同好会 (編), 1991.

(執筆: 福田晴男)



ヒオドシチョウ

Nymphalis xanthomelas

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 60～80mm 程度である。翅表は、赤味を帯びた橙色の地色の中に黒色の斑紋があり、後翅垂外縁部には青色の点筋が出現する。翅裏は、基部側が茶褐色で外側が薄い黄褐色で翅表に対応するよう青色の点筋がぼやけて出現する。年 1 回初夏に発生し、そのまま成虫で越冬する。幼虫はエノキやハルニレ、ヤナギ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部における記録は 1990 年代にわずかにある。現在でも一時的に発生する可能性は考えられる。北多摩では、植生の多様な地域に生息している。山地帯のある多摩地域では割合普通に見られる。

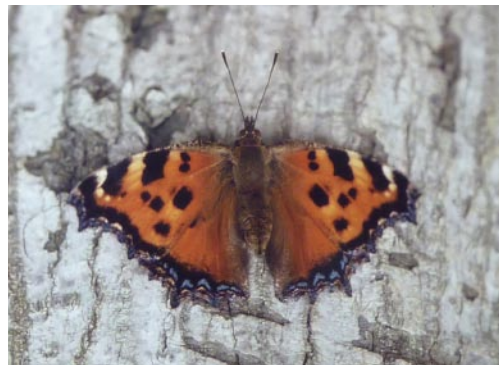
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

北多摩では、管理の行き届いた雑木林と草地、河川沿いの樹林を一体的に保全することが重要である。多摩地域の山地帯は、現状を維持することが望まれる。

【関連文献】

真中二郎, 1995; 倉地正・栗山定 (編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ウラギンスジヒョウモン

*Argyronome laodice*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	CR EN	CR EN	CR EN	VU

【形態・生態】

開長 50 ～ 70mm 程度である。♂の翅表は、明るい橙色の地色に黒い斑紋が乗っている。後翅裏面は、基部側が淡い黄緑色で、外縁側が薄い茶褐色で、基部側と外縁側の境に白点が並んでいる。♀は、前翅端部付近に白い斑紋が出る。オオウラギンスジヒョウモンに似るが、前翅端が外側に広がらない。年1回初夏から夏に発生し、幼虫はスミレ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

1960年代までは山地の草原でよく見られた。しかし、現在では西多摩でわずかに記録があるくらいで、南多摩を含め絶滅の危機に瀕している。区部と北多摩は絶滅したものと考えられる。

【都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

山地草原と渓谷など河川周辺の湿地との連結が重要ではないかと考えられるが、そのような環境を復活させることは難しい。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1962; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



オオウラギンスジヒョウモン

*Argyronome ruslana*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 55 ～ 75mm 程度である。♂の翅表は、濃橙色の地色に黒い斑紋が乗っている。♀は、前翅端部付近に白い斑紋が出る。ウラギンスジヒョウモンに似るが、前翅端が外側に広がる。年1回初夏から夏に発生し、幼虫はスミレ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

秋口に、山地から南多摩や区部への飛来が見られる。西多摩の山地草原には多く見られ、南多摩でも生息している可能性が高い。北多摩でも植生の多様な地域で2000年代に見られたことがある。

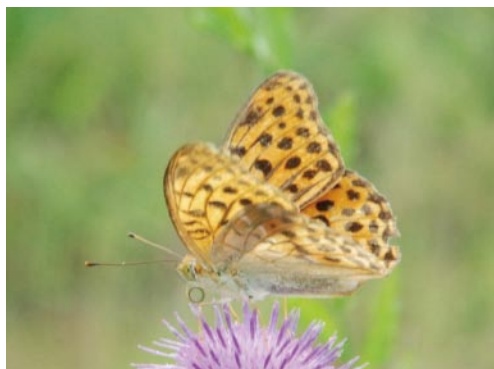
【都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

広範囲にわたる雑木林と草地環境の保全が重要と考えられる。山地帯の草地を含めた多様な植生を維持することが良いと思われる。

【関連文献】

福田晴男, 1994; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



クモガタヒョウモン

*Nephargynnis anadyomene*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 65 ～ 75mm 程度である。♂の翅表は、明るい橙色の地色に黒い斑紋が乗っている。♀の翅表は、暗橙色である。後翅裏面は、橙緑色で斑紋は雲形のようにはっきりしない。♀は、前翅端部付近に白い斑紋が出る。年1回春から初夏に発生し、幼虫はスミレ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地帯のある多摩地域に生息するが、稀に丘陵地で秋口に発見されることがある。2000年代に多様な植物が生育する北多摩で発見され、絶滅と考えられた区部でも1例記録されている。区部の記録は多摩地域からの飛来であり、生息はしていないものと考えられる。

【都における生存に対する脅威と保全上の留意点】

広範囲にわたる雑木林と草地環境の保全が重要と考えられる。山地帯の草地を含めた多様な植生を維持することが望まれる。

【関連文献】

杉並区環境清掃部環境課(編), 2003; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



メスグロヒョウモン

Damora sagana

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 65～75mm 程度である。♂の翅表は、明るい橙色の地色に黒い斑紋が乗っている。メスグロと呼ばれるように、♀の翅表は、一見黒い。よく見ると、暗褐色で青藍色の光沢を帯び、前翅に数個の白斑、後翅中央には太い白帯がある。翅裏は、色彩こそ違いますが斑紋の形は♂♀共通している。♂は薄い橙色、♀は黄緑色が地色である。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はスミレ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

疎林的な環境の残された多摩地域に多く、山地帯に入ると個体数が少なくなるようである。区部では 1960 年代以降、ほとんど記録されていない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

疎林的な環境を保全することが重要である。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



ウラギンヒョウモン

Fabriciana adippe

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR EN	CR EN	CR EN	DD	DD	

【形態・生態】

開長 60～70mm 程度である。♂の翅表は、明るい橙色の地色に黒い斑紋が乗っている。翅裏は、名前のとおり後翅に銀の斑紋がちりばめられている。♀は、翅裏の銀紋の濃淡がはっきりしている。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はスミレ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

1960 年代までは多摩地域の山地草原に多く見られた。現在では維持管理の行き届いた南多摩の山頂草原で少ないながら見ることができ、西多摩においても少なくなっている。極めて稀に区部や北多摩で発見されることがあるが、当地で発生したものか、遠方からの飛来か不明である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

山地の渓谷周辺の湿地草原、河川沿いの氾濫原の草原が減少したため、本種が衰退したものと考えられる。湿地の保全が重要である。

【関連文献】

倉地正・栗山定(編), 2007; 杉並区環境清掃部環境課(編), 2008.

(執筆: 福田晴男)



オオウラギンヒョウモン

Fabriciana nerippe

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	CR

【形態・生態】

開長 65～80mm 程度である。ウラギンヒョウモンを一回り大きくしたヒョウモンで、後翅亜外縁の筋がウラギンヒョウモンでは U の逆さま型になるのに本種は M 型になるので区別できる。♂の翅表は、明るい橙色の地色に黒い斑紋が乗っている。翅裏は、名前のとおり後翅に銀の斑紋がちりばめられている。♀は、翅裏の銀紋の濃淡がはっきりしている。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はスミレ類を食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

各地の草原に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1930 年代には世田谷区の草原で多産したときもあった。1960 年代の西多摩の記録を最後に東京都本土部から絶滅した。草地の減少が絶滅原因の一つとして考えられるが、真の理由は不明である。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



© 東京大学総合研究博物館

ミスジチョウ

*Neptis philyra*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EX	DD	○	○	○	

【形態・生態】

開長 60～70mm 程度である。翅表は黒色の地色に白い筋や斑紋を持つ。前翅に 1 本、後翅に 2 本、計 3 本の筋があることからミスジの名前が付いている。前翅基部から中室にかけての白い筋は滑らかで途切れることがない。♀の翅形はやや丸い。年 1 回春から夏に発生し、幼虫はカエデ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

1950 年代までは区部でしばしば発見された。おそらく区部では 1960 年代以降絶滅し、多摩地域の方へ後退したものと思われる。北多摩は記録が少ないが、南多摩、西多摩にはカエデ類が多く林道などによく飛来する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

北多摩や南多摩においては、カエデ類のある多様な植物が生育する雑木林や河川沿いの空間を維持していくことが重要である。西多摩は現在の状態の維持が望まれる。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1962; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



オオミスジ

*Neptis alwina*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
EX	EX	EX	DD	DD	

【形態・生態】

開長 60～70mm 程度である。翅表は黒色の地色に白い筋や斑紋を持つ。前翅基部から中室にかけての白い筋は中室側にノコギリ状のギザギザが入るのでミスジチョウとは区別がつく。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はウメ、スモモ、アンズなどのバラ科を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

1930 年代～1950 年代にかけて世田谷区で記録されており、区部にもわずかながら生息していたものと思われる。1970 年代以降、西多摩以外は全く記録がなくなったが、おそらく山地帯からの生息域が分断されたため絶滅したのであろう。最近、西多摩の丘陵地の管理放棄された梅林で確認されているが、山地帯からの飛来による一時発生の可能性もある。

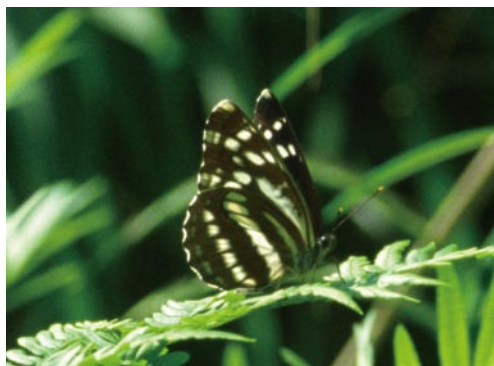
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西多摩では、管理放棄された梅林を可能な限り残すことが重要と考えられる。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 佐久間聡, 2010.

(執筆: 福田晴男)



ホシミスジ

*Neptis pryri*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
○	—	VU	○	○	

【形態・生態】

開長 50mm 程度である。前翅基部から中室にかけての白い筋は 5 分割されるので他種と区別できる。また、翅裏の基部付近に星状黒斑があることからホシミスジと名付けられた。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はユキヤナギ、シモツケ、イワシモツケなどを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

西多摩のイワシモツケ個体群と、山地や丘陵地のシモツケ個体群とが生息しており、前者は安定、後者は近い将来絶滅する可能性が高い。現在、南多摩において、シモツケからユキヤナギに食草転換した個体群の一部が、かろうじて生息している。

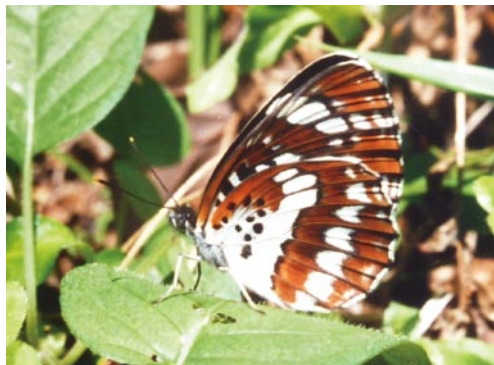
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

南多摩では、間伐や下草刈りなど尾根筋や谷戸斜面の林床を明るくする管理を継続し、雑木林内や隣接地域にユキヤナギを植栽することにより、個体数の増加が期待される。

【関連文献】

鎌倉正人, 1983; 福田晴男, 2010.

(執筆: 福田晴男)



イチモンジチョウ

Ladoga camilla

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 50～60mm 程度である。翅表は、黒色の地色に白い帯模様が前後翅の中央をつらぬく。翅裏の地色は赤褐色で、黒点が散りばめられている。後翅裏面亜外縁の 2、3、4 室(特に 3 室)の白斑が基部側に広がるのが本種で、広がらないのがアサマイチモンジである。年 2～3 回発生し、幼虫はスイカズラやタニウツギなどのスイカズラ科を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

1960 年代までは、区部でも比較的多く見られたが、以後激減し、現在はでは河川沿いの広い緑地にわずかに見られる程度となった。植生の多様な多摩地域では普通に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川沿いの雑木林周辺の緑地の保全が重要である。多摩地域は、現状を維持することが望まれる。

【関連文献】

東京都杉並区立高円寺中学校生物部, 1962; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



アサマイチモンジ

Ladoga glorifica

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	

【形態・生態】

開長 50～60mm 程度である。翅表は、黒色の地色に白い帯模様が前後翅の中央をつらぬく。後翅裏面亜外縁の 2、3、4 室(特に 3 室)の白斑が基部側に広がらない。年 2～3 回発生し、幼虫はスイカズラやタニウツギなどを食べる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

河川の氾濫原や水田脇の湿地と隣接する明るい疎林の多かった 1960 年代には、区部にも分布していた。湿地の急速な減少により、1980 年代になると東京都本土部から一斉に姿を消した。最近、北多摩でスイカズラに産卵する記録が出ているが、人為分布の可能性も考えられる。

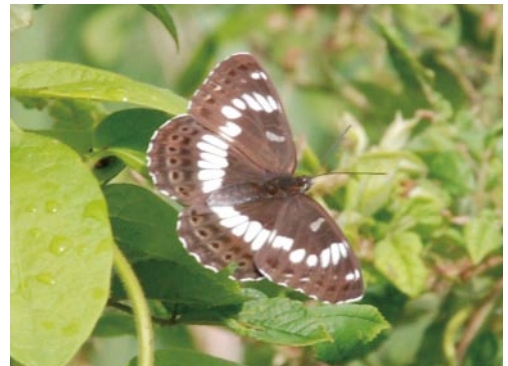
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

氾濫原や湿地と隣接する明るい疎林の保全と食草のスイカズラなどを刈らないことが重要である。南多摩の一部にそのような環境が現存するが、発生地から離れており、本種の飛来は困難である。

【関連文献】

倉地正・栗山定(編), 2007; 大橋田鶴子, 2010.

(執筆: 福田晴男)



コムラサキ

Apatura metis

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
*	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 55～65mm 程度である。♂の翅表の地色は黒褐色で、橙色の帯模様が入る。光を斜めに当てて見ると強く青紫色に輝く。♀は青紫色に光らない。年 3 回程度発生し、幼虫はヤナギ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

ヤナギ類のある河川沿いや溪流沿いに生息する。世田谷区では、1930 年代に見られ、他の区でも 1950 年代頃までは比較的良く発見されたが、1970 年代に入ると、葛飾区を除いて区部からは発見されなくなった。同じく多摩地域においても個体数が激減した。しかし、2000 年代に入ると、環境は変化していないのに、区部を含め多摩地域でも個体数が増加し始めている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

溪流沿いや河川沿いのヤナギ類と隣接地域の草地の保全が重要である。

【関連文献】

倉地正・栗山定(編), 2007; 杉並区環境清掃部環境課(編), 2008.

(執筆: 福田晴男)



オオムラサキ

*Sasakia charonda*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	DD	○	○	○	NT

【形態・生態】

開長 85 ～ 100mm 程度で、日本の国蝶である。♂の翅表は前後翅共、基部から中央にかけて全面が濃い紫色で、その外側を幅広く黒褐色で囲む。♀は濃い紫色の部分が黒褐色になる。年 1 回発生し、幼虫はエノキやエゾエノキを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

1930 年代に区部で稀になり、多くの個体が見られた世田谷区では 1960 年代前半に絶滅したようである。宅地化などにより多摩地域でも急激に個体数が減少したが、一度絶滅した場所において、1980 年代以降復活している場所があり、自然発生かどうか検討する必要がある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

広い範囲の雑木林と食樹のエノキの保全、クヌギなどの樹液の出る木の確保、それに加えて谷戸や河川沿いなど湿地環境との共存が重要である。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



コジャノメ

*Mycalesis francisca*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 40 ～ 45mm 程度である。翅表の地色は黒褐色で、翅裏は基半部が黒褐色で、外半部は青白味を持ち、目玉模様が並んでいる。♂には前翅表面 1 脈上に黒色の性斑、後翅表面基部付近には白い長毛の束がある。年 2 回発生し、幼虫はチヂミザサ、ススキ、ミチシバ、イヌビエ、タケ類、ササ類などのイネ科を食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部における正確な記録は少ないが、照葉樹の多い場所に生息していると考えられる。他の地域は照葉樹帯の林床部を中心に普通に生息している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部においては、照葉樹の多い公園緑地などを林床の草地と一緒に保全することが重要である。

【関連文献】

倉地正・栗山定(編), 2007; 杉並区環境清掃部環境課(編), 2008.

(執筆: 福田晴男)



ジャノメチョウ

*Minois dryas*チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 50 ～ 60mm 程度である。♂の翅表は黒褐色で、通常前翅に 2 個、後翅に 1 個の目玉模様がある。翅裏は、地色が茶褐色で、全体に細かい縞模様がある。♀は♂よりも一回り大型で、翅形が丸く、表裏共地色が薄い。年 1 回夏に発生し、幼虫はススキ、スズメノカタビラなどのイネ科やヒカゲスゲなどのカヤツリグサ科を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

山地や丘陵地、河川沿いなどの雑木林周辺のススキ草地に生息する。区部は 1990 年代に絶滅したと考えられるが、2000 年代に 1 例記録がある。区部の記録は人為分布の可能性も考えられるが詳細は不明である。他地域は普通に生息しているが、宅地化の進んだ地域は減少している。

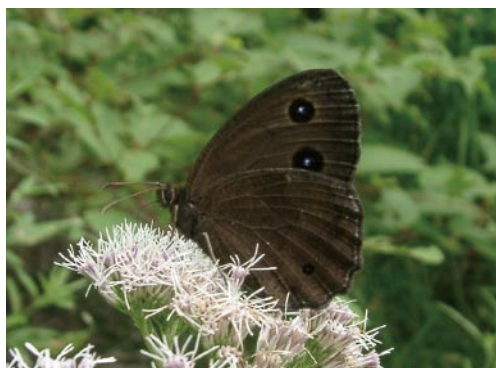
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川沿いの雑木林と隣接しているススキ草地の保全が重要である。山地草原は適度な草刈りが重要と考えられる。

【関連文献】

倉地正・栗山定(編), 2007; 杉並区環境清掃部環境課(編), 2008.

(執筆: 福田晴男)



ヒメキマダラヒカゲ

Zophoessa callipteris

チョウ目(鱗翅目)
タテハチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	DD	○	○	

【形態・生態】

開長 50mm 程度である。翅表は、茶褐色と黄褐色の斑紋で、翅裏も翅表とほぼ同様であるが、色彩が薄い。♂は前翅表面の 1、2、3 脈に性斑があるが、♀にはない。年 1 回夏に発生し、幼虫はクマザサ、チシマザサ、イブキザサ、スズタケなどのタケ・ササ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

1950 年代には南多摩の山地で記録があるが、現在は詳細が不明である。西多摩の標高 900m ～ 1000m 以上のクマザサの生育する山間部には多い。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ササ類が生育する樹林環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

青梅市郷土博物館 (編), 1982; 倉地正・栗山定 (編), 2007.



(執筆者 : 福田晴男)

キバネセセリ

Burara aquilina

チョウ目(鱗翅目)
セセリチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	○	VU	VU	

【形態・生態】

開長 35 ～ 40mm 程度である。翅表、翅裏共地色は茶褐色で、♂は紋がないが、♀は前翅に黄色の紋が出る。年 1 回夏に発生し、幼虫はハリギリを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

西多摩のみに生息するが、極めて稀で、絶滅する可能性も考えられる。多様な植物が生育する樹林や溪流沿いで発見される。最近では溪流沿いで記録が出ている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多様な植物が生育する樹林環境を維持することが望ましい。

【関連文献】

倉地正・栗山定 (編), 2007; 八木下潤, 2009.



(執筆者 : 福田晴男)

ミヤマセセリ

Erynnis montanus

チョウ目(鱗翅目)
セセリチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	*	○	○	○	

【形態・生態】

開長 30 ～ 35mm 程度である。翅表の地色は黒褐色で、前翅には青白色の斑紋があり、後翅には黄色の斑点がある。翅裏は翅表とほぼ同じである。♀は、前翅表面の中央に白帯が広く、前翅裏面は黄色が発達する。年 1 回早春に発生し、幼虫はコナラ、クヌギ、ミズナラ、カシワなどのブナ科を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

コナラやクヌギなどの雑木林のある環境に生息する。区部では、1960 年代に絶滅したものと思われる。北多摩においては多様な植物が生育する地域に生息するが、分布域が狭められている。丘陵地から山地帯の多い南多摩、西多摩には普通に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

北多摩においては、コナラやクヌギのある雑木林や周辺の草地の保全が重要である。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定 (編), 2007.



(執筆者 : 福田晴男)

ホソバセセリ

Isoteinon lamprosilus

チョウ目(鱗翅目)
セセリチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	DD	*	*	*	

【形態・生態】

開長 30～35mm 程度である。翅表は、黒色の地色で、前翅に白斑がある。翅裏は、前翅上半分と後翅が褐色味を帯びた黄色で、後翅にも白斑が散りばめられる。年 1 回初夏から夏に発生し、幼虫はススキ、アズマネザサ、チガヤなどを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

雑木林とススキなどの草地が接する疎林的環境に生息する。1950 年代頃までは、区部で稀に記録されていたが、1970 年代から 1980 年代で絶滅したようである。南多摩や西多摩では山地帯よりも丘陵地に生息地が多いと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

雑木林とススキなどの草地の接する疎林的環境の保全が重要である。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定(編), 2007.



(執筆: 福田晴男)

ホシチャバネセセリ

Aeromachus inachus

チョウ目(鱗翅目)
セセリチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
□	□	□	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 20mm 程度である。翅表の地色は、褐色味を帯びた黒色で、前翅には細かい白点列がある。翅裏は、黄色味を帯びた褐色が黒色に混じっている。後翅にも白点列がある。日本のセセリチョウで最小の大きさである。低地から低山地では年 2 回、高地帯では年 1 回発生し、幼虫はオオアブラススキを食べる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

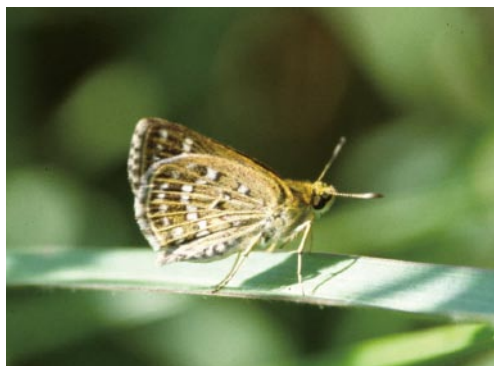
多様な植物が生育する疎林を含む草原に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西多摩の山地草原において 1960 年代に記録があるが、それ以後記録がなく、隣接県でも激減しているため、東京都本土部から絶滅したものと考えられる。草地環境の減少が主な絶滅原因として考えられる。

【関連文献】

西多摩昆虫同好会(編), 1991; 白水隆, 2006.



(執筆: 福田晴男)

ヒメキマダラセセリ

Ochlodes ochraceus

チョウ目(鱗翅目)
セセリチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
DD	○	○	○	○	

【形態・生態】

開長 25mm 程度である。♂の翅表は、赤味の強い橙黄色で、広く黒色で縁取られ、前翅中央に黒色の性標が線条に走る。♀の翅表は、基半部が黒色になるため、橙黄色が帯状になり、白色味が強い。翅裏の地色は橙黄色である。年 2 回発生し、幼虫はヤマカモジグサ、ススキ、チヂミザサ、アズマネザサ、ナルコスゲ、テキリスゲ、ヒカゲスゲなどを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部で稀に記録されるが、多摩地域からの一時発生の可能性もある。雑木林と林縁の草地環境に生息する。北多摩では限られた場所に生息するが、南多摩、西多摩の丘陵地や山地には普通である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

雑木林と林縁の草地環境を保全することが重要である。

【関連文献】

福田晴男, 1981; 倉地正・栗山定(編), 2007.



(執筆: 福田晴男)

コキマダラセセリ

Ochlodes venatus

チョウ目(鱗翅目)
セセリチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	EX	DD	DD	

【形態・生態】

開長 30mm 程度である。♂の翅表の地色は橙黄色で、翅裏は明るい橙色をしている。♂では翅表の橙色が発達し、前翅の中央に黒色の性斑が線条に走る。♀では、翅表の橙色が減退し、斑紋列になる。年 1 回夏に発生し、幼虫はススキ、オオアブラススキ、ヒメノガリヤス、イワノガリヤス、カモジグサ、ミヤコザサなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州

【都における生息環境】

山地のススキなどの生育する草原に生息する。1980 年代に南多摩で記録があるが、絶滅したものと思われる。確実に生息しているのは西多摩の山地草原であるが、最近記録がない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

山地草原の維持が重要である。

【関連文献】

西多摩昆虫同好会(編), 1991; 倉地正・栗山定(編), 2007.

(執筆: 福田晴男)



アカセセリ

Hesperia florinda

チョウ目(鱗翅目)
セセリチョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	○	○	EX	EX	EN

【形態・生態】

開長 28mm 程度で、コキマダラセセリより少し小さい。♂♀共コキマダラセセリに似るが、以下の点で区別できる。♂♀共、前翅の前縁が内側に反り、前翅の形が細い。♂♀共、緑色味を帯びる。翅表の橙黄色も本種の方が暗い。年 1 回夏に発生し、幼虫はヒカゲスゲを食べる。

【分布の概要】

本州

【都における生息環境】

山地の草原に生息していた。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1960 年代に西多摩で記録があるが、その後全く記録されていない。東京都本土部から絶滅したものと考えられる。なお、絶滅した原因については不明である。

【関連文献】

西多摩昆虫同好会(編), 1991; 白水隆, 2006.

(執筆: 福田晴男)



【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、白水隆，2006. 日本産蝶類標準図鑑．学習研究社．に準拠した。

【備考】

和名	備考
ギフチョウ	1970 年代前半で絶滅し、その後の記録は他産地の飼育個体由来のものと考えられる。

【留意種とした理由】

和名	地域区分	留意種とした理由
ウラナミアカシジミ	北多摩	クヌギ林に生息しているが、宅地開発などによりクヌギ林が減少し、絶滅危惧種になる可能性があるため。
ミズイロオナガシジミ	区部	公園などのクヌギの減少により、絶滅危惧種になる可能性があるため。
ミドリシジミ	北多摩	湿地のハンノキ林に生息しているが、宅地開発などにより湿地が減少し、絶滅危惧種になる可能性が高いため。
	南多摩	
	西多摩	
	本土部	
コムラサキ	区部	ヤナギのある良好な水辺環境を指標する種であり、このような環境は区部では残存的であることから生息地が限定されるため。
ミヤマセセリ	北多摩	クヌギを含めた雑木林に生息しているが、宅地開発などによりクヌギ林を含めた雑木林が減少し、絶滅危惧種になる可能性があるため。
ホソバセセリ	南多摩	疎林草原の減少により、絶滅危惧種になる可能性があるため。
	西多摩	
	本土部	

【関連文献】

- 福田晴男，1981. 世田谷の蝶．自刊．120 pp. + 38 pls.
- 福田晴男，1990. 多摩丘陵西部のウスバシロチョウ 第 1 報 1990 年の記録．*LEPTALINA*, (96/97): 401-406.
- 福田晴男，1994. 八王子市南大沢の蝶．*LEPTALINA*, (114/115/116): 473-484.
- 福田晴男，1995. 杉並区大宮八幡宮でオオミドリシジミ．*LEPTALINA*, (119): 493-494.
- 福田晴男，1997. 〈自刊—世田谷の蝶—その後の注目すべき記録 8〉 世田谷のオオミドリシジミ．*LEPTALINA*, (130): 537-538.
- 福田晴男，2010. 日本のホシミスジ中間報告．*TSUIISO*, (1337/1338): 1-30.
- 福田晴男，2012. 東京都八王子市陣馬山でムモンアカシジミを目撃．羽化，(31): 33.
- 浜栄一・石井実・柴谷篤弘（編），1989. 日本産蝶類の衰亡と保護 第 1 集．日本鱗翅学会．145 pp.
- 鎌倉正人，1983. 東京都多摩丘陵における蝶 2 種の記録．月刊むし，(147): 33-34.
- 鎌倉正人，2009. 多摩丘陵東部の注目すべき蝶の記録 (2005 ～ 2008 年)．相模の記録蝶，(23): 136-139.
- 久居宣夫・矢野亮・久保田繁男，2006. 皇居の蝶類相モニタリング調査 (2000-2005). 国立科博専報，(43): 137-159.
- 倉地正・栗山定（編），2007. 東京都の蝶類データ集 2007. グループ多摩虫．188 pp.
- 真中二郎，1995. 練馬区の蝶．*LEPTALINA*, (123/124): 509-515.
- 松原豊，1984. 東京都におけるヒメシジミの記録．*LEPTALINA*, (59): 249-250.
- 森本峻，2005. 東京都葛飾区水元の蝶．昆虫文献六本脚．136 pp.
- 西多摩昆虫同好会（編），1991. 東京都の蝶．けやき出版．200 pp.
- 青梅市郷土博物館（編），1982. 青梅市の自然 II (含む南関東の蝶類 (6) ジャノメチョウ科及び追加資料)．青梅市郷土博物館．534 pp.
- 大橋田鶴子，2010. 東京都小金井市でアサマイチモンジ目撃撮影．多摩虫，(55): 63-64.
- 佐久間聡，2010. あきる野市横沢入における注目すべきチョウ類．うすばしろ，(41): 14-16.
- 白水 □，2006. 日本産蝶類標準図鑑．学習研究社．336 pp.
- 杉並区環境清掃部環境課（編），2003. 杉並区自然環境調査報告書（第 4 次）．杉並区環境清掃部環境課．142 pp.
- 杉並区環境清掃部環境課（編），2008. 杉並区自然環境調査報告書（第 5 次）．杉並区環境清掃部環境課．405 pp.
- 田中剛，1991. 八王子市陣馬山のウスイロオナガシジミとハヤシミドリシジミ．*LEPTALINA*, (100): 417-418.
- 東京都杉並区立高円寺中学校生物部，1960. 南関東の蝶類 (3) シロチョウ科．POLYPUS 会．66 pp.
- 東京都杉並区立高円寺中学校生物部，1961. 南関東の蝶類 (5) シジミチョウ科．杉並区立高円寺中学校生物部．72 pp.
- 東京都杉並区立高円寺中学校生物部，1962. 南関東の蝶類 (6) タテハチョウ科．杉並区立高円寺中学校生物部．96 pp.
- 八木下潤，2009. 檜原村都民の森でキバネセセリを目撃．うすばしろ，(38): 21.

(8) チョウ目ガ類

1 選定・評価方法の概要

昆虫の中でもガ類は、たくさんの種類があり、多種多様で非常に繁栄している仲間である。日本産蛾類大図鑑(1982, 講談社)によると、日本では4,578種が知られていた。その後、新発見などで種類数が増加し、現在では6,000種を超える種が日本に産し、将来は7,000種以上産するのではないかとされている。ガ類の多くは、その食性から環境の指標となりうるものが多く、環境アセスメントの評価に際し役立っている。東京都のガ類の記録は、昆虫採集のメッカとして有名だった高尾山をはじめ、奥多摩、多摩川流域などのものがある。しかし、発表されたものは少なく、多くの記録が日の眼を見ないで埋もれてしまっている。また、発表も散発的で、東京都全体のまとまった目録は作成されていない。

東京都の1998年版レッドリストでは、ガ類は対象外であった。それは、都内で継続してガ類の調査が行われることが少なかったこと、ガ類の研究者が減少し調査が行われていないこと、都市化により灯火が増え、夜間のトラップ採集が難しくなったことなどが理由と考えられる。今回、ガ類をレッドリストの対象に加えるにあたって、確実に絶滅と考えられる種と、大型で目立ち、衰退がある程度認識できる種に絞って検討対象種をリストアップした。他にもリストアップすべきと思われる種は多数あったが、調査不足、情報不足から衰退が不明で、ほとんどが評価できないという結果となってしまうので、やむをえず除外した。その結果、今回の改定での検討対象種は7種とした。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定性的要件を用いた。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、本レッドリストの掲載種は7種となった。今回、絶滅(EX)と判断したのは、カバシタムクゲエダシャク、タケウチエダシャク、マエアカヒトリの3種である。カバシタムクゲエダシャクは小金井市(蛾類大図鑑で清瀬市とあるのは間違い)のクヌギ林で1958年の3月に採集された♀1個体の記録しかなく、その後の探索でもみつかっていない。タケウチエダシャクは、戦前の記録しかなく、国立科学博物館には三鷹で1941年4月、高尾山で1933年4月に採集された個体が所蔵されている。戦後の確実な記録はない。マエアカヒトリは、以前は害虫とされており、石神井、清瀬、立川、八王子市などで採集されていた。1960年代以降、急速に減少し、現在では他の多くの地域で絶滅危惧種にリストアップされている。イボタガは、区部では大田区、世田谷区などで1965年頃までは生息していたが、その後の生息は確認されていないので絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)とした。同じくクスサン、ウスタバガも区部では同様のCR+ENとした。都区内の自然が残っている地として有名な皇居、赤坂御所などで継続してガ類の調査は行われているが、この3種は採集されていない。南多摩地域、北多摩地域などの山間部ではこれらの種の衰退ははっきりわかっていない。オオミズアオは区部で一度非常に減少したが、最近は復活してきたようで皇居などで生息が確認されている。この種は山間部では普通に産し、問題はない。今回、調査、情報不足のため検討対象種にリストアップしなかったガ類には、高尾山をタイプロカリティ*として記載されたタカオキリガ、平地のクヌギ林に生息するヤガ科のシタバ(カトカラ)類のほか、河川敷、湿地のガ類などがある。また、藁ぶき屋根の家屋がなくなったことにより、その屋根に生えるコケ類を食すヤネホソバ、シロホソバなどのコケガ類の衰退も注意が必要である。

* 分類・命名に使用した基準となる標本を採集した地点。

(岸田 泰則)

カバシタムクゲエダシャク

Sebastosema bubonarium

チョウ目(鱗翅目)
シャクガ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	EX	○	○	EX	CR

【形態・生態】

開張♂ 32～38mm。前翅の地色は灰紫色で、横脈上に大きな円形の紋がある。外横線は黒色で目立つ。後翅は橙黄色。♀は翅が退化しており、♂と全く異なる。年1化3月の早春に出現する。

【分布の概要】

本州(秋田、栃木、新潟、群馬、東京)

【都における生息環境】

雑木林など二次林に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1961年に小金井公園から1♀が記録された以外、東京都本土部における正式な記録は皆無で、東京都では絶滅したと考えられる。絶滅した原因については不明である。

【関連文献】

矢島稔, 1961; 中島秀雄, 1991.



(執筆: 岸田泰則)

タケウチエダシャク

Biston takeuchii

チョウ目(鱗翅目)
シャクガ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
○	EX	EX	○	EX	

【形態・生態】

開張 66～75mm。翅の地色は、桃灰色。前翅の基部は白色。2本の黒色の横帯が目立つ。♀は、大型で、翅はやや丸味を帯び、腹が太い。年1化、4月に出現する。

【分布の概要】

本州(関東、中部、大阪)、四国(高知)

【都における生息環境】

雑木林など二次林に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前(1930年代)に井の頭公園や八王子市浅川で採集された記録や標本が残っている。戦後、東京都本土部における正式な記録は皆無で、東京都では絶滅したと考えられる。絶滅した原因については不明である。

【関連文献】

平山修次郎, 1937; 井上寛ら, 1982.



(執筆: 岸田泰則)

イボタガ

Brahmaea japonica

チョウ目(鱗翅目)
イボタガ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
CR EN	CR EN	VU	VU	VU	

【形態・生態】

開張 80～115mm。紋様は、波状の縞模様で構成され、前翅の中央に円形の眼状紋がある。♂♀で斑紋の差はない。年1化、4月に出現する。幼虫の食餌植物は、モクセイ科のイボタノキ、モクセイ、トネリコ、ネズミモチなどである。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

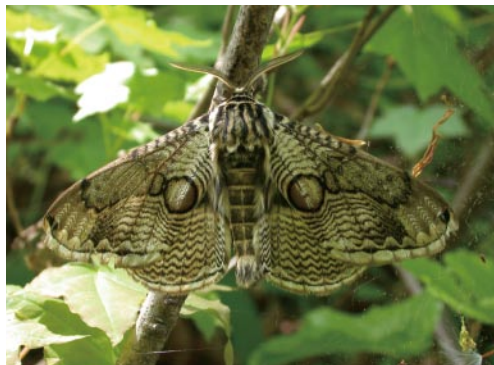
雑木林や自然林などの樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1960年代までは、区部にも生息していた。1970年以降、区部における記録がなく、危機的状況であると考えられる。南多摩の山地、奥多摩などの山間部では、現在でも生息している。

【関連文献】

岸田泰則, 1984; 田中剛, 1996.



(執筆: 岸田泰則)

クスサン

Saturnia japonica

チョウ目(鱗翅目)
ヤマモユガ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
CR EN	VU	○	○	○	

【形態・生態】

開張 100～130mm。翅の色彩は個体変異が著しく、灰黄褐色から橙黄褐色まで様々である。後翅の大きな眼状紋が特徴。年1化、9～10月に出現する。幼虫の食餌植物としてクリ、クヌギ、コナラ、サクラ、ウメ、イチョウ、クスノキなど様々な樹木が記録されている。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島

【都における生息環境】

雑木林など二次林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では1970年頃から都市化の進行に伴って減少しはじめ、最近ではほとんど見る事ができない。郊外の里山では普通に生息する。

【関連文献】

平山修次郎, 1932; 田中剛, 1996.



(執筆: 岸田泰則)

ウスタビガ

Rhodinia fugax

チョウ目(鱗翅目)
ヤマモユガ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
CR EN	VU	○	○	○	

【形態・生態】

開張♂ 75～90mm、♀ 80～110mm。♂♀により、翅形、色彩が異なる。♂の地色は赤褐色から黄褐色で、前翅の翅頂部は突出する。♀は翅の地色は黄色で、翅形は丸味を帯びる。マユは特有な形をしており、ツリカマスと呼ばれる。年1化、10～11月の晩秋に出現する。幼虫の食餌植物として、クヌギ、コナラ、カシワ、サクラ、ケヤキなどが記録されている。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

雑木林や自然林などの樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では1970年代以降、確実な記録はなく、激減していると考えられる。郊外や山間部では、現在でも見る事ができる。

【関連文献】

平山修次郎, 1932; 田中剛, 1996.



(執筆: 岸田泰則)

オオミズアオ

Actias aliena

チョウ目(鱗翅目)
ヤマモユガ科

区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
VU	VU	○	○	○	

【形態・生態】

開張 80～120mm。翅の地色は青白色。夏型の個体は黄色味を帯びるものがある。前翅前縁は赤茶色。尾状突起は♂の方が長い。年2化、5月と7～8月に出現する。幼虫の食餌植物として、サクラ、ウメ、ナシ、リンゴ、コナラ、カエデ類などが記録されている。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、対馬

【都における生息環境】

雑木林や自然林などの樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では1970年代以降激減したが、現在でも目撃や採集記録がわずかながらあり、細々と生息していると考えられる。郊外や山間部では普通に産する。

【関連文献】

田中剛, 1996; 大和田守ら, 2000.



(執筆: 岸田泰則)

マエアカヒトリ

Aloa lactinea

チョウ目(鱗翅目)
ヒトリガ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	本 土 部	環 境 省
EX	EX	EX	EX	EX	NT

【形態・生態】

開張 55～62mm。両翅は純白色。前翅の前縁が深紅色を呈しており、美しい。腹部は、橙黄色と黒色のトラ縞模様を呈する。成虫を手で摘むといやな臭いがする。年2化、6月と8月に出現する。かつては、トウモロコシ、大豆などの害虫として知られ、また農地周辺のヨモギやミゾハギなども食草として記録されている。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

【都における生息環境】

河川敷の草原や畑地に生息していたと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

練馬区、井の頭公園、立川市、高尾山、陣馬山などから記録があり、1960年代までは生息していたと考えられる。1970年以降、記録は絶え、東京都本土部では絶滅したと考えられる。

【関連文献】

平山修次郎, 1932; 岸田泰則, 2008.



(執筆者: 岸田泰則)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、神保宇嗣，2004-2008. 日本産蛾類総目録 . <http://listmj.mothprog.com/> に準拠した。

【関連文献】

平山修次郎，1933. 原色千種昆虫図譜 . 三省堂 . 186 pp. + 104 pls.

平山修次郎，1937. 原色千種続昆虫図譜 . 三省堂 . 194 pp. + 88 pls.

井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛，1982. 日本産蛾類大図鑑 . 講談社 . 1548 pp.

岸田泰則，1984. 大田区の蛾，大田区公害環境部公害対策課 (編). 大田区の昆虫 大田区自然環境保全基礎調査報告書，pp. 13-19. 東京都大田区 .

岸田泰則，2008. ヒトリガ雑記帳 (2) 関東周辺の *Aloa lactinea* (Cramer) マエアカヒトリの記録 . 蛾類通信，(250): 446-447.

中島秀雄，1991. カバシタムクゲエダシャクと思われる雌の採集記録 . 蛾類通信，(163): 229.

大和田守・有田豊・岸田泰則・池田真澄・神保宇嗣，2000. 皇居の蛾類 . 国立科博専報，(36): 115-168.

田中剛，1996. 東京都区部の蛾 2 . GA・SHOW. 71 pp.

矢島稔，1961. フユシャクの生態 . 自然，16(12): 38-39.